

京都府遺跡調査報告集

第133冊

1. 藏垣内遺跡第11次
2. 長岡京跡右京第953次(7ANGNU-3地区)
3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡
4. 長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次
(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡
5. 魚田遺跡第7次

2009

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡
伊賀寺地区



(1)火葬墓S K03全景(南から)



(2)火葬墓S K26全景(南東から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は「京都府遺跡調査報告集」として、平成19・20年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部(現・建設交通部)の依頼を受けて行った蔵垣内遺跡第11次の発掘調査報告、京都府乙調土木事務所の依頼を受けて行った長岡京跡右京第953次の発掘調査報告、大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡の発掘調査報告、長岡京跡右京第910・940次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡の発掘調査報告、京都府建設交通部の依頼を受けて行った魚田遺跡第7次の発掘調査報告の5本を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた概要は下記のとおりである。
 1. 蔵垣内遺跡第11次
 2. 長岡京跡右京第953次
 3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡
 4. 長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡
 5. 魚田遺跡第7次
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	蔵垣内遺跡第11次	亀岡市千歳町国分四反田・広垣内・正田・内垣内	平19.10.15～平20.3.10	京都府土木建築部(現・建設交通部)	岡崎研一
2.	長岡京跡右京第953次(7ANGNU-3地区)	長岡京市西の京地内	平20.9.24～12.3	京都府建設交通部	柴 暁彦
3.	大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡	長岡京市下海印寺伊賀寺・調子2丁目、調子3丁目、乙調郡大山崎町字円明寺小字松田	平20.5.7～7.30	京都府乙訓土木事務所	岩松 保 中川和哉 森島康雄
4.	長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	長岡京市友岡西畑、下海印寺伊賀寺・下内田	平19.7.26～平20.1.30 平20.4.24～10.31	京都府乙訓土木事務所	増田孝彦
5.	魚田遺跡第7次	京田辺市大住大峯	平20.10.6～11.12	京都府建設交通部	村田和弘

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。但し、長岡京城の調査については、過去の調査との関係から、旧座標を用いている。
4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。
5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 蔵垣内遺跡第11次発掘調査報告	1
2. 長岡京跡右京第953次(7ANGNU-3地区)発掘調査報告	21
3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告	25
4. 長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	71
5. 魚田遺跡第7次発掘調査報告	93

付表目次

3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡

付表1 調査一覧	26
----------	----

挿図目次

1. 蔵垣内遺跡第11次

第1図 調査地周辺主要遺跡分布図	1
第2図 調査トレンチ配置図	3
第3図 A地区遺構配置図	4
第4図 A地区土層断面図	4
第5図 S K 358実測図	5
第6図 出土遺物実測図(1)	5
第7図 S H 327・315実測図	7
第8図 出土遺物実測図(2)	8
第9図 S H 328・314・313実測図	9
第10図 S H 312・311実測図	10
第11図 D-1・E-1地区遺構配置図	11
第12図 S D 45実測図	12
第13図 出土遺物実測図(3)	12
第14図 S K 39実測図	12
第15図 S H 105・S K 104実測図	13
第16図 出土遺物実測図(4)	13

第17図	S B 14実測図	14
第18図	S K 50実測図	14
第19図	出土遺物実測図(5)	14
第20図	出土遺物実測図(6)	15
第21図	出土遺物実測図(7)	16
第22図	G地区遺構配置図	17
第23図	S B 65実測図	18
第24図	S K 41・39実測図	18
第25図	出土遺物実測図(8)	19

2. 長岡京跡右京第953次(7ANGNU-3地区)

第1図	調査地位置図	21
第2図	調査トレンチ配置図	21
第3図	調査地平面図	22
第4図	1～3区土層断面図	23
第5図	出土遺物実測図	24

3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡

第1図	調査地位置図	25
第2図	伊賀寺・樽井地区調査トレンチ配置図	26
第3図	伊賀寺地区1～3トレンチ主要遺構配置図	28
第4図	伊賀寺地区1トレンチ検出遺構配置図	29
第5図	1トレンチ土層図	30
第6図	伊賀寺地区1トレンチ竪穴式住居跡S H02・炉跡実測図	30
第7図	伊賀寺地区1トレンチ竪穴式住居跡05実測図	31
第8図	伊賀寺地区1トレンチ土坑S K 13実測図	31
第9図	伊賀寺地区2トレンチ検出遺構	33
第10図	伊賀寺地区2トレンチ土層柱状図	33
第11図	伊賀寺地区2トレンチ竪穴式住居跡S H01、竪穴式住居跡S H 25実測図	34
第12図	伊賀寺地区2トレンチ炉跡S K 24、S H 25炉跡実測図	34
第13図	伊賀寺地区2トレンチ火葬墓S K 03実測図	34
第14図	伊賀寺地区2トレンチ火葬墓S K 26実測図	35
第15図	伊賀寺地区2トレンチ土坑S K 20実測図	36
第16図	伊賀寺地区2トレンチ土壇墓実測図(1)	38
第17図	伊賀寺地区2トレンチ土壇墓実測図(2)	39

第18図	伊賀寺地区2トレンチ溝S D05実測図	40
第19図	伊賀寺地区3トレンチ検出遺構	41
第20図	伊賀寺地区3トレンチ土層図	41
第21図	伊賀寺地区3トレンチ炉跡S K19実測図	42
第22図	伊賀寺地区出土遺物実測図(1)	44
第23図	伊賀寺地区出土遺物実測図(2)	46
第24図	伊賀寺地区出土遺物実測図(3)	47
第25図	伊賀寺地区出土遺物実測図(4)	49
第26図	伊賀寺地区出土遺物実測図(5)	50
第27図	伊賀寺地区出土遺物実測図(6)	52
第28図	伊賀寺地区出土遺物実測図(7)	53
第29図	伊賀寺地区出土遺物実測図(8)	53
第30図	伊賀寺地区出土遺物実測図(9)	54
第31図	仮製地図に表れた崖線	56
第32図	樽井地区土層断面図	57
第33図	円明寺・調子地区調査トレンチ配置図	57
第34図	調子地区土層断面図	58
第35図	円明寺地区土層断面図・柱状図	59
第36図	円明寺地区出土遺物実測図	61
第37図	暦年較正年代グラフ	65
第38図	試料および剥片	68

4. 長岡京跡右京第910次・941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡

第1図	調査地位置図	71
第2図	トレンチ配置図	72
第3図	トレンチ土層柱状図	73
第4図	1・5トレンチ平面図	73
第5図	2・4トレンチ平面図	74
第6図	掘立柱建物跡S B40・179・180実測図	75
第7図	溝S D02・30断面図	76
第8図	土坑S K146実測図	76
第9図	土坑S K150実測図	77
第10図	鍛冶炉1実測図	77
第11図	3・4トレンチ平面図	78
第12図	掘立柱建物跡S B120・121実測図	79

第13図	竪穴式住居跡 S H190実測図	80
第14図	土坑 S K140実測図	80
第15図	掘立柱建物跡 S B130実測図	81
第16図	竪穴式住居跡 S H175実測図	82
第17図	出土遺物実測図(1)	83
第18図	出土遺物実測図(2)	84
第19図	土坑 S K222実測図	85
第20図	土坑 S K298実測図	85
第21図	掘立柱建物跡 S B330実測図	86
第22図	7トレンチ平面図	87
第23図	土坑 S K263実測図	87
第24図	土坑 S K221実測図	88
第25図	出土遺物実測図(3)	88
第26図	出土遺物実測図(4)	89
第27図	出土遺物実測図(5)	90

5. 魚田遺跡第7次

第1図	調査地と周辺の遺跡	93
第2図	調査トレンチ配置図	94
第3図	第1トレンチ平面・断面図	95
第4図	第2トレンチ平面・断面図	96
第5図	第3トレンチ平面・断面図	97
第6図	出土遺物実測図	98
第7図	京都府京田辺市魚田遺跡の位置	99
第8図	魚田遺跡付近の様子	99
第9図	上部の黒灰色粘質土の下部にみられる耕作痕	100
第10図	トレンチ北壁にみられる破堤堆積物	100
第11図	礫まじり粗粒砂層にみられる平行葉理(下部)と斜交葉理(上部)	101
第12図	細粒砂層にみられるクライミングフォーセット葉理(下部)と平行葉理(上部)	101
第13図	泥層に掘られた人工の溝に洪水流が流れ込んで堆積した破堤堆積物の含礫砂層(白色部)	102
第14図	トレンチ壁(北壁と南壁)で測定した古流向	103

図版目次

1. 蔵垣内遺跡第11次

- 図版第1 (1)遺跡全景(南上空から) (2)A地区全景(左が北)
- 図版第2 (1)D-1・E-1地区全景(右が北) (2)G地区全景(左が北)
- 図版第3 (1)A地区SK358近景(南から) (2)A地区SK358近景(左上が北)
(3)A地区SH327近景(南西から)
- 図版第4 (1)A地区SH327近景(南西から) (2)A地区SH315近景(南東から)
(3)A地区SH315近景(南西から)
- 図版第5 (1)A地区SH328近景(南東から) (2)A地区SH315内遺物出土状況(南東から)
(3)A地区SH311近景(南から)
- 図版第6 (1)D-1地区SD45近景(西から)
(2)D-1地区SD45内遺物出土状況(南西から)
(3)D-1地区SK39近景(南から)
- 図版第7 (1)D-1地区SH105・SK104近景(北東から)
(2)D-1地区SH105近景(南東から)
(3)D-1地区SB14近景(南から)
- 図版第8 (1)D-1地区SK50近景(北西から) (2)G地区SK41近景(北から)
(3)G地区SK39近景(南から)
- 図版第9 出土遺物1
- 図版第10 出土遺物2

2. 長岡京跡右京第953次(7ANGNU-3地区)

- 図版第1 (1)調査前状況(北から) (2)調査前状況(南から)
(3)調査前状況(南から) (4)1区自然流路跡SR59301全景(南から)
- 図版第2 (1)1区南壁土層断面(北東から) (2)1区南壁土層断面(部分)(北から)
(3)2区の状況(北から) (4)2区近景(南から)
- 図版第3 (1)2区土層断面(北西から) (2)2区土層断面(部分)(西から)
(3)3区全景(南から) (4)3区近景(南から)
- 図版第4 (1)3区溝SD95302断面(西から) (2)3区溝SD95302断面(西から)
(3)出土遺物

3. 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡

伊賀寺地区

- 図版第1 (1) 1 トレンチ南西部全景(北西から) (2) 1 トレンチ北東部全景(西から)
- 図版第2 (1) 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H02 全景(南東から)
(2) 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H05 全景(南西から)
(3) 1 トレンチ土坑 S K13 全景(西南西から)
- 図版第3 (1) 1～3 トレンチ全景(上が北) (2) 2 トレンチ全景(南西から)
- 図版第4 (1) 2 トレンチ火葬墓 S K03 全景(南西から)
(2) 2 トレンチ火葬墓 S K03 全景(上が南)
- 図版第5 (1) 2 トレンチ火葬墓 S K03 土層(南西から)
(2) 2 トレンチ火葬墓 S K03 完掘状況全景(南東から)
(3) 2 トレンチピット S P18 内遺物出土状況(東から)
- 図版第6 (1) 2 トレンチ溝 S D05 全景(北から)
(2) 2 トレンチ火葬墓 S K26 全景(南東から)
- 図版第7 (1) 2 トレンチ火葬墓 S K26 内人骨検出状況(南西から)
(2) 2 トレンチ火葬墓 S K26 内人骨検出状況(北から)
(3) 2 トレンチ火葬墓 S K26 完掘状況(南西から)
- 図版第8 (1) 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H01 全景(北西から)
(2) 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H25 全景(北から)
- 図版第9 (1) 2 トレンチ土坑 S K20 検出状況(北から)
(2) 2 トレンチ土坑 S K20 半割状況(東から)
(3) 2 トレンチ土坑 S K20 完掘状況(西から)
- 図版第10 (1) 1 トレンチ東端部サブトレンチ(南から)
(2) 1 トレンチ東端部サブトレンチ内検出崖面(南西から)
(3) 2 トレンチ崖面 S X29 全景(東北東から)
- 図版第11 (1) 2 トレンチ土壙墓 S K07・06・21・09(南から)
(2) 2 トレンチ土壙墓 S K21・09(西から)
(3) 2 トレンチ土壙墓 S K02(東から)
- 図版第12 (1) 2 トレンチ土壙墓 S K27(東から) (2) 2 トレンチ土壙墓 S K19(北から)
(3) 2 トレンチ土壙墓 S K11(西から)
- 図版第13 (1) 3 トレンチ全景(南から) (2) 3 トレンチ全景(北から)
- 図版第14 (1) 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H20 全景(南東から)
(2) 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H20 床面遺物出土状況(北西から)
(3) 3 トレンチ炉跡 S K19 完掘状況(北東から)
- 図版第15 (1) 出土遺物 1 (2) 出土遺物 2
- 図版第16 (1) 出土遺物 3 (2) 出土遺物 4
- 図版第17 (1) 出土遺物 5 (2) 出土遺物 6

図版第18 出土遺物 7

図版第19 出土遺物 8

樽井地区

図版第20 (1)調査トレンチ前景(南から) (2)東壁土層(西から)

調子地区

図版第21 (1)1 トレンチ全景(北から) (2)2 トレンチ全景(西から)
(3)2 トレンチ東壁(西から)

円明寺地区

図版第22 (1)長岡京跡右京第939次・松田遺跡2 トレンチ全景(南東から)
(2)長岡京跡右京第940次・碓遺跡1 トレンチ全景(北東から)
(3)長岡京跡右京第940次・碓遺跡3 トレンチ全景(南東から)

図版第23 (1)長岡京跡右京第940次・碓遺跡3 トレンチ東壁(西から)
(2)長岡京跡右京第940次・碓遺跡4 トレンチ全景(南から)
(3)長岡京跡右京第940次・碓遺跡4 トレンチ西壁(東から)

図版第24 (1)長岡京跡右京第940次・碓遺跡4 トレンチ南壁(北から)
(2)長岡京跡右京第940次・碓遺跡5 トレンチ全景(西から)
(3)長岡京跡右京第940次・碓遺跡出土遺物

4. 長岡京跡右京第910次・941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡

図版第1 (1)調査地全景1～3 トレンチ(上が北)
(2)調査地全景1～8 トレンチ(上が北東)

図版第2 (1)調査地全景3・4 トレンチ(上が南東)
(2)調査地全景1～3 トレンチ(上が北西)

図版第3 (1)1・2 トレンチ調査前全景(南西から)
(2)3・4 トレンチ調査前全景(北東から)
(3)1 トレンチ全景(南から)

図版第4 (1)2・3 トレンチ全景(北から)
(2)2 トレンチ土坑 S K 149 検出状況(北東から)
(3)2 トレンチ土坑 S K 149 遺物出土状況(南東から)

図版第5 (1)2 トレンチ S K 149 完掘状況(北東から)
(2)2 トレンチ掘立柱建物跡 S B 40(北から)
(3)2 トレンチ掘立柱建物跡 S B 40(西から)

図版第6 (1)2 トレンチ溝 S D 02・30 全景(西から)
(2)2 トレンチ土坑 S K 150(北から)
(3)2 トレンチ掘立柱建物跡 S B 179(北西から)

- 図版第7 (1) 2 トレンチ掘立柱建物跡 S B 180(南西から)
 (2) 3 トレンチ掘立柱建物跡 S B 120・121(南西から)
 (3) 3 トレンチ掘立柱建物跡 S B 120(西から)
- 図版第8 (1) 3 トレンチ掘立柱建物跡 S B 121(南西から)
 (2) 3 トレンチ土坑 S K 140(南から)
 (3) 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 190遺物出土状況(西から)
- 図版第9 (1) 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 190完掘後(南西から)
 (2) 4 トレンチ全景(東から) (3) 4 トレンチ掘立柱建物跡 S B 130(北から)
- 図版第10 (1) 4 トレンチ竪穴式住居跡 S H 175(南東から)
 (2) 4 トレンチ竪穴式住居跡 S H 175(北西から)
 (3) 4 トレンチ竪穴式住居跡 S H 175遺物出土状況(東から)
- 図版第11 (1) 5 トレンチ調査前全景(南西から) (2) 5 トレンチ西半分全景(東から)
 (3) 5 トレンチ東半分全景(南西から)
- 図版第12 (1) 5 トレンチ掘立柱建物跡 S B 330(北西から)
 (2) 5 トレンチ土坑 S K 222(南から)
 (3) 5 トレンチ土坑 S K 222完掘状況(南から)
- 図版第13 (1) 5 トレンチ土坑 S K 298(南から) (2) 6 トレンチ調査前全景(南から)
 (3) 6 トレンチ全景(北から)
- 図版第14 (1) 6 トレンチ全景(北西から) (2) 7 トレンチ調査前全景(南から)
 (3) 7 トレンチ全景(南から)
- 図版第15 (1) 7 トレンチ土器溜まり S K 221・不明遺構 S K 263(北から)
 (2) 7 トレンチ不明遺構 S K 263(東から)
 (3) 7 トレンチ土器溜まり S K 221(東から)
- 図版第16 (1) 7 トレンチ土器溜まり S K 221遺物出土状況(北から)
 (2) 7 トレンチ土器溜まり S K 221二耳壺出土状況(西から)
 (3) 7 トレンチ土器溜まり S K 221完掘状況(東から)
- 図版第17 出土遺物 1
- 図版第18 出土遺物 2

5. 魚田遺跡第7次

- 図版第1 (1) 調査地遠景(西から) (2) 調査前全景(南西から)
 (3) 第1 トレンチ重機掘削作業風景(東から)(上が西)
- 図版第2 (1) 第1 トレンチ全景(西から) (2) 第1 トレンチ人力掘削作業風景(北西から)
 (3) 第1 トレンチ東壁断面(西から)
- 図版第3 (1) 第1 トレンチ北壁断面① (2) 第1 トレンチ北壁断面②

(3) 第2トレンチ全景(西から)

図版第4 (1) 第2トレンチ溝状遺構掘削作業風景(南から)

(2) 第2トレンチ溝状遺構完掘状況(南から)

(3) 第2トレンチ溝状遺構完掘状況(東から)

図版第5 (1) 第2トレンチ南壁断面(南から) (2) 第2トレンチ南壁と溝状遺構(北から)

(3) 第3トレンチ全景(西から)

図版第6 (1) 第3トレンチ南壁と溝状遺構(北東から)

(2) 第3トレンチ南壁と溝状遺構(北から)

(3) 出土遺物

1. 蔵垣内遺跡第11次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、亀岡園部線地方道路建設に先立ち、京都府土木建築部(現・建設交通部)の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。道路は、桂川下流に架かる保津橋から、千歳町運動公園付近で現在の府道に合流するルートが計画された。道路建設に伴う今回の調査対象地は、亀岡市千歳町国分内を南北に縦断する幅約8m・総延長約900mの範囲である。この範囲にかかる遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である蔵垣内遺跡と、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期後半から飛鳥時代中頃にかけて形成された国分古墳群である。

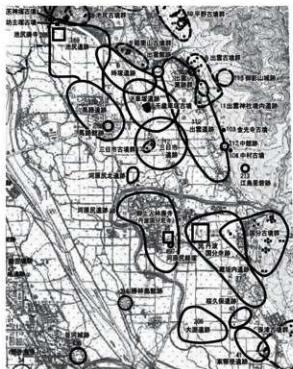
調査を実施するにあたって、便宜上、調査対象地を南から北へA～Lの12地区に分けた。また、諸条件により数回に分けて調査した地区については、地区名-数字で表記した。

今回の調査は、A・D-1・E-1・G地区で実施した。この範囲にかかる遺跡は、蔵垣内遺跡である。当遺跡は、東西1,000m・南北1,250mの範囲で広がり、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、平成16～18年度に隣接地の発掘調査が行われ、その詳細が明らかになりつつある。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長小池寛・専門調査員岡崎研一・調査員筒井崇史が担当した。調査面積は、約2,480㎡である。発掘調査を行うにあたり使用した座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

本報告の執筆は、岡崎のほか、縄文土器については乾茂年(奈良大学学生)が行った。文責については各項の末尾に記した。

現地作業を実施するにあたり、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得、また地元自治会・地権者・地元住民の方々のご理解とご協力を頂いた。記して謝意を表する。なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部(現・建設交通部)が負担した。



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図
(1/50,000 「亀岡市道路地図」を改変)

2. 位置と環境

亀岡盆地は、京都市が所在する京都盆地の北西に隣接し、盆地中央を桂川が南流する。桂川東岸地域では、桂川に並行する形で馬路町から保津町にかけて、低位段丘が続く。この段丘上に数多くの遺跡が存在する。ここ数年続いた国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴う発掘調査によって、多くのことが明らかになりつつある。

以下、桂川東岸地域の主要遺跡を概観する(第1図)。

縄文時代の遺跡としては、早期の土器が出土した案察使遺跡、後期の土器が出土した車塚遺跡がある。いずれも包含層出土物である。晩期の土器棺が、大淵遺跡で検出されている。

弥生時代の遺跡としては、前期の竪穴式住居跡を検出した大淵遺跡や、土壘墓を検出した池尻遺跡がある。中期前半の遺跡には、方形周溝墓が検出された池尻遺跡がある。南丹波地域を代表する古い段階の方形周溝墓群である。続く中期後半には、馬路遺跡・時塚遺跡や車塚遺跡で方形周溝墓が営まれるようになる。時塚遺跡では円形や方形の竪穴式住居跡も検出され、集落域と墓域が共存することが明らかとなり、南丹地域の弥生時代中期の集落の様相が明らかとなった。後期の遺跡としては、蔵垣内遺跡や馬路遺跡から竪穴式住居跡が、池尻遺跡から方形周溝墓が見つかる。

古墳時代の集落遺跡としては、蔵垣内遺跡、時塚遺跡や出雲遺跡などから竪穴式住居跡がみつかる。前期古墳としては、向山古墳が知られるのみである。中期になると、中期後半に築造された坊主塚古墳や天神塚古墳が、亀岡市と南丹市の境付近に存在する。両古墳は、二段築成の方墳である。坊主塚古墳は、造出しと二重周濠をもち、仿製神鏡鍔や武具などが副葬されていた。近年の発掘調査で新たに発見した時塚古墳群は、中期後半から後期前半に築造された古墳である。特に1号墳は、埴輪・葺石をもつ首長墓の1基と考えられ、盾持ち人形埴輪をはじめ、武器、馬具や農具などが副葬されていた。後期になると、前方後円墳が築造される。後期初頭に築造された保津車塚古墳(案察使1号墳)は、全長53mを測り、二重周濠をもつ。二段築成の墳丘には葺石を施し、石見型木製品を立てる。後期前半に築造された千歳車塚古墳は、三段築成の墳丘と二重周濠をもち、丹波地域を代表する盟主墳と考えられている。

古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけて、数多くの横穴式石室を内部主体とする古墳が築かれるようになる。蔵垣内遺跡北部に所在する国分古墳群もこの時期のものであり、最近の発掘調査によって横穴式石室が27基以上確認され、その総数が激増したところである。中でも、国分45号墳は八角形を呈す。このような多角形墳は、天皇陵や官人層の墓に採用されるが、近年地方における調査事例から、飛鳥時代にみられる墳丘装飾の例として、多角形にめぐらせる列石が報告されている。45号墳も墳形に八角形を採り入れており、中央と関連した有力者の墓と位置づけられている。

飛鳥時代には、池尻遺跡から馬路遺跡にまで及ぶ灌漑水路と竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が営まれるようになる。その他に蔵垣内遺跡や河原尻遺跡においても住居跡が認められた。この時期に、かなり広範囲にわたって大規模な水田開発と集落の形成がなされたようである。

奈良時代には、亀岡市域は丹波国に含まれる。池尻遺跡から柵や溝によって囲まれた区画内に、計画的に配置する大型の掘立柱建物跡群が見つかった。官衙的な様相の濃い建物群とされ、出土遺物から奈良時代前半の短期間で廃絶した丹波国府関連の施設群とも考えられている。中頃には各地に国分寺・国分尼寺が建立される。蔵垣内遺跡に隣接する段丘縁辺部に国分寺と国分尼寺が存在する。三日市遺跡では、国分寺創建時の瓦を焼成し、水運を利用して国分寺まで運んでいたようである。また奈良時代の山陰道は、国分寺・国分尼寺から池尻遺跡の官衙的な施設にかけて、段丘に沿う形で存在したとする説が有力とされている。しかし、山陰道に関連する遺構の検出には至っていない。

平安時代の遺跡は、馬路遺跡から掘立柱建物跡が見つかった。この中に総柱建物もあり、倉庫群が存在した可能性がある。

中世になると、蔵垣内遺跡から掘立柱建物跡や土坑などがみつき、中世後期の丹波国分寺に関連する遺構と考えられた。これは、在地領主層の居館もしくは寺院関係の施設である子院と思われる^(図2)。

次に、農地整備事業に伴う発掘調査によって明らかになった蔵垣内遺跡内での各時期の遺構の広がりを概観する(第2図)。ここに記す地区名は、今回の第11次調査時に設定したものである。

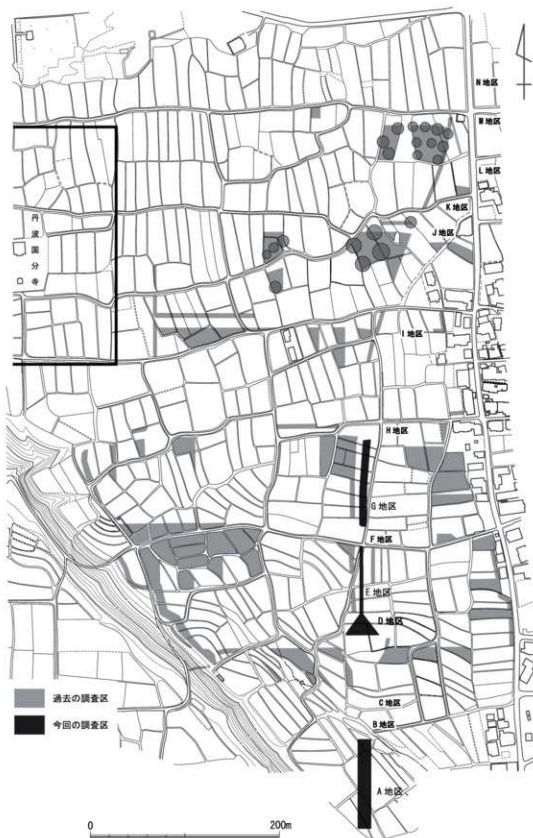
E・D地区付近では、縄文土器が包含層から出土した。L・M地区付近から弥生時代後期の竪穴式住居跡が見つかり、この付近に後期の集落が展開する。G・E地区の東側には古墳時代前期の竪穴式住居跡が見つかり、この時期には遺跡南東部の府道沿いに集落が営まれるようになる。古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけては、J～M地区付近にかけて、古墳が築かれるようになる。また、飛鳥時代から奈良時代初頭にはC～G地区付近にかけて竪穴式住居跡が展開する。続く奈良時代中頃になると国分寺・国分尼寺が建立され、C・D地区付近に奈良時代の遺構が存在する。国分寺南東約400m付近のC地区付近からは正方位の建物群が見つかり、官衙的な施設であると考えられた。平安時代の遺構は希薄であり、当時の様相については不明な点が多い。中世になると、I地区西側に遺構が集中することから、この付近に中世国分寺に関連する子院などの施設が存在すると考えられている。

今回の調査地は、段丘縁辺部のA地区とD～G地区間にあたることから、縄文土器を包含する層が一部かかり、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落跡などを検出することが予想された。

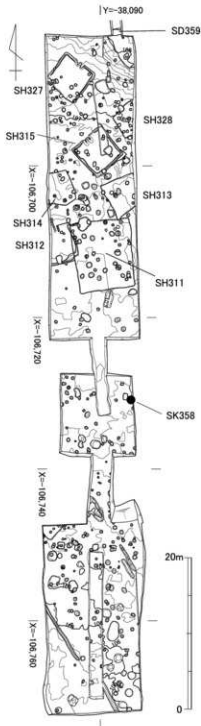
3. 調査概要

(1) A地区(第2～4図)

この地区はC地区南側の段丘中段域にあたり、C地区より約6m低い。C地区付近では、農地整備事業に伴う発掘調査で竪穴式住居跡や掘立柱建物跡を多数認めている。調査開始前は50cmほどの段差が連続する段々地形を呈しており、その南側は段丘崖となることから、遺構はさほど遺存していないと考えられた。調査対象地に、遺構の有無を確認するための試掘トレンチを3か所設定し掘削した。その結果、段々地形は後世のもので、南に向かって緩やかに下がる地形が認



第2図 調査トレンチ配置図

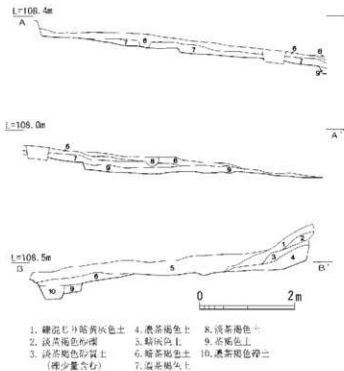


第3図 A地区遺構配置図

められ、この傾斜面を掘り込み形で竪穴式住居跡の一部と柱穴などを検出した。この結果を踏まえて、段丘中段の線路部分全域を拡張した。A地区北端は、暗茶褐色土や濃茶褐色土の遺物包含層が約30cm堆積しており、包含層上位に赤色焼土が径約30cmの範囲で見られる所もあった。焼土に伴う明確な土色の違いは認められなかったが、住居跡などの遺構が、包含層を切る形で存在した可能性が高いと思われた。SH315付近から南側は、遺物包含層は認められなかった。今回検出した遺構は、包含層下位あるいは地山面を掘り込み形で検出した遺構で、土器棺1基・竪穴式住居跡7基・欄列1条・溝1条・土坑2基・柱穴群などである。またC地区との比高差が約6mあることから、どのあたりで急斜面になるか旧地形観察のための試掘トレンチをA地区北端に設定し掘削した。A地区北端から北方4m付近から約30°の傾斜で段丘が存在することがわかった(第4図B-B')。

1) 弥生時代 この時代の遺構は、土坑SK358である。

土坑SK358(第5図) A地区中央付近から検出した。掘形は、東西0.44×南北0.37m、深さ約0.2mである。そこに弥生時代中期の甕(1)を横にし、甕の体部片(2)を蓋にした状



- | | | |
|--------------|----------|-----------------------|
| 1. 緑泥じり暗黄灰色土 | 4. 濃茶褐色土 | 8. 淡茶褐色土 |
| 2. 淡黄褐色砂層 | 5. 緑灰色土 | 9. 赤褐色土 |
| 3. 淡赤褐色砂質土 | 6. 暗茶褐色土 | 10. 濃茶褐色砂土
(稀少量含む) |
| | 7. 濃茶褐色土 | |

第4図 A地区土層断面図

態で出土した土器棺である。中の土から、骨などは認められなかった。

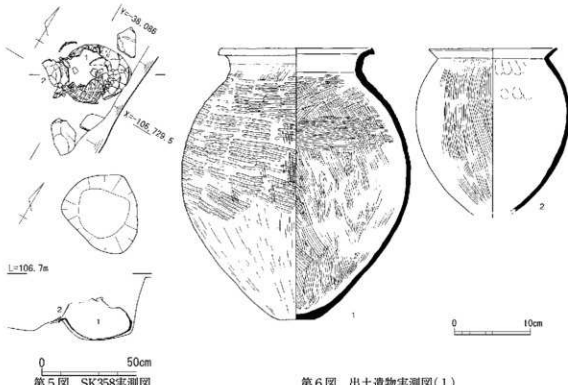
出土遺物(第6図) 1は、口縁部が緩やかに大きく外反する甕である。体部外面は上半が叩きのちハケ調整、下半はヘラ削りを施す。内面は体部上半部が斜めのハケ調整、中位は横方向のハケ調整、下半を縦方向のハケ調整を施す。2は、口縁部が大きく屈曲する甕である。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整を施す。

2)飛鳥時代 この時期の遺構は、竪穴式住居跡SH327・315の2基である。

竪穴式住居跡SH327(第7図) A地区北端で検出した住居跡である。その規模は、5.0×5.0m、深さ約0.2m、N37°Eを測る。北東辺中央に竈が付く。竈の規模は、長さ1.0m、幅1.1mを測る。両袖部の内法は、約0.4mである。南西辺中央付近を除いて、周壁溝がめぐる。周壁溝の途切れる所が住居への出入口であったと思われる。周壁溝の規模は、幅約30cm、深さ約10cmである。主柱穴は、各コーナー周壁溝寄りに設けられ、径約30cm、深さ約20cmを測る。住居内埋土中から須恵器杯蓋(4)・杯身(5)・甕の体部片が出土した。

竪穴式住居跡SH315(第7図) A地区北側で検出した住居跡である。試掘調査で住居跡の一部を確認した。住居の規模は、5.0×5.1m、深さ約0.2m、N42°Wを測る。北西辺中央に竈が付く。竈の規模は、長さ0.8m、幅1.1mを測る。両袖部の内法は、約0.4mである。竈付近を除いて幅40cm、深さ約20cmの周壁溝がめぐる。主柱穴は南の2か所はコーナー周壁溝寄りに、北の2か所は中央寄りに設けられ、径約30cm、深さ約20cmを測る。竈内から土師器甕(8)、竈右側の周壁溝付近から土師器壺(7)、南西辺中央付近の床面から土師器片とともに須恵器脚(6)、埋土中から須恵器杯蓋(3)が出土した。

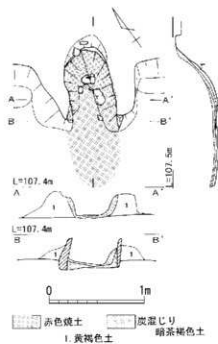
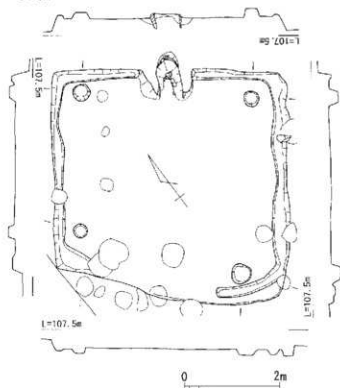
出土遺物(第8図) 3・4は、杯皿蓋である。天井部はヘラキリ後簡単なナデ調整する。5は、



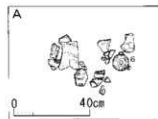
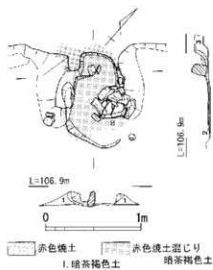
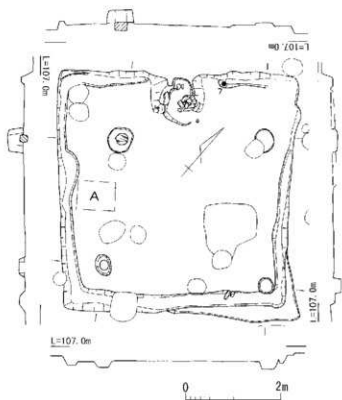
第5図 SK358実測図

第6図 出土遺物実測図(1)

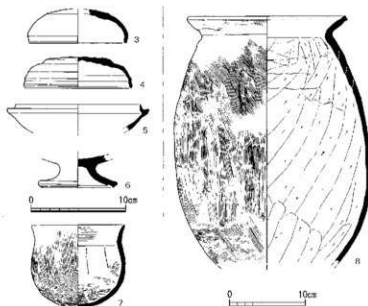
SH327



SH315



第7図 SH327・315実測図



第8図 出土遺物実測図(2)

杯Hである。底部は欠損しており不明である。口縁部は内上方に短く立ち上がる。3～5は飛鳥時代中頃に位置づけられる。6は、高杯の脚部である。短脚で端部は下方に尖る。7は、土師器甕である。体部内外面はハケ調整を、口縁部内面は、横方向のハケ調整を施す。8は、長胴の甕である。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はヘラ削りを施す。

3) 時期不明 出土遺物がな

く時期決定には至らなかった遺構は、竪穴式住居跡S H311～314・328の5基である。

竪穴式住居跡S H328(第9図上) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、3.5×3.5m、深さ約0.05m、N36°Wを測る。非常に残りが悪く、東半分は調査地外になるため、その全容については不明である。支柱穴は、コーナー寄りから3か所で検出した。その規模は、径約30cm、深さ約10cmを測る。竈や周壁溝は認められなかった。出土遺物はないが、S H327と主軸がほぼ平行するから、同時期の住居の可能性はある。

竪穴式住居跡S H314(第9図中) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、4.0×4.0m以上、深さ約0.1m、N19°Wを測る。非常に残りが悪く、西側が調査地外になるため、全容については不明である。支柱穴は、コーナー寄りから3か所で検出した。その規模は、径約30cm、深さ10～20cmを測る。竈や周壁溝は認められなかった。

竪穴式住居跡S H313(第9図下) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、4.6×5.0m、深さ約0.1m、N28°Wを測る。住居の東側が調査地外になるため、全容については不明である。支柱穴はコーナー付近から3か所で検出した。規模は、径約30cm、深さ約10cmを測る。竈や周壁溝は認められなかった。

竪穴式住居跡S H312(第10図上) A地区北側で検出し、S H311に切られた状態で検出した。住居の規模は、5.0×4.0m以上、深さ約0.05m、N15°Wを測る。住居の西側が調査地外になるため、全容については不明である。北辺中央から竈を検出した。S H327・315で検出した竈のように、内側が赤色に焼けているという状況でなく、竈内に炭がわずかに混入していた。竈の規模は、長さ1.6m、幅0.8mを測る。両袖部の内法は、約0.3mである。住居の外まで煙道部は延びていた。竈の遺存状態は悪かったが、煙道部の状況がわかるものであった。東・南辺には、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る周壁溝がめぐる。南東コーナー付近のみ、その幅が0.8mと広い。支柱穴はコーナー付近から2か所で検出した。規模は、径30～40cm、深さ約10cmを測る。

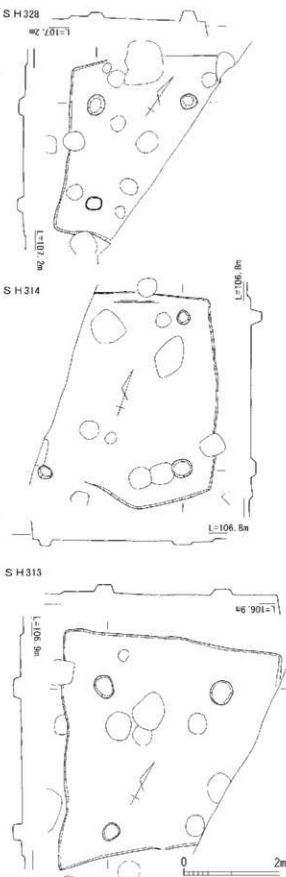
竪穴式住居跡 SH311 (第10図下) A地区北側で検出した住居跡である。その規模は、8.0×9.2m、深さ約0.1m、N6°Wを測る。非常に残りが悪く、南北方向に長い住居であった。今回検出した住居の中で最も大きく、竈や周壁溝は認められなかった。主柱穴は、6か所で認められた。規模は、掘形が0.4~0.8m、深さ約0.3mを測る。他の住居の主柱穴に比べて、大きい。柱痕跡は、径約0.2mである。一辺が3.5~5.0mを測る住居群の中に、この1基のみが数倍の占有面積をもつ。これは、集会する場など他の住居と性格の異なる施設であったためと思われる、この住居跡を中心に集落が展開することも考えられる。

溝 S D359 (第3図) A地区北側に設定した試掘トレンチから検出した、東西方向の溝である。全長約1mを確認した。幅約0.5m、深さ約0.3mを測り、埋土は濃茶褐色礫土である。竪穴式住居跡群北側の高位側から検出し、調査地内に溝の続きが認められなかったことから、B地区からの段丘裾に沿う形で築かれたと思われる。竪穴式住居跡群への雨水を防ぐための溝であったと考える。

柱穴群 (第3図) 柱穴群のうち、遺物が出土したものはわずかであり、また出土遺物も破片であることから、時期決定には至っていない。竪穴式住居跡が埋まってからのものも含まれるため、飛鳥時代またそれ以降の柱穴が存在するものと判断される。A地区南側ほどその密度は希薄となる。

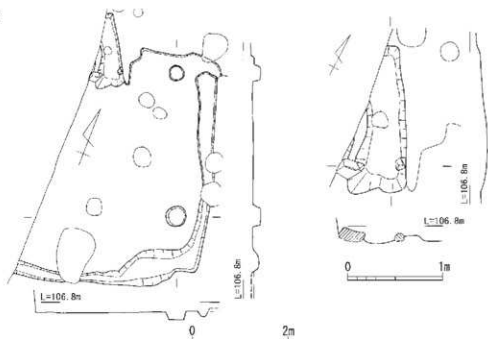
(2) D-1地区(第2・11図)

A地区から北方約110mの交差点付近をD地区とし、その北半部をD-1地区として調査した。この地区から検出した遺構は、方形周溝墓1基・土坑2基・竪穴式住居跡1基・掘立柱建

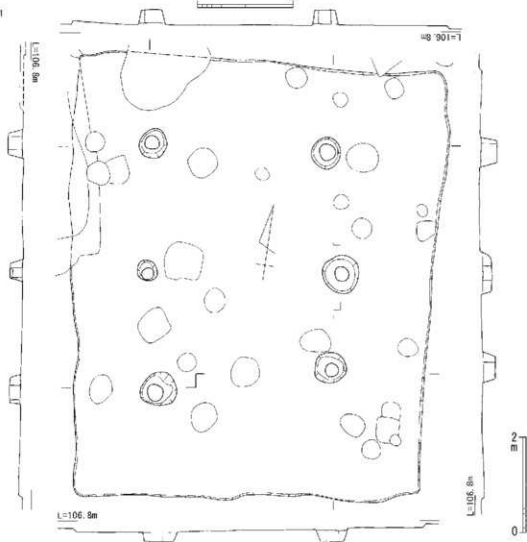


第9図 SH328・314・313実測図

SH312



SH311



第10図 SH312・311実測図

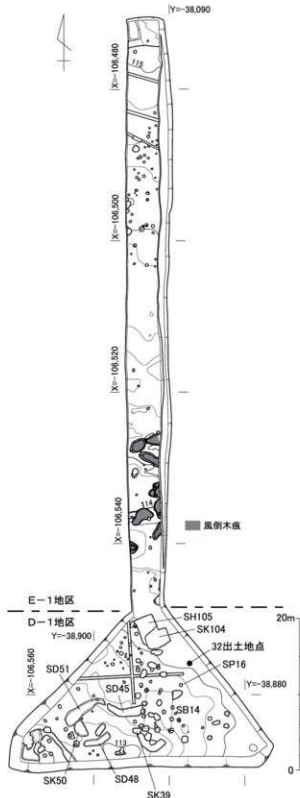
物跡1棟・柱穴群などを検出した。また、当地区北西部の整地層から縄文時代早期の土器や石器が出土した。

1) 弥生時代 この時期の遺構は、方形周溝墓S D45と土坑S K39である。

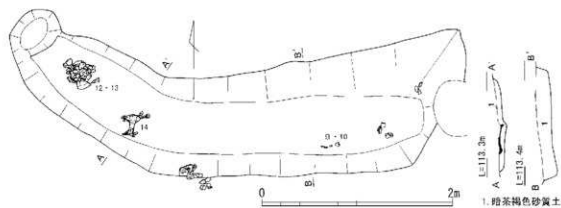
方形周溝墓S D45 (第12図) 調査地中央から、長さ約4.8m、幅1.0~1.4m、深さ0.05~0.15mを測る溝を検出した。溝の底から弥生土器高杯・壺・鉢などが細片の状態出土した。非常に残りの悪い溝からの出土であったが、多くの弥生土器(第13図)を得ることができた。同市所在の時塚遺跡でみられた方形周溝墓群での遺物出土状況に類似することから、S D45も方形周溝墓周溝の一部と考えた。周溝墓の全容・規模については不明であるが、周溝がわずかに弧状をなすことから、南を画する溝であると思われる。また、同様の溝が西側にもみられることから、この付近に数基の方形周溝墓が展開した可能性も考えられる。

土坑S K39 (第14図) 調査地中央付近から検出した。規模は、1.2×0.8m、深さ約0.05mを測る。土坑中央から弥生時代中期の甕が、横たわった状態で出土した。甕の半分以上が後世の削平によって消失していた。甕は摩滅しており、図化できなかった。

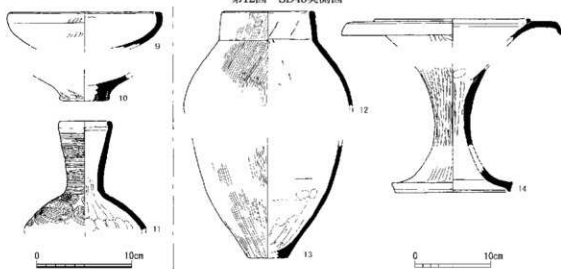
出土遺物 (第13図) 9は、口縁部の平坦な鉢である。口縁部外面にヘラ状工具による圧痕が認められる。10は、底部の破片である。径5cmの円柱状の底部から大きく開く。11は、細頸壺である。頸部外面には直線文と波状文が交互に施され、体部外面には流水文が施される。8条を一単位として直線文や波状文、流水文が施される。12・13は、直口壺で、同一個体である。外面は



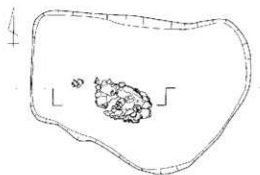
第11図 D-1・E-1地区遺構配置図



第12図 SD45実測図



第13図 出土遺物実測図(3)



L=113.2m

第14図 SK39実測図

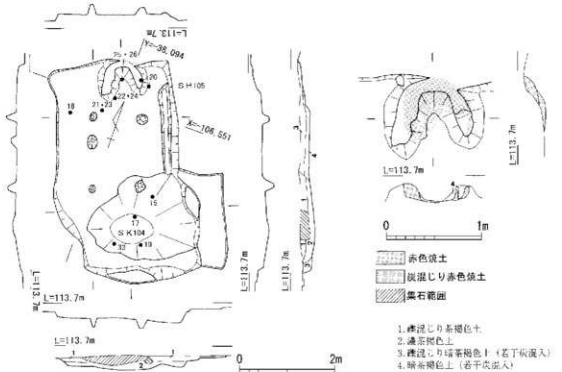
斜め方向のハケ調整を、体部内面はナデ調整を、底部内面にはヘラ削りが施される。14は、水平口縁をもつ高杯である。脚部外面には、縦方向のミガキが施される。脚端部は下方に尖る。

2) 飛鳥時代 この時期の遺構は、竪穴式住居跡SH105である。

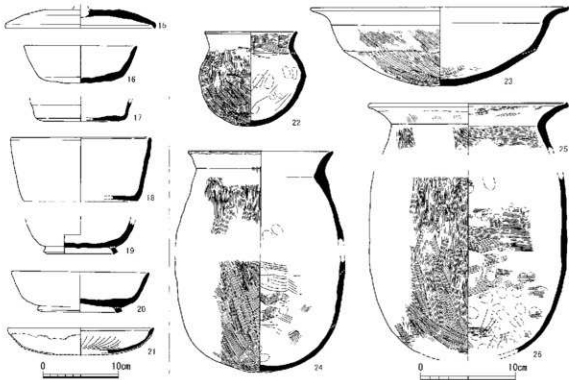
竪穴式住居跡SH105(第15図) 調査地北側で検出した。住居南側が奈良時代の土坑SK104によって削平されていた。規模は、約26×3.6m、深さ約0.2m、N20°Wを測る。小規模な住居である。北辺中央に竈が付く。竈の規模は、1.0×0.9m、両袖間の内法は0.3mを測る。両袖部から竈中央にかけて赤色に焼けていた。東辺に幅約0.2m、深さ約0.04mの周壁溝を設ける。主柱穴は、中央よりの4か所から検出した。柱穴の規模は、径0.15~0.2m、深さ約0.2mを測る。住居北側から、須恵器杯(18・20)、土師器杯(21)・鍋(23)などが細片化した状態で出土した。また、竈の袖付近から土師器壺(22)が完形で出土し、焼焼部か

ら土師器甕の破片(24~26)が出土した。

出土遺物(第16図) 15は、須恵器蓋である。つまみは欠損する。天井部から口縁部にかけて緩やかに傾斜し、端部は下方を向く。16~18は平底の杯である。16・17の底部は、ヘラ切り後雑なナデ調整する。18は、器高の高い杯である。歪みが著しい。19・20は、底部縁部より内側に輪状



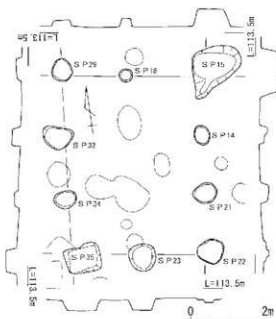
第15図 SH105・SK104実測図



第16図 出土遺物実測図(4)

の高台をめぐる須恵器杯である。21は、土師器皿である。底部内面には放射状に暗文が施される。口縁端部は外上方に尖る。22は、土師器甕である。体部外面には縦横に、口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。体部は球形である。24～26は土師器甕である。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整とナデ調整する。23は、土師器鍋である。口縁部は大きく外反する。外面と底部内面にハケ調整を施す。16は柱穴から、他はSH105から出土した。

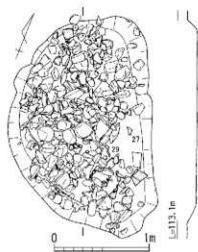
3) 奈良～平安時代 この時期の遺構は、掘立柱建物跡SB14と土坑SK104・50と柱穴群である。



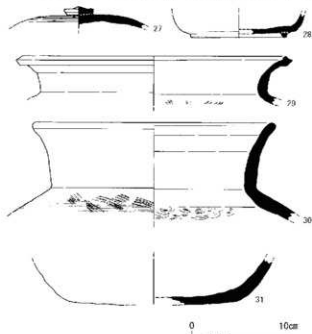
第17図 SB14実測図

掘立柱建物跡SB14(第17図) 調査地中央で検出した掘立柱建物である。規模は、2間(3.5m)×3間(4.7m)、N7°Eを測る。柱穴の掘形は、径0.3～0.7m、深さ0.1～0.3mを測る。ほ場整備に伴う発掘調査で、この付近から同様の建物群を検出しており、官衙的な施設が存在すると考えられている。SB14は、構成施設の1棟と思われる。

土坑SK104(第15図) SH105の南側を切る形で検出した。規模は、1.2×1.5m、深さ約0.3mを測る。すり鉢状に掘られた土坑は、SH105の床面を掘り込んでいた。暗茶褐色土の埋土とともに、拳大から人頭大の礫が多量に埋まっていた。その埋土中から須恵器蓋(15)・杯(17)・

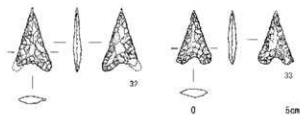


第18図 SK50実測図



第19図 出土遺物実測図(5)

19)が出土したことから、奈良時代とした。また、埋土に混入した状態で石鏃(33)が出土した。



第20図 出土遺物実測図(6)

土坑S K 50(第18図) 調査地西側で検出した。規模は、1.5×2.4m、深さ約0.1mを測る。暗茶褐色土の埋土とともに、拳大ある

いは人頭大の礫が多量に埋まっていた。その中から須恵器蓋(27)・杯(28)・甕片(29~31)が出土した。性格については不明である。

出土遺物(第19図) 27は、須恵器蓋である。扁平なつまみが付く。28は、輪状の高台めぐらせる須恵器杯である。29~31は、須恵器甕である。

柱穴群(第11図) 調査地内から直径もしくは一辺が0.2~0.5mの柱穴が数多く検出できた。時期のわかる遺物としては、須恵器杯(16)であった。また、今回検出した柱穴群の中に、緑釉陶器が出土するものもあった。これは、当地区付近では希薄と思われていた奈良時代から平安時代後期にかけての遺構の存在を示唆するものである。

4) 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかったが、整地層内や土坑埋土中から縄文土器・石器が出土した。

石器(第20図) 32は整地層内から、33はS K104埋土内から出土した。いずれもサヌカイト製の凹基式鏃である。

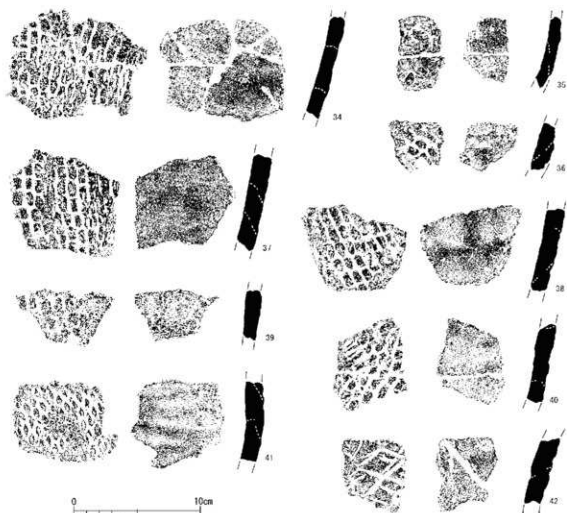
(岡崎研一)

縄文土器(第21図) D-1地区の整地層から、縄文土器が出土した。土器は、大きめの楕円と菱形をしている押型文で、内面に棒状工具による沈線を描いていることから、縄文時代早期中葉の押型文を主文様とする高山寺式土器に比定できる。押型文は、丸棒に文様を彫り込み、器面に押しつけながら施す文様である。出土土器の総数は十数点であるが、図示できた9点には押型文を施文している(34~41は楕円文、42は菱形文)。口縁部や底部といったものは出ておらず胴部片が主である。

34の楕円文の単位としては重複していてわかりにくいのが3単位であり、施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸1.2cm、短軸0.8cm程度である。施文の切り合いは、明確ではないが上から下の順に施文しているのではないと思われる。内面は丁寧なナデ調整を施し、凹凸がほぼ確認できない。35は磨滅してわかりにくいのが、楕円文を施している。単位は確認できないが、施文方向は右下がりと考えられる。楕円文の大きさは、長軸1.1cm、短軸0.7cm程度である。内面はナデ調整を施す。36の文様の単位は表面の磨滅のため、2単位までは確認できた。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸で1.1cm、短軸で0.65cm程度である。内面はナデ調整を施すが多少粗い。37の文様の単位は3単位で、原体長が確認でき2.6cm程度である。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸で1.3cm、短軸で0.7cm程度である。内面は丁寧なナデ調整を行っている。38の文様の単位は3単位で、原体長が確認でき2.4cm程度である。

施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸で1.25cm、短軸で0.7cmである。内面は丁寧なナデ調整を行うが、若干凹凸が見られる。39の文様の単位は磨滅のためわかりにくい、3単位である可能性が高い。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸1.2cm、短軸0.7cmである。内面はナデ調整を行っているが磨滅している。40の文様の単位はわかりにくい、3単位であると思われる。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸1.3cm、短軸で0.8cm程度である。内面はナデ調整を行っている。41は胴部の最も張るところであり、小ぶりの楕円文を施す。単位は3単位もしくはそれ以上であると考えられる。施文方向は右下がりである。楕円文の大きさは、長軸0.9cm、短軸0.55cmである。内面はナデ調整を行っており、部分的に強いナデが目立つ。42は菱形の押型文を施しており、頸部付近に位置する。単位・施文方向は不明である。菱形文の大きさは、長軸3.3cm、短軸2cmである。内面の沈線は0.6cmで、丸みを帯びているため棒状工具による施文であると考えられる。また右肩下がりに施文する。内面はナデ調整を行っている。

出土した土器の部位は胴部下半が主体であり、高山寺式に特徴的な内面沈線が少ないのはそこまで届いていないためと考えられる。内面はナデ調整であり、凹凸がありません。丁寧なナデ調整が行われている。



第21図 出土遺物実測図(7)

型文は基本的に楕円文を呈しており、右下がりの施文方向である。単位は主に3単位で、およその原体長のわかるものもある。菱形文を呈する土器の沈線方向は、右下がりである。凸部の処理が行われていないことや、沈線の間隔がある程度離れていることから、高山寺式でも一番古い段階のものではないと考えられる。しかし他の土器の楕円文の単位や大きさ、41の楕円文が小粒で様相が異なることを考慮すると、多少時期幅があるのかもしれない。

(乾 茂年)

(3) E-1地区(第11図)

D-1の北側に続く地区である。この地区から検出した遺構は、風倒木痕と柱穴群である。

1) 縄文時代 D-1地区の整地層から縄文土器が少量出土したが、この地区からの出土は数点のみである。D-1地区で見られた整地層はこの地区では薄くなり、後世の削平をかなり受けていると思われる。

風倒木痕 調査地南側から、木が倒れた際に大きく攪乱を受けた範囲が数か所で見つかった。南端から検出した風倒木痕の埋土中から、縄文時代早期の土器片が数点出土した。

2) 時期不明 調査地全域からまばらな状況で、柱穴を検出した。

柱穴群(第11図) 調査地内から径0.2m前後の柱穴を検出した。建物などの復原には至らなかった。

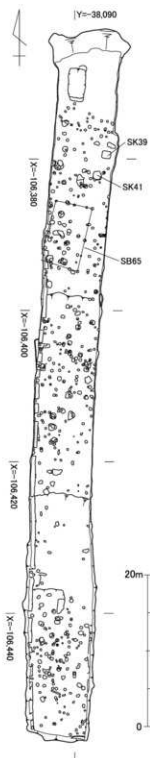
(4) G地区(第22図)

E-1地区北隣に位置する。この地区から検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟・土坑4基・柱穴群である。土坑については、土器や焼土などが認められたものについて報告する。

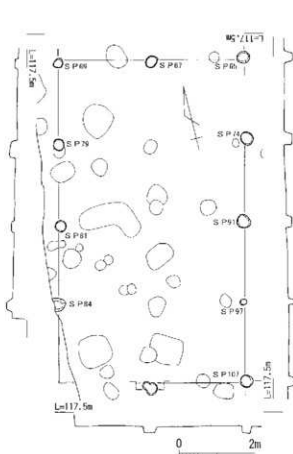
1) 中世 この時期の遺構は、掘立柱建物跡S B65と土坑S K 41・39である。

掘立柱建物跡S B65(第23図) 調査地北側で検出した建物である。規模は、2間(4.9m)×4間(8.6m)、N14°Eを測る。柱穴は、径約0.3m、深さ約0.2mを測る。出土遺物はないが、D-1地区で検出した掘立柱建物跡と比べて、1間の長さが長く、柱穴の規模も小さい。また、ほ場整備事業に伴う発掘調査で、この付近からは瓦器や黒色土器などが出土する建物などがみつかったことから、中世の建物と考えた。

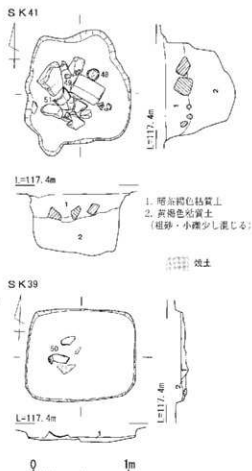
土坑S K 41(第24図上) 調査地北側、S B65の北約4mから検



第22図 G地区遺構配置図



第23図 SB65実測図



第24図 SK41・39実測図

出した。土坑の断面はU字形で、掘形の規模は、1m四方、深さ約0.6mを測る。埋土は、暗茶褐色粘質土であるが、下層には粗砂・小礫が混じる。水溜め場としての素掘り井戸の可能性がある。埋土上層から人頭大の石とともに瓦器碗(48)、白磁(49)と砥石(52)が出土した。

土坑SK39(第24図下) 調査地北側、SB65の北約7mから検出した。規模は、1.2×1.0m、深さ約0.1mを測る。部分的に焼土が認められた。

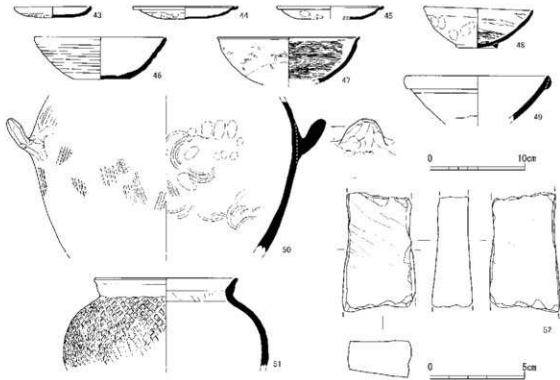
柱穴群(第22図) 調査地全域から、大小さまざまな柱穴を数多く検出した。出土遺物も少なく、時期不明のものが多。

出土遺物(第25図) 柱穴出土の43~45は、土師器皿である。44・45は、「て」字状口縁を呈する。柱穴出土の46は、須恵器碗である。底部には、糸切り痕が残る。土坑状の落ち込みから出土した47とSK41出土の48は、瓦器碗である。47は、内面を緻密にミガキ調整する。48は、内面を粗くミガキ調整する。49は、中国製の白磁碗である。50は、甕である。51は、瓦質土器の甕である。外面を格子状に叩く。52は、砥石である。

4. まとめ

先行して実施された農地整備事業に伴う発掘調査によって判明したこと以外に、今回の調査で明らかになったことを列記する。

- ①当遺跡南側にあたるA地区は、段丘の縁辺部に位置するが、この一段低い段丘面からも弥生



第25図 出土遺物実測図(8)

時代中期の土器棺や飛鳥時代の竈穴式住居跡群を検出した。亀岡市教育委員会がE・G地区西側約200m付近の同じ地形から数多くの遺構を検出していることから、南方から西方にかけての段丘縁辺部にまで遺構が展開することが明らかとなった。

②A地区の土器棺に加え、D-1地区から弥生時代中期の土器を包含する溝がみつき、方形周溝墓であることがわかった。周辺から出土遺物はなかったが同様に湾曲する溝がみつき、この付近に弥生時代中期の墓域が展開することがわかった。

③D-1・E地区から縄文時代早期の押型文を施す土器がややまとまって出土した。整地層や埋土中からの出土であったが、早期の土器が出土した案察使遺跡が当遺跡南側に所在することを含めると、この付近に当時の遺跡が展開すると思われ、今回貴重な資料を得ることができた。

(岡崎研一)

注1 調査参加者(順不同)

調査補助員 天池佐栄子・田中奈津子・坂内裕志・安井蓉子・梅村大輔・谷上真由美・平田陽一・橋爪侑也・大黒浩二・魚谷典主・松浦仁宗・永井拓也・乾茂年・服部健太郎・関めぐみ

整理員 丸谷はま子・中島恵美子・井上聡・茶園矢壽子・清水友佳子・久米政代・春日満子・堀川多津子・高垣真代・岡田聡志

作業員 鳥津イト子・近藤正裕・広瀬秀夫・小泉正男・谷尻小ちえ・安藤美智子・杉崎征夫・八木まゆみ・山田優・平野かすみ・橋本辰彦・西村眞弓・岡本晴子・松田弘和・澤田勲・寺町義則・八木美代子・鴨井秋夫・田中康民・西田和則・野々村博子・安藤恵子・名倉勝・鴨井そと子・安藤恵利奈・中久保静夫

- 注2 村田和弘「2. 馬路遺跡第3次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成15年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』第114冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 石崎善久「3. 三日市遺跡第3次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成15年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』第114冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 石崎善久ほか「1. 池尻遺跡第7次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成16・17年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』第123冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 引原茂治ほか「4. 車塚遺跡第7次」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成16・17年度)発掘調査概報』(『京都府遺跡調査概報』第123冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 石崎善久ほか「蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(Ⅰ)」『国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成16・17・18年度)発掘調査報告』(『京都府遺跡調査概報』第129冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008

2. 長岡京跡右京第953次 (7ANGNU-3地区)発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は平成20年度外環状線(第5工区)地方道路交付金(街路)業務委託に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は京都府長岡京市西の京地内であり、北側は京都市と隣接している。長岡京跡では西二坊大路および大路東側溝の推定地にあたる。また、上里遺跡の東隣接地に位置する^(R21)。調査面積は720㎡である(1区570㎡、2区100㎡、3区50㎡)。

周辺域の調査では、長岡京市長岡第十小学校建設に伴う右京第22・25次の調査において、長岡京期の遺構としては、長岡京跡で最大級の掘立柱建物跡が見つかった。近年では伏見向日町線道路新築工事に伴う調査で、長岡京期の遺構としては一条大路南側溝・西三坊坊間東小路東西両側溝・右京二条三坊八町域の掘立柱建物跡、下層の上里遺跡の成果としては縄文時代晩期の竪穴式住居跡や土器棺墓などが見ついている。

現地の発掘調査にあたっては京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所および地元自治会の方々にお世話になった。記して感謝の意を表する。発掘調査は、調査第2課調査第1係長小池寛、同主査調査員柴映彦が担当した。なお、調査に係る経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。

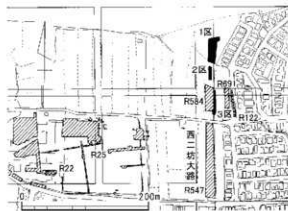
2. 調査の概要(第2～4図)

調査では右京第584次調査の東側隣接地(3区)とその北側の一段下がった水田部分の2か所(1・2区)に調査区を設けた。表土および耕作土は重機により除去した。以下に各地区の概要を述べる。



第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



第2図 調査トレンチ配置図

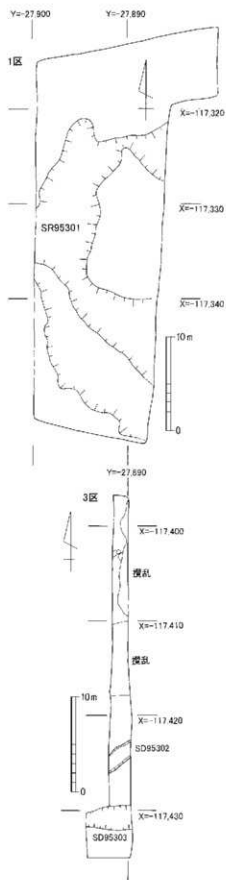
1区 耕作土を除去すると氾濫原中で自然流路跡SR95301を確認した。この流路は北東から南東へ蛇行して流れていた。堆積土は黄灰色および暗灰色砂礫層である。この層には縄文時代晩期から平安時代、中世、近世の遺物を包含していた。この堆積層を除去すると、地下水中のマンガン分が沈着した橙茶色の砂礫層(5層)が堆積していた。この層を重機により約2m掘削すると、人頭大の礫層が続き、遺構は検出できなかった。

2区 幅5m×19mの南北トレンチである。第1層下の灰色粘質土層は4層(2-a-d)に分層できた。出土遺物により中世から近世の堆積土と判断した。遺構は検出していない。この灰色粘質土層を除去すると橙茶色の礫層となる。部分的に青灰色の粘砂質土が堆積していた。この層には磨滅した須恵器の破片が含まれていた。

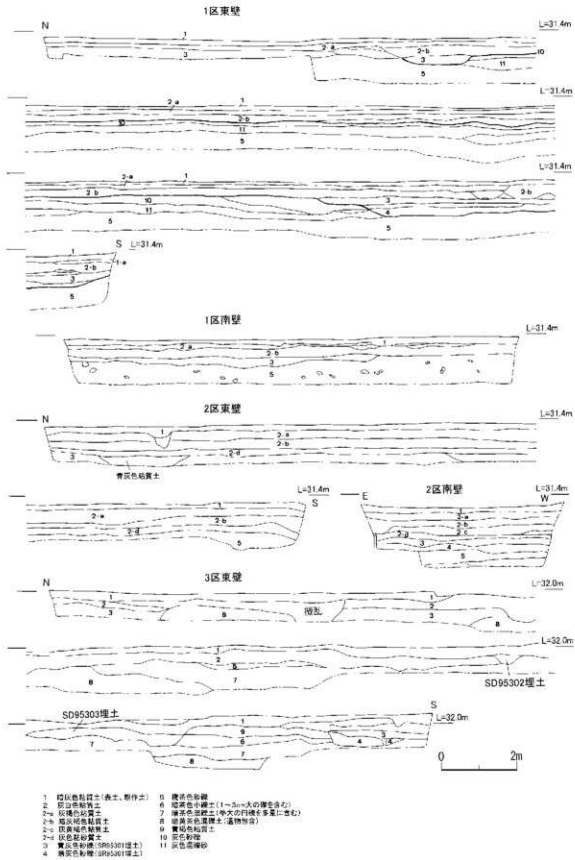
3区 第584次調査地の東側に幅1.3m、長さ38mのトレンチを設定した。表土層を除去すると、北側では灰白色粘質土、南では黄褐色粘質土の遺構検出面となる。北側は攪乱のみで遺構は確認できなかった。南側では溝2条を検出した。SD95302は、幅1.5mを測る断面が皿状の溝である。SD95303は、幅2.4m、深さ0.3mを測る。遺物は古墳時代後期の須恵器杯身の細片がある。また断ち割りによって、この下層で自然流路跡を確認した。堆積土の砂礫中には土師質の土器片が含まれていた。

3. 出土遺物(第6図、図版第4)

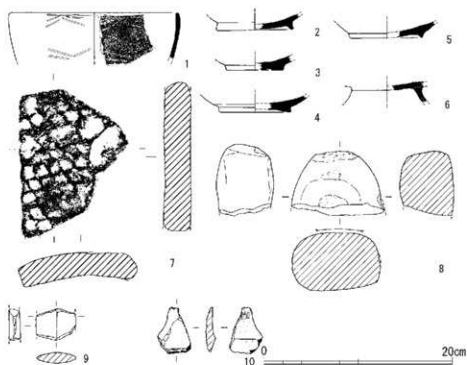
1区から出土した遺物を中心に図示した。1は縄文時代晩期の浅鉢の口縁部片である。口縁端部外面に1条の沈線をめぐらせ、その下に2条一組の山形沈線を上下に相対させて施文している。胎土の色調は黄褐色で角閃石を含んでいる。滋賀里Ⅱ式である。2～6は底部片である。3・4は須恵器の削り出し高台である。5は灰釉陶器である。7は斜格子叩きの平瓦片である。焼成は甘く軟質であり、色調は橙褐色をなす。端面は残存するが、磨滅のため凹面の布目痕跡は確認できない。白鳳期の瓦と考えられる。8は調査中、3区西側の畑で表採した縄文



第3図 調査地平面図



第4図 1~3区土層断面図



第5図 出土遺物実測図(10の黒線りは新しい測線を示す)

時代の敲石である。敲打痕と擦痕が確認できる。9は弥生時代の磨製石剣の刃部片である。鋤は不明瞭ながら確認できるが、欠損部と刃部は河川を流されたことによる磨耗が著しい。10はサヌカイト製のスクレイパーである。

4. まとめ

今回の発掘調査では明確な遺構は確認できなかった。1・2区では氾濫原の自然流路内に流れ込んだ砂礫および砂礫堆積から、磨滅した遺物が数十点出土した。隣接する右京第584次および第691次調査においても顕著な遺構・遺物は見られず、調査地近辺は土地利用が希薄であったと考えられる。ただ、今回出土した格子叩きの平瓦は、小畑川の支流を含む調査地上流域に白鳳期の寺院等の存在を示唆するものである。(柴 暁彦)

注1 今回の調査地は長岡京跡以外には今里、井ノ内、上里遺跡のいずれの範囲にも含まれない。

注2 調査参加者(敬称略)中島恵美子・阿保悠希

参考文献

山本輝雄 「長岡京跡右京第22・25次調査報告書」-長岡京跡右京二条三坊二・七町、上里遺跡-〔長岡京市埋蔵文化財調査報告書〕第11集(財)長岡京市埋蔵文化財センター)1997

山本輝雄 「右京第122次調査概報」〔長岡京市埋蔵文化財センター年報〕昭和157年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター)1983

岩崎 誠 「右京第691次(7 ANGND - 2地区)調査概報」〔長岡京市埋蔵文化財センター年報〕平成12年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター)2002

八木厚之 「長岡京跡右京第584次発掘調査概要」〔京都府遺跡調査概報〕第80冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

上村和直ほか 「長岡京右京二条八・九町跡、上里遺跡」〔京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告〕2006-34(財)京都市埋蔵文化財研究所)2007

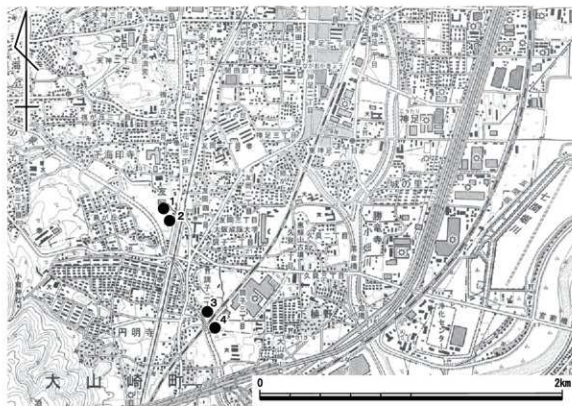
高橋 潔ほか 「長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡」〔京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告〕2007-12(財)京都市埋蔵文化財研究所)2008

3. 大山崎大枝線道路改良事業 関係遺跡発掘調査報告

1. はじめに

京都府を南北に連ねる交通路の整備が進められる中、大山崎町から長岡京市、京都市西部にかけては京都第二外環状道路の建設が計画されている。それに伴い、第二外環状道路周辺の道路整備が計画されており、その一環として、京都府は府道大山崎大枝線道路の改良事業を進めている。今回の調査は、京都府乙調土木事務所の依頼により、府道大山崎大枝線道路の改良事業に伴い実施したものである。調査地点は、府道大山崎大枝線と京都第二外環状道路の接合部分の本調査地1か所（伊賀寺地区）、第二外環状道路内の試掘調査3か所（樽井地区・調子地区・円明寺地区）、計4か所である（第1図）。

本調査を実施した伊賀寺地区は、長岡京市下海印寺下内田地内にあり、長岡京跡右京七条三坊十二町（新条坊呼称で八条三坊十町：以下同じ）に位置し、伊賀寺遺跡内にある。調査対象地は小泉川氾濫源よりも1m近く高い段丘上であり、平成15年度に実施した第二外環状道路関係遺跡の



第1図 調査地位位置図(国土地理院1/25,000京都市西南部)

1.伊賀寺地区R943次 2.樽井地区R943次 3.調子地区R938次 4.円明寺地区R939・940次

試掘調査(右京第799次調査)により、縄文時代から弥生時代にかけての遺構が分布していることが判明していた^(R1)。調査は、農業用水路・農道の確保の関係から、3か所のトレンチに分けて、計1,045㎡を長岡京跡右京第943次調査として実施した。現地調査期間は5月7日～7月30日までを要した。

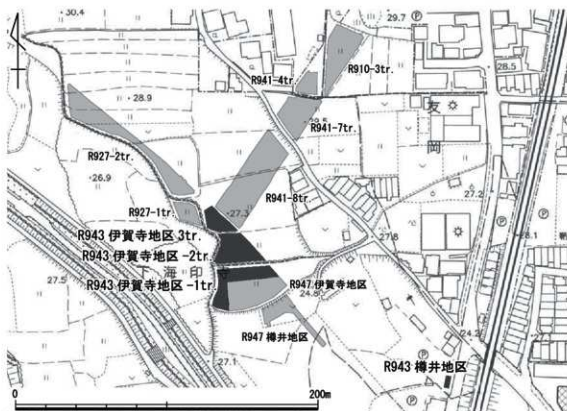
試掘調査は、樽井地区と調子地区・円明寺地区で実施した。

樽井地区は長岡京市友岡樽井地内にあり、長岡京跡右京第943次調査として実施したもので、長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)に位置する。小泉川の旧流路内の土砂を確認した。調査は7月22・23日に実施し、調査面積は10㎡である。

調子地区は、長岡京市調子2丁目にあり、長岡京跡右京九条三坊一町(九条三坊三町)に位置し

付表1 調査一覧

地区名	調査次数	所在地	長岡京推定地、遺跡名	調査面積	現地調査期間	担当
円明寺	右京第940次	長岡京市調子3丁目	長岡京跡右京九条三坊二町(新条坊呼称:右京九条三坊四町)、竈遺跡	430㎡	5月14日～6月27日	森島
	右京第939次	大山崎町円明寺小字松田	長岡京跡右京九条三坊二町(新条坊呼称:右京九条三坊四町)、松田遺跡	150㎡		
調子	右京第938次	長岡京市調子2丁目	長岡京跡右京九条三坊一町(九条三坊三町)	175㎡	5月7日～5月27日	中川
樽井	右京第943次	長岡京市友岡樽井	長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)、友岡遺跡	10㎡	7月22日～7月23日	岩松
伊賀寺	右京第943次	長岡京市下海印寺下内田	長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)、伊賀寺遺跡	1,045㎡	5月7日～7月30日	岩松・石尾



第2図 伊賀寺・樽井地区調査トレンチ配置図

ている。長岡京跡右京第938次調査として実施した。調査地は、現調子集落の所在する高台から、J R西日本鉄道がある南に向けて地形が下り、約4mの高低差を有している。周辺の調査では、低地では右京第851次調査(調子地区)で弥生時代中期・庄内期、中世に至るまでの多くの流路跡が検出されている^(註3)。また高台では、右京第825次調査の14トレンチで平安時代の溝等を確認しており、右京第851次調査(調子地区)では弥生時代と奈良～平安時代の柱穴を確認している^(註4)。対象地内に2本のトレンチを設定したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。現地調査は5月7日から5月27日まで要し、調査面積は175㎡である。長岡京跡右京第938次調査として実施した。

円明寺地区は、長岡京市調子3丁目・大山崎町字円明寺小字松田にあり、長岡京跡右京九条三坊二町(新条坊呼称：右京九条三坊四町)・松田遺跡・畷遺跡に位置している。対象地が1市1町にまたがっており、長岡京市分を長岡京跡右京第940次、大山崎町分を同939次調査として実施した。過去の周辺での調査では、長岡京関係の遺構は確認されていないが、松田遺跡では弥生時代後期～古墳時代の竪穴式住居跡が、畷遺跡では弥生時代後期と古墳時代の竪穴式住居跡などが検出されている。調査は計5本のトレンチを設定して調査したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。現地調査は5月14日から6月27日まで要し、調査面積は右京第939次調査・松田遺跡が150㎡、右京第940次調査が430㎡である。

現地調査は調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員岩松保・森島康雄・中川和哉、専門調査員石尾政信が担当した。総調査面積は1,800㎡である。現地調査及び整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た。また、長岡京市教育委員会、大山崎町教育委員会、京都府教育委員会、地元自治会をはじめ、多くの方々に、ご指導・ご協力をいただいた^(註5)。厚くお礼申し上げます。

2. 調査の概要

(1) 伊賀寺地区の調査

1) 検出遺構

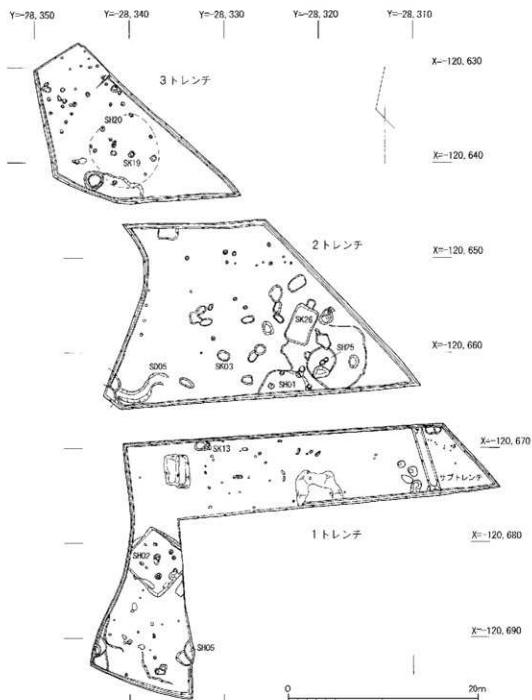
今回の伊賀寺地区の調査対象地は、段丘上に位置しており、西側の小泉川氾濫源とは約1mの高低差がある。平成15年度に実施した右京第799次調査では、小泉川の氾濫源は中世以降に田畑として土地利用されており、段丘上には広範囲に縄文時代の遺構が検出されるものと推定された^(註6)。今回調査した地点の北西側に隣接した位置では、平成19年度に京都第二外環状道路関係遺跡で右京第927次調査が実施されており、縄文時代中期後半の竪穴式住居跡や古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出された^(註7)。今回の調査では、その関連遺構が検出されることが期待された。

伊賀寺地区では、農業用水路と農道の確保のためトレンチを3か所に設定して、遺構・遺物の検出に努めた(第3図)。南から北に向けて1～3トレンチとし、調査面積はそれぞれ425.3㎡・430.4㎡・189.3㎡で、計1,045㎡である。

① 1 トレンチ

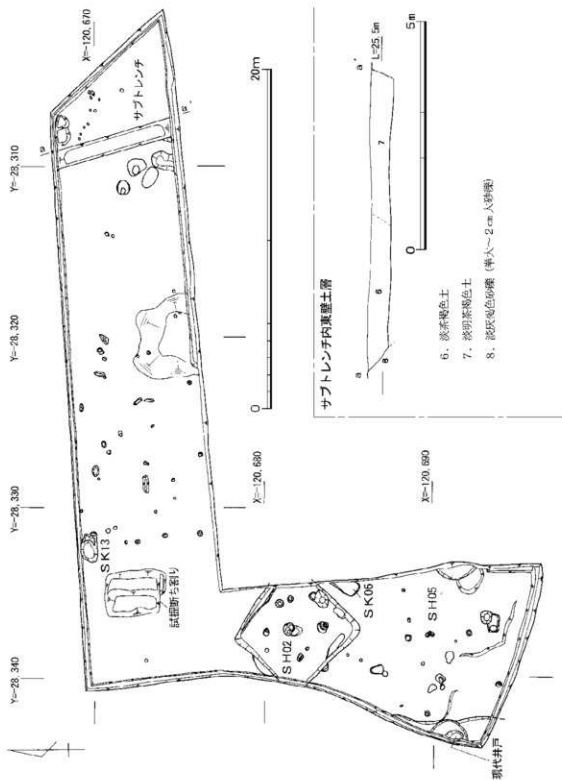
1 トレンチの土層(第5図)は、現耕作土(第1層)下に旧耕作土・床土(第2～4層)が堆積しており、その下位に第5層の暗褐色礫混土がある。この第5層には、若干の須臾器と共に、縄文土

器小片および弥生時代後期～庄内期の土器小片が混じっていた。この下には第6層の淡茶褐色土が堆積していた。第6層上面はトレンチの北西部が高く、ここから東側・南側に向けて緩やかに下る地形をなしている。トレンチ北辺の東西壁で見ると、調査地の西端から約6m東側では、第6層上面は標高26.3m付近にあり、そこから東側に向けて徐々に低くなる。かわりにそれを覆う第5層が徐々に厚くなりつつ堆積している。第6層は調査地東端から6m東側付近では、標高25.85mの高さになっており、そこで第6層の堆積は終わっている。そこから東にかけては、第



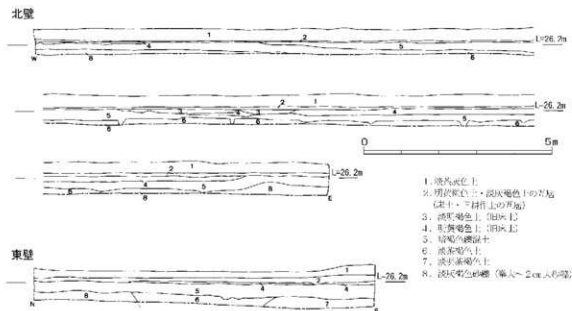
第3図 伊賀寺地区1～3トレンチ主要遺構配置図

6層の下位にある第8層の淡灰褐色砂礫が同レベルに広がっており、トレンチの東端ではやや斜めに上がる堆積となる。このことから、第8層は第6層の下にもぐり込み、第6層の堆積の傾斜とは逆に、西に下る地形を有しているものと判断される。東端付近では、第5層も第8層と同じく、斜めに上がる堆積となっている。最終的にトレンチ東端付近の第6・7層を南北方向に断ち

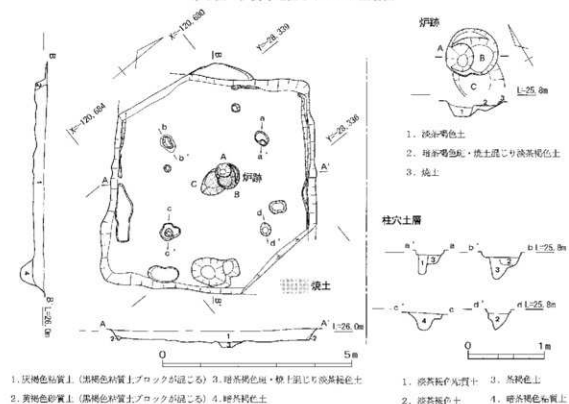


第4図 伊賀寺地区1トレンチ検出遺構配置図

割ったところ、トレンチの北辺付近で第8層が急激に落ち込み、確認しただけでも約50cmの高さの崖面を形成していた(第4図サブトレンチ内東壁土層)。この第8層の崖面は第5図東壁土層でもその一部が認められた。この崖面は、後述のように2トレンチ西南の崖S X 29に向けて東西方向に延びていると推定され、北壁東西土層は、北東から南西に下る傾斜面をほぼ東西方向に観察していることとなる。第6層の東への傾斜と第8層の西への傾斜は、その斜面の落ち込みである



第5図 伊賀寺地区1トレンチ土層図



第6図 伊賀寺地区1トレンチ竪穴式住居跡SH02・炉跡実測図

と理解することができる。そして、先述の第6層と第8層の傾斜の異なりや第5・8層がトレンチの東端部分で東側に上がる傾斜になることも理解できる。

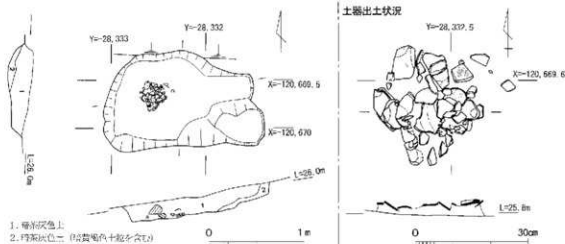
調査は第5層を除去した面、第6～8層の直上で行い、西端では庄内期の竪穴式住居跡・土坑を検出した。トレンチの東半では、小ピットや風倒木痕状の土色・土質の違いを確認したが、確実に遺構と判断できるものはなかった。また、サブトレンチの断ち割りの中からは、第6層を中心にして縄文時代後期の土器片が比較的多く出土したが、この下面では遺構を確認できなかった。

1 トレンチでは、トレンチの西半部で、竪穴式住居跡2基、土坑2基、ピットを検出した。

竪穴式住居跡 S HO2 (第6図) 調査地の南西部で検出した方形の竪穴式住居跡で、5.65×5.8 m、検出面からの深さは最大で40cmである。支柱穴は4基を確認し、径20～40cm、深さ20～25cmである。北東壁の全部と西北壁・西南壁の一部に周壁溝が作られていた。床面のほぼ中央では、3基の土坑が重複していた。重複関係から、C→B→Aの順に新しくなる。A・Bの2基は、壁面が赤く焼けていることから、炉を作り替えたものと判断した。最初の炉跡Cは60cm×60cm以上、深さ20cmで、内部は茶褐色土で埋まっており、土坑の壁面の一部が赤く焼けていた。その北側の炉跡Bは、径約60cm、深さ12cmの円形を呈している。壁面が焼けており(第6図右上第3層)、内部には焼土を含む淡茶褐色土(同第2層)で埋まっていた。この炉跡の西側に重なって径40cm、深さ約30cmのピットAが掘り込まれていた。前2者と異なり、壁面は焼けておらず、埋土に焼土も含まれていなかった。南東辺の中央に80×105cm、深さ32cmの貯蔵穴状の土坑が設けられていた。この土坑の北東隅には、幅50cm、長さ30cm、深さ15cmのテラス状の掘り込みが認められた。この土坑内及び上面の床面よりやや上位で壺(第29図107)、高杯(116)が小片となって集中して出土した。また、炉跡の西側では、床面・埋土中で、高杯(117)の土器片が集中して出土した。これらの土器は、住居を廃棄する段階で、貯蔵穴や竪穴を埋め戻した際に破砕した土器を入れ込んだも



第7図 伊賀寺地区1 トレンチ 竪穴式住居跡05実測図



第8図 伊賀寺地区1 トレンチ土坑 S K13実測図

のと思われる。住居跡の埋土は灰褐色粘質土で、周壁溝を埋める位置には第2層の黄褐色砂質土が堆積していた。

竪穴式住居跡 S H05 (第7図) 調査トレンチの南西部で検出した。検出面からの深さは最大で12cm程度で、部分的には2～3cmしかない。底面で、幅10cm程度、深さ2～5cmの溝が壁面に平行して検出されたことから、竪穴式住居跡の竪穴と周壁溝と判断し、竪穴式住居跡の一部と判断した。平面形は弧状または緩やかなL字状を呈しており、竪穴式住居跡 S H02と同じく隅丸方形の住居跡とすると、その南東隅部分、1.6m×1.6mの範囲に相当する。その大部分は調査地外である。

土坑 S K13 (第8図) トレンチの北西部で検出した土坑で、ほぼ東西方向を向く。長辺は最大で1.7m、短辺は1mで、底面は中央部が最も深く、検出面からの深さは最大で25cmを測る。土坑の南東部は、約10cm下がってテラス状を呈しており、その形状が竪穴式住居跡 S H02の貯蔵穴と近似している。竪穴式住居が削平を受けた可能性がある。中央部やや西側の底面近くでは、弥生時代後期～庄内期の壺・甕(第29図110～112)が破碎された状態で検出した。

土坑 S K06 (第4図) 竪穴式住居跡 S H02の南東に近接して検出した土坑で、幅1.2m、長さ1.5m以上で、調査地外に伸びる。深さは2～5cm程度で、埋土中より庄内期の土器片が出土している。

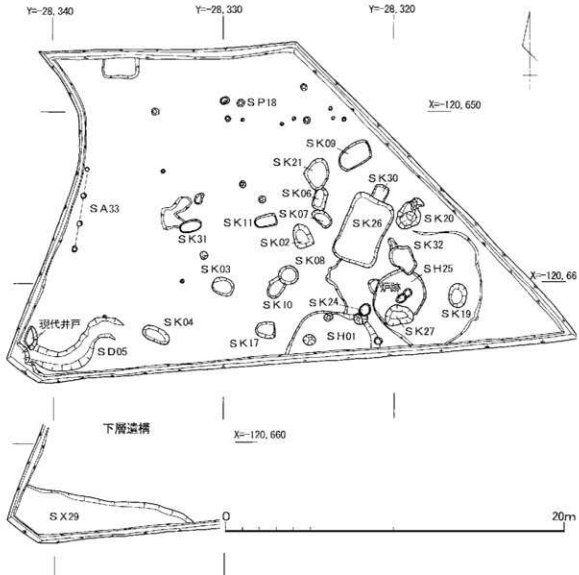
現代井戸 (第4図) トレンチの西南隅で検出した井戸で、埋土は黄褐色砂が埋まっていた。掘削を行っていない。

②2 トレンチ

2 トレンチの現地表面は26.9m付近で、層序は、現耕作土(15～20cm)下に床土・旧耕作土・旧床土が15～40cmあり、その下位に第3層の暗褐色砂礫土が、約30cmの厚さで堆積している。この層の下位には、遺構を検出したベース面である淡茶褐色砂質土層、灰白色砂礫層が堆積している。このベース面の高さは、北東部では26.4m近辺にあり、北西部では26.4m付近、南西部では26.4m付近、南東部では26m付近にあり、大きくは北西から南東に向けて下る傾斜をなしている。暗褐色砂礫土を除去した淡茶褐色砂質土層・灰白色砂礫層上面で、縄文時代から古墳時代までの遺構を検出した。暗褐色砂礫土中には縄文土器片が含まれているが、この下面で古墳時代の遺構を検出したことから、暗褐色砂礫土は古墳時代以降の堆積層と判断される。

遺構としては、縄文時代後期後半の竪穴式住居跡2基以上・火葬墓2基・土壇(墓)16基、古墳時代後期の溝・ピット、平安時代のピット、時期不明のピットを検出した。なお、竪穴式住居跡 S H01から火葬墓 S K26にかけての落ち込み、竪穴式住居跡 S H25の東側をめぐる弧状の落ち込みは、遺構を検出するために掘り下げたものであり、遺構ではない。

竪穴式住居跡 S H01 (第11図) トレンチの中央部やや東側の南辺で検出した半円状の土坑である。竪穴は一辺4.6m程度の隅丸方形もしくは径5～6m程度の円形を呈するものと復元できる。竪穴の埋土は3層に分かれ、第1層の暗茶褐色砂質土内からは多くの土器が出土したが、特に第1層下面に貼り付く状態であった。竪穴の底面は南に向けて約30cm下る傾斜面をなしており、



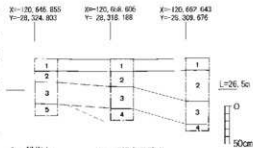
第9図 伊賀寺地区2トレンチ検出遺構

第2・3層中からも土器片が出土したが、それぞれの土層の下面で土器片が集中する状況ではなかった。このような土器の出土状況から、竪穴底面および第1層下面が異なる時期の住居床面であった可能性がある。

この竪穴の第3層下面で半円状に並ぶ柱穴4基を検出した。これらのうち、柱穴cは竪穴上面で検出していたことから、他の柱跡もまた上面から掘り込まれたものと推測される。

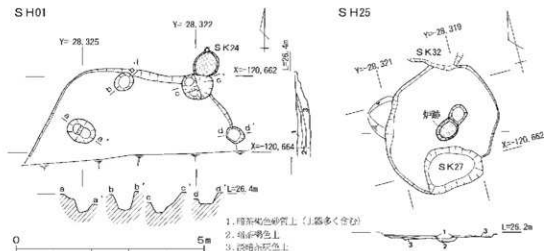
その配置から、竪穴式住居跡の主柱を構成していたものと推測されるが、遺構の先後関係より、竪穴式住居跡SH01に後出する竪穴式住居があったものと推測される。

竪穴式住居跡SH25(第11図) 調査地南東部で検出した円形の住居跡で、短径2.8m、長径3.5mの楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で20cmを測る。主柱穴は検出できなかったが、円形



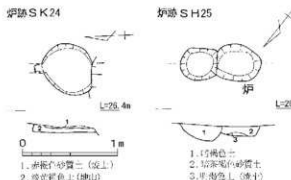
- 1. 耕作土
- 2. 旧層土・床土
- 3. 暗褐色砂礫土
- 4. 灰白色砂礫
- 5. 淡茶褐色砂質土

第10図 伊賀寺地区2トレンチ土層柱状図



第11図 伊賀寺地区2トレンチ竪穴式住居跡SH01、竪穴式住居跡SH25実測図

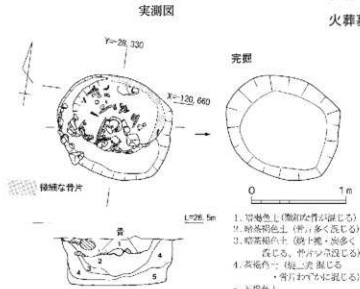
を呈すること、床面中央で炉跡と判断される焼土を検出したことから、竪穴式住居跡と判断した。炉跡は50cm×60cmの楕円形を呈し、竪穴のほぼ中央に位置している。深さは最大で12cmで、底面が赤く焼けていた。炉跡の北東側は、40cm×50cmの円形を呈した深さ約20cmのピットにより破壊されている。竪穴の南辺位置には、土壇墓SK27が上位から掘り込まれている。竪穴式住居跡の炉跡SK24



第12図 伊賀寺地区2トレンチ炉跡SK24、SH25炉跡実測図

床面直上の土砂を洗浄したが、顕著な遺物を回収することはできなかった。

炉跡SK24(第13図) 竪穴式住居跡SH01の北側で検出した焼土で、65cm×75cmの円形を呈する。厚さ5cm弱の焼土が分布しており、炉跡と判断した。南側は、柱穴cにより一部削られている。竪穴が削平され



第13図 伊賀寺地区2トレンチ火葬墓SK03実測図

火葬墓SK03(第12図) トレンチの中央やや南寄りで見出した。平面形は卵形を呈しており、124×105cm、深さ50cmの坑に多数の骨片が納められていた。埋土を回収し洗浄したところ約10kgの骨を回収した。骨は細片となっており、一部に大きな骨が並べたようになっていた。骨は一見してバラバラな状態であり、他処で火葬した後に埋め置かれたものである。

土坑の内部には、最下位に5層

の茶褐色土を10~20cm、その上に焼土・炭が多く混じる3・4層が10cm程度あり、その上位に骨片を多く含む2層の暗茶褐色土が25cm程度堆積していた。比較的大きめの人骨が並べられていたのは2層上面である。この上面に注口土器1点を納めており、これを埋める1層の暗褐色土にもわずかながら骨片が含まれていた。注口土器は注口部が折られて、背後を割られていた。人骨の鑑定によれば、遺骸はすべて骨が新鮮な状態の時に火葬されており、少なくとも10体の人骨が認められ、成人が8体、10代後半と5歳以下の子供各1体を確認できるが、その男女比は不明である。

3・4層の焼土にわずかに骨片が混じることから、遺骸を焼いた場所の焼土を削り取って埋めたと判断される。2層は微細な骨片・骨、炭化物が多く混じり、焼土がほとんど混じらないことから、火葬終了後に、地表上に堆積した炭化物・骨と判断される。2層上面には比較的大きめの骨が並べられていたので、最初に大きな骨だけを取り置いたのであろう。1層にも微細な骨片が含まれていたが、その量もわずかであることから、意図的に骨を混入したものはなさそうである。

注口土器内から出土した炭化物の放射性炭素年代は、暦年較正年代(1 σ)が1608~1570B.C.(23.8%)、1561~1497B.C.(44.4%)である。

火葬墓 S K 26 (第14図) 火葬墓 S K 03の東側約8mのところを位置している。土壌の規模は、405×285cm(最大)、400×240cm(中央)、深さ40cm(最大50cm)である。焼土・微細な骨・炭が厚さ10~15cmの帯状にはいついた。ほぼ全面に焼土・微細な骨・炭化物が分布するが、平面的には4ないし5群に集中するように見える。火葬墓 S K 26では、骨・焼土・炭化物が1セットとなり4~5群をなしていた。これらは微細な骨が散らばった状態であったが、西南部では頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・肩甲骨・四肢長管骨・手骨・足骨といった全身の骨が30×12×12cmの中に、四肢長管骨を中心として東なられた状態であった。1体分の骨を1



第14図 伊賀寺地区2トレンチ火葬墓 S K 26実測図

か所に集めて埋納し、その周囲に焼土・炭化物を置くというのが火葬墓S K26での埋納の仕方であったと想定される。火葬墓S K03と較べて骨片は微細であり、当初人骨とは鑑定できなかったが、残りの良い一群を見つげるに至って、人骨と同定できた。火葬墓S K03と同様、高温で焼かれている。

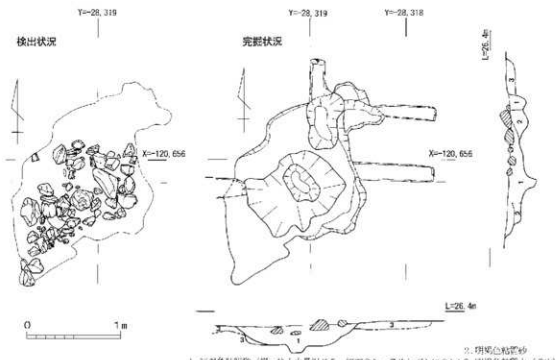
内部の石や土壌の壁面が焼けていないこと、炭・人骨・焼土のセットが層序をなして堆積していないこと、焼土は小さな塊となって砕かれた状態であること、南東部分で検出した人骨は比較的大きく、頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・肩甲骨・四肢長管骨・手骨・足骨が束ねられた状態であることから、他処で火葬された骨・炭化物・焼土が土壌内に納められたと判断した。

土壌内の約1/2の土砂を洗浄して回収した人骨の総量は約1kgである。人骨の鑑定の報告にあるように、細片が多く、特定できたのは南東部の集骨だけで、確実なのは1体だけであるが、焼土・炭・骨の分布からおそらく4～5体以上の骨が納められている。

埋土中には縄文土器片が比較的多く混じるが、意図的に埋納されたようなものは確認できなかった。洗浄土中より、玉(穿孔のあるもの)4点(半裁品)、同石質の小破片約15点を回収し、分析の結果、碧玉であることが明らかとなった。火葬時に着装されていたものかどうか、副葬品であるのか、不明である。また、石鏃4点が出土したが、破損したものである。このほかに、サヌカイトの剥片が多く回収できた。

土壌内から出土した炭化物の放射性炭素年代は、暦年較正年代(1 σ)が1609～1514B.C.(68.2%)である。

土坑S K20(第15図) 火葬墓S K26の北東部で検出した土坑で、火葬墓S K26と重複関係を有し、火葬墓S K26に先行するものである。検出時には、拳大から人頭大の石が集中し、火を受



第15図 伊賀寺地区2トレンチ土坑S K20実測図

けて赤化した石も混じっていた。また、検出面では、わずかながら、炭・焼土が含まれているのが認められた。検出した石礫は、北辺・東辺が直線的に揃っているようにも見えたため、当初、石組み遺構と想定したが、最終的には不定形の土坑の内部に石を入れたものと判断した。南北1.55m、東西1.4mの不整形な方形を呈し、断面を見ると2段の掘形となる。1段目は10～15cm掘られて、ほぼ平らとなり、2段目は、中央に70×90cm、深さ25cmの楕円形のスリバチ状の土坑、北端に30×60cm、深さ10cmの長方形の土坑が穿たれている。検出面からの深さは最大で33cmである。基本的には、第1層の暗褐色粘質砂が埋土としてあり、この土砂中に炭化物・焼土がわずかに認められ、しかも数ミリ程度の骨片も数点出土した。この第1層の上部に石礫が入っていた。第1層の下位には第2層の明褐色粘質砂が部分的に堆積していた。骨片がわずかに出土したが、土坑の形状が不定形であることから、土壙墓とは判断できない。火葬墓S K03・26はともに火葬した場所の焼土を掻き取っているものと推測されることは先述したところであるが、土坑S K20からは焼土・炭化物と共に骨片がわずかに出土したこと、埋土が2層あり、掘り返されたとも判断できるため、遺骸を火葬した場所そのものである可能性が指摘できる。

土壙(墓)は16基検出した。人骨の出土は見なかったが、調査地の南東部に集中していること、近接して火葬墓S K03・26を検出したことから、土壙墓と理解して報告する。

土壙墓S K02(第17図) 長辺1.3m、短辺0.85～1.1m、深さは0.15mである。

土壙墓S K04(第17図) トレンチの西南部で検出した土坑で、壁面の立ち上がりは緩やかで、南辺に沿って2段墓壙状を呈している。長辺1.8m、短辺0.82m、深さ最大で0.2mである。

土壙墓S K06(第16図) 土壙墓S K07に切り勝ち、土壙墓S K21に切り負けている。長辺が1.25m、短辺が0.7m、検出面からの深さは25cmである。東辺は緩やかに立ち上がるのに対して、西辺はややオーバーハング気味に立ち上がる。

土壙墓S K07(第16図) 土壙墓S K06に切り負けており、長辺1.2m、短辺0.7m、検出面からの深さ約10cmである。

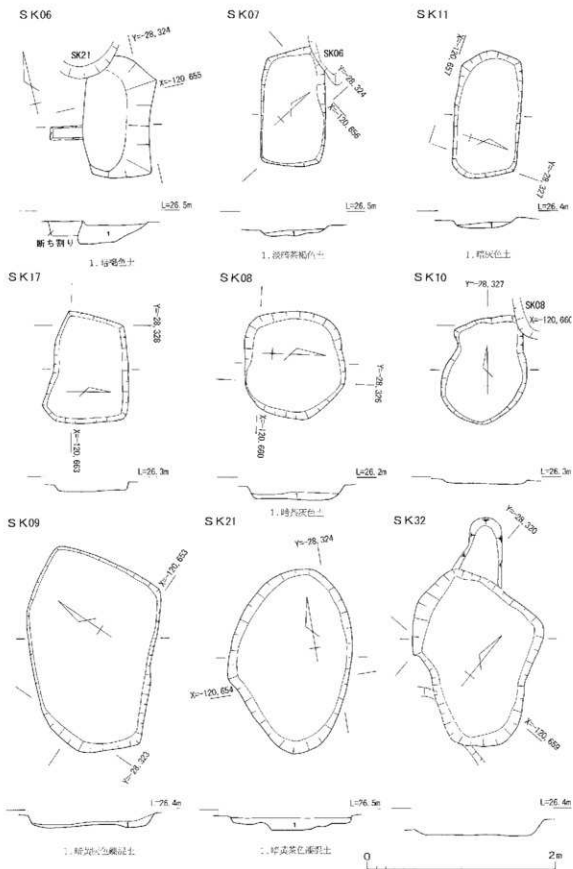
土壙墓S K08(第16図) 土壙墓S K10の北東側に重複しており、切り合い関係より土壙墓S K10に後出するものである。隅丸方形を呈しており、長辺1.15m、短辺1.05m、検出面からの深さは最大で15cmである。

土壙墓S K09(第16図) 火葬墓S K26の北部で検出した土坑で、ややびつな長方形を呈する。長辺2.2m、短辺は1.1～1.4m、検出面からの深さは最大で15cmである。埋土は暗黄灰色礫混土である。

土壙墓S K10(第16図) 土壙墓S K08の南西側にあり、切り合い関係より土壙墓S K08に先行するものである。不定形な方形を呈しており、長辺1.1m、短辺0.8m、検出面からの深さは最大で6cmである。

土壙墓S K11(第16図) 平面形は長方形を呈しており、長辺1.3m、短辺0.7m、検出面からの深さは最大で10cmである。

土壙墓S K17(第16図) トレンチの南部で検出した土坑で、長辺1.2m、短辺0.7～0.9m、深さ



第16図 伊賀寺地区2トレンチ土壌実測図(1)

10cmを測る。

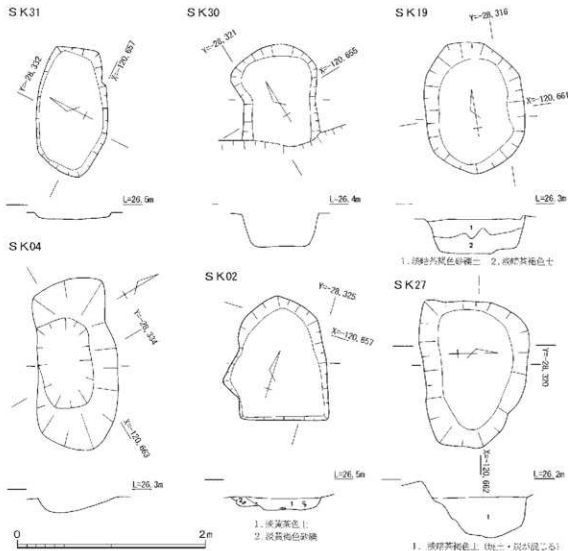
土壌墓SK19(第17図) トレンチの南東部で検出した土坑で、長辺1.4m、短辺1.05m、深さ40cmを測る。

土壌墓SK21(第16図) 土壌墓SK06に切り勝つ土坑で、平面は長楕円形を呈する。長辺1.95m、短辺1.3m、検出面からの深さ15cmである。底面は凸凹を呈している。

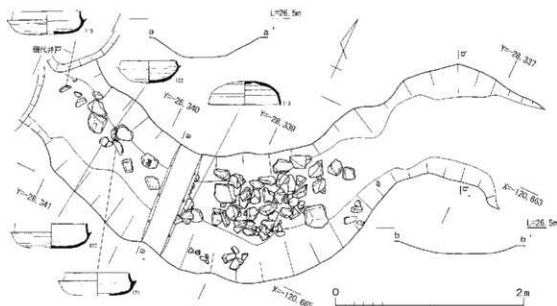
土壌墓SK27(第17図) トレンチの南東部で検出したもので、堅穴式住居跡SH25に切り勝つ土坑である。平面は長楕円形を呈する。長辺1.45m、短辺0.65~1.15m、検出面からの深さは最大60cmである。埋土中にわずかではあるが、焼土・炭化物が混じっており、火葬骨を納めた可能性がある。埋土を洗浄したが顕著な遺物は回収できなかった。

土壌墓SK28 平面形は東辺が鋭角となる台形を呈しており、長辺0.8m、短辺0.45m、検出面からの深さは最大で15cmである。

土壌墓SK30(第17図) 火葬墓SK26に南半が壊されており、現存の長さ1.0m、短辺は0.7~0.9m、検出面からの深さは最大で35cmである。



第17図 伊賀寺地区2トレンチ土壌墓実測図(2)



第18図 伊賀寺地区2トレンチ溝S D05実測図

土壌墓S K 31(第17図) 平面形は隅丸長方形で、長辺1.25m、短辺0.75m、検出面からの深さは最大で7cmである。

土壌墓S K 32(第18図) 南側の竪穴式住居跡S H 25に切り勝つ土坑で、平面形は南側にややすぼみ隅丸長方形で、長辺1.6m、短辺1.35m(最大)、検出面からの深さは最大で30cmである。

崖面S X 29 調査地の西南部、溝S D 05の下位で検出した土坑状の落ち込みで、西北西-東南東方向にほぼ直線的に検出した。検出した深さは約50cmあり、南に向かってさらに深くなる。壁面はほぼ直に立ち上がる。埋土は淡茶黄色土~茶褐色土で、1トレンチ東端のサブトレンチ内の堆積土に近似し、その崖面に連なるものと推定される。内部から同じく、縄文土器片が出土している。

溝S D 05 トレンチ南西部で検出した溝で、西端は現代のモルタル井戸に切られている。平面形はS字状を呈しているが、屈曲部の曲がりは緩やかである。東半部の、石が途切れる辺りから北東部にかけては徐々に浅くなり、最終的には検出面と同じ高さとなって終わる。幅は最大で1.35m、深さは最大で20cm、総長約6.2mにわたって検出した。南辺溝の埋土中に人頭大の石が集中しており、石の間で須恵器杯身・杯蓋がほぼ完形の状態で検出できた(第30図118~122)。その性格は不明である。

ビットS P 18 トレンチ北辺の中央付近で検出したビットで、内部にほぼ完形の須恵器高杯(第30図123)が正立して出土した。規模は45×50cm、深さは15cmである。

欄柵S A 33 トレンチ西辺の中央部で検出した4基のビットで、径30cm、深さ5~10cmのもので、柱間は1.6mを測る。遺物は出土しなかった。

現代井戸 調査地の西南隅で検出した井戸で、溝S D 05に切り勝つものである。モルタルの井戸側を確認した。

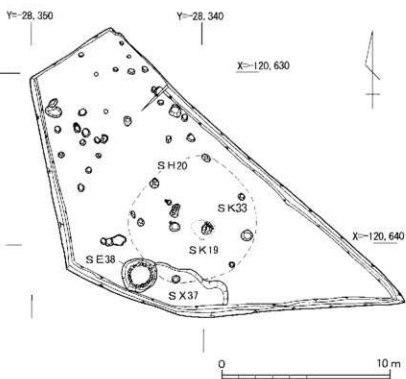
③3トレンチ(第19図)

2 トレンチより一段高い水田となっており、現地表の高さは27.2m付近である。現地表下約65cmの間は現代耕作土と床土、旧耕作土・旧床土が堆積している。この下には淡黄褐色砂質土・淡茶褐色砂質土が堆積しており、この上面が遺構検出面である。いわば、耕作土関係の層序の下が、すぐに遺構面となる。トレンチの南辺部には淡灰色砂礫(SX37)が堆積しており、縄文土器片が含まれていた。遺構と言うよりも、地形の窪地に遺物が入り込んだ状況であった。

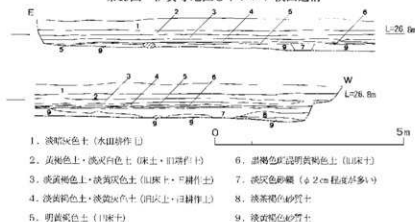
検出した遺構には、縄文時代中期末の炉跡及びその周囲の柱列からなる竪穴式住居跡、縄文時代～平安時代のピット等を検出した。

炉跡SK19(第21図) トレンチ中央部分で検出した炉跡である。竪穴式住居跡SH20床面の中央やや東側に位置し、竪穴式住居跡SH20に伴うものと考えられる。北東辺には長さ65cm、幅50cm、厚さ20cmの大形の石が据えられており、他辺は粘土を貼り付けたものである。まず、60×70cm、深さ約30cmの坑を

掘り、坑の底を第5層で埋めて整地し、北東斜面に石を据えて固定する。第5層の上面および坑の3方向には厚さ2～5cmに粘(質)土を貼り付ける。また、炉本体を中心に110×130cm程度の範囲にも粘(質)土を貼り付けており、南側で約10cm、北側で約20cmの範囲は熱により赤化している。火を頻繁に使用したために、石材は焼けて赤化しており、しかも縦方向にひび割れており、石材を取り上げた時点でバラバラになった。炉本体の粘土部分もまた、火のために赤く変色し、固く焼けていた。炉の内部には土器片や焼土、焼けた石が詰まっており、これを取り除くと、炉本体の底

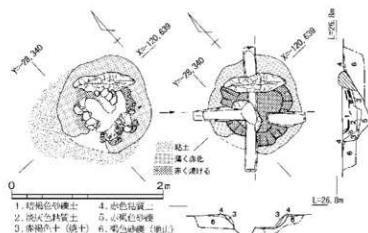


第19図 伊賀寺地区3トレンチ検出遺構



1. 淡褐色土(水田耕作土)
2. 灰褐色土・淡灰白色土(床土・旧耕作土)
3. 淡黄褐色土・淡黄灰色土(山床土・旧耕作土)
4. 淡黄褐色土・淡黄灰色土(旧床土・旧耕作土)
5. 明褐色土(旧床土)
6. 混褐色灰泥明黄褐色土(旧床土)
7. 淡灰色砂礫(φ2cm程度が多い)
8. 淡茶褐色砂質土
9. 淡黄褐色砂質土

第20図 伊賀寺地区3トレンチ土層図



第21図 伊賀寺地区3トレンチ炉跡SK19実測図

K19は柱跡から復元できる住居跡中央部よりやや東に位置している。炉跡SK19の北東部分から東側にかけては、縄文土器片が広範囲に散らばっており、ほぼ同一平面で検出したことから、竪穴式住居の床面に貼り付いていたものと理解できる。主として、北白川C式期の土器片が出土したが、元住吉山～宮滝式の土器片も数点出土した。

井戸SE38 トレンチの西南部で検出した石組みの井戸である。現代農業用の溜井戸で、約50cm掘り下げたところで、石組みが数段確認できたが、これらの石材の安定が悪いため、これ以上の掘削を取りやめた。径2.0～2.2mである。遺物の出土はなかった。

落ち込みSX37 井戸SE38の東側で検出した、長さ4.3m以上、幅2.3m以上、深さ最大で20cmの落ち込みである。第20図の3トレンチ南壁土層の第7層淡灰色砂礫に相当するもので、内部より縄文土器片が出土している。その性格は不明である。

3トレンチの北半では、径30～50cmのピットを多数検出した。須恵器を出土するものもあるが、大半は縄文土器片が出土するものである。柱の並びに規則性は無く、トレンチ南半で竪穴式住居跡SH20を検出したことから、北半の柱跡もまた、縄文時代の竪穴式住居跡の主柱穴と推定されるが、炉跡や貯蔵穴状の土坑の検出もなく、その詳細は不明である。

2) 出土遺物

出土遺物には、1トレンチの竪穴式住居跡・土坑から出土した弥生時代後期～庄内式の土器、2トレンチの包含層・土坑・竪穴式住居跡から出土した元住吉山式～宮滝式の縄文土器、溝SD05から出土した古墳時代後期の須恵器、3トレンチから出土した北白川C式2～3期の縄文土器がある。律令期の須恵器も3トレンチのピットからわずかに出土しているが、細片のみで、詳細は不明である。また、瓦器や磁器もほとんど出土していない。

① 縄文土器

縄文土器は主として2・3トレンチで出土した。大まかには3トレンチで出土したものは、北白川C式2～3期で、2トレンチ出土のものは元住吉山式～宮滝式の年代観が与えられる。

第22～24図は、北白川C式の土器群で、3トレンチSH20床面およびSK19から出土したものがほとんどである。

面の焼土が長径40cm、短径25cmの楕円形に掻き取られていた。

竪穴式住居跡SH20 炉跡SK19の周囲では、主柱穴6基と貯蔵穴と判断される土坑を検出した。竪穴式住居跡の竪穴部分ですべて削平を受けているため、竪穴式住居跡の規模は不明であるが、ほぼ円形に並ぶ柱穴の直径は、6.3～7.4mを測る。炉跡SK19

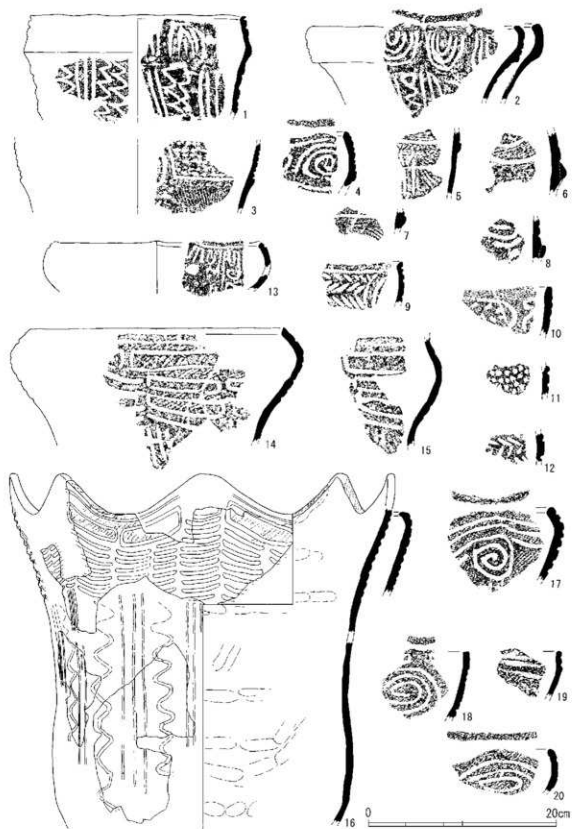
1～8は主文様帯を隆帯で囲むものである。1は平口縁の深鉢で、幅広い口縁がわずかに「く」字状に屈曲して立ち上がる。口縁部文様帯には逆U字形に多重沈線が施されており、その両側が縦方向の隆帯で区分されている。口縁と胴部の間に隆帯があり、主文様を囲む形となる。胴部には、直線と波状の垂下沈線が描かれている。3トレンチSH20から出土した。2は平口縁で、U字状に隆帯で区画し、その内部に弧状に多重沈線を描く。胴部は3本の垂下沈線があり、その間に縦の波状沈線が施されている。口縁端面に縄文が見て取れ、RLである。3トレンチSK19から出土した。3は口縁端部付近の破片で、口縁が外傾して立ち上がる。刺突文が充填されている方形区画およびその左側は隆帯で区分されており、渦巻文が配されるのであろう。胴部はRLの縄文地である。3トレンチSH20から出土した。4は波状口縁で、やや内湾して立ち上がる渦巻文が描かれ、その上方と下方に沈線1条が描かれており、楕円形区画をなしている。渦巻文のまわりにはやや盛り上がった隆帯が見て取れる。口縁端部、外面には縄文が見て取れるが、摩滅のため、詳細は不明である。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。5～8は、口縁と胴部の境の隆帯が認められる破片である。5は横方向の隆帯の上辺に沈線が描かれており、胴部には2本の垂下沈線が見て取れる。3トレンチSH20床面から出土した。6は渦巻状の沈線の下に隆帯がある。3トレンチSX37から出土した。7は隆帯の上辺に沈線で区画されており、胴部の縄文地が見て取れる。3トレンチSH20床面から出土した。8は多重沈線が描かれており、その横が隆帯となっている。3トレンチSH20床面から出土した。

9・10は、隆帯による区画は認められず、文様帯の違いで口縁部と胴部の違いを構成すると判断される破片である。9は楕円形区画文で、その内部は「く」字筆順の羽状沈線で充填されている。楕円形区画帯の横には渦巻文もしくは半円形の重弧文が配置されている。ともに、3トレンチSH20から出土した。10は、S字の文様の左側に羽状沈線を充填した楕円形区画文を配している。

11・12は上記深鉢の文様帯と判断されるもので、3トレンチSH20床面から出土した。11は刺突文で、12は羽状沈線が3列描かれており、それぞれの列は、左から右方向に向けて描かれている。

13～20は、口縁から胴部を多重沈線で施文する深鉢である。文様は、区画文(13～15)、連弧文(16～19)、その他(20)がある。

13はキャリバー形の器形をなした深鉢で、口縁端部直下に1条の沈線を引き、その下に縦方向の沈線で波状文・竹管文が施されている。補修孔が穿たれている。3トレンチSH20から出土した。14は、15と同じ模様構成で、里木Ⅱ式のキャリバー形の器形を色濃く残す形状である。口縁部に1条の沈線、その下に幅の狭い方形区画文を3単位と1条の沈線を連ね、胴部下半には縦方向の垂下沈線を配する。右側は同様の模様が施されているが、左側は、弧状の沈線が描かれているようである。14は、縄文はLRである。15は14と較べて口縁端部がやや上方に立ち上がる形状を有する。縄文はLRである。ともに、3トレンチSH20から出土した。16は波状口縁を有する深鉢で、8単位に復元できる。口縁下に1条の沈線がめぐり、その下に楕円形区画文が施される。



第22図 伊賀寺地区出土遺物実測図(1)

さらにその下には、7条の平行に近い多重弧線文が描かれ、胴部は3本の垂下沈線となっている。口縁部にも縄文が施文されており、縄文地LRを施文後に沈線が施文されている。3トレンチSK19から出土した。

17～20は連弧文で文様を構成するものである。17は、波状口縁の波頂部で、内湾して立ち上がる。口縁に平行な沈線2条があり、その下に渦巻文が描かれる。口縁端部、外面にはLRの縄文が見て取れる。18は平口縁が描かれ、口縁直下に楕円形の区画文、その下に「の」字の沈線をめぐらすものである。縄文はLRである。17・18は、3トレンチSH20から出土した。19は3トレンチSX37から出土した。20は、口縁部に肥厚した粘土が内側に折り曲げられている。縄文はLRである。多重沈線を有するもので、波頂部である可能性がある。3トレンチSH20から出土した。

21は、口縁と胴部が「く」字形に屈曲する深鉢である。「く」字形に内傾する波状口縁を有し、8単位の波頂部を有する。口縁直下には楕円区画があり、波頂部下の上下に2つの指頭状のものによる圧痕が施されている。口縁部・胴部上半には渦巻文や区画文の下に直線に近い多重弧線文を横方向に配し、以下は縦方向の3条の沈線とその間を縦走するLR縄文が展開する。3トレンチSH20から出土した。

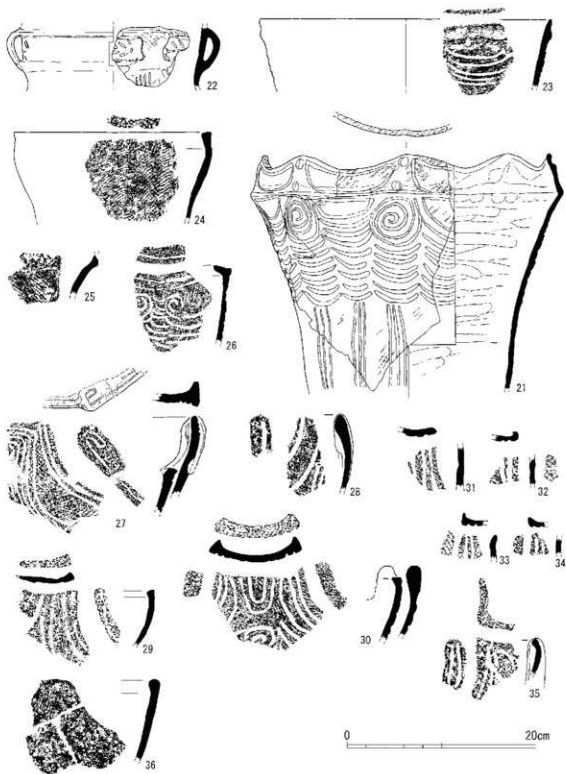
22は、楕円形区画文を有する深鉢で、楕円形区画文のつなぎとして橋状把手がつく。区画文内部は羽状沈線が充填されている。胴部は縦方向の沈線4本が施文されている。縄文はRLである。3トレンチSH20から出土した。

23は、口縁直下が無文の深鉢で、口縁の下に隆帯が1条めぐり、その下部に重弧に沈線が描かれている。3トレンチSX37から出土した。

24・25は、縄文のみで施文する深鉢である。24は、平口縁の深鉢で、口縁部はやや内側に屈曲し、外面および口縁端部に縄文を施文する。口縁部はわずかに内傾して立ち上がる。縄文はRLである。3トレンチSK19から出土した。25は、平口縁深鉢の口縁屈曲部で、横方向に隆帯が貼り付けてある。間隔をあけて縦方向に帯状の施文をしており、縦に施された縄文はLRである。3トレンチSH20の検出時に出土した。

26～33は突起状の山形口縁を有する深鉢C類である。26は、口縁が内側に折れ曲がるよう、粘土が貼り付けられている。縄文はLRである。楕円形区画文に連なるように逆「の」字形の渦巻文が配置され、周囲は平行の多重弧線文が描かれている。27は、山形の口縁部側面に沿って2条の平行沈線があり、波頂部には台形状の山形の多重沈線で描かれている。端面には逆「の」字形の渦巻文が施文されている。縄文はLRである。器壁の胎土・焼成等から、26と同一個体の可能性がある。ともに、3トレンチSH20から出土した。28は、やや間隔を開けて平行する連弧状の2条の沈線と縦方向の2条の沈線が描かれており、側面に1条の沈線が描かれている。縄文はLRである。3トレンチSX37から出土した。29は、連弧状の沈線文が両側から描かれており、端面には1条の沈線が描かれている。縄文はLRである。3トレンチSK19から出土した。30は、波頂部中央が2本の沈線によってU字状に区画され、その下に渦巻文が配置される。両側には連

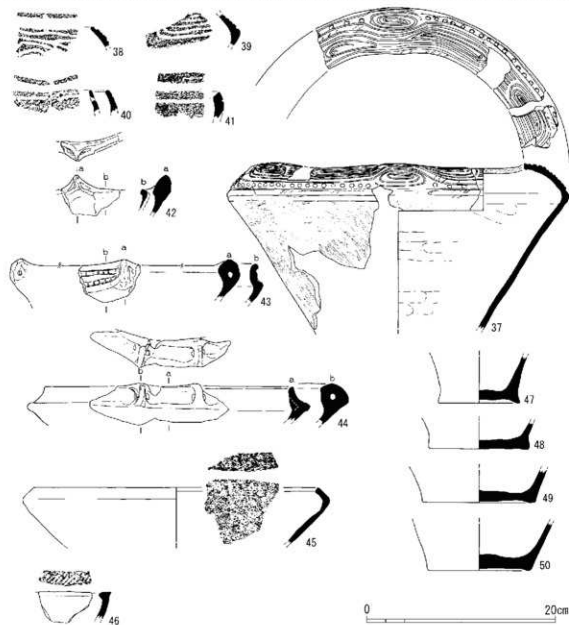
弧状の沈線が描かれている。口縁部には縄文が施文される。縄文はLRである。3トレンチSH20から出土した。31は、口縁部側面に平行して3条の連弧状の沈線が描かれており、縄文はLRである。3トレンチSK19から出土した。32・34は3トレンチSH20から、33は3トレンチSK33から出土した。35は、口縁側面に平行した1条沈線の内側に逆U字状の沈線が配置されている。



第23図 伊賀寺地区出土遺物実測図(2)

端面には2条の平行沈線がある。3トレンチSH20から出土した。36は、沈線等の模様は認められないものである。3トレンチSH20から出土した。

第24図37～46は浅鉢である。「く」字形に屈曲した口縁を有し、口縁部に文様を施すもの(37～41)と施さないもの(42～46)がある。37は、胴部からL字形に屈曲した口縁を有する。主模様の渦巻文は低い隆帯で囲まれており、間を多重沈線でつないでいる。文様帯の下辺には竹管文を連ねるものである。器面はよく磨かれている。縄文はLR。3トレンチSH20から出土した。38は、口縁部に2条のゆるやかな波状沈線とその下に連弧文が施され、それぞれの間に縄文が施される。3トレンチの東部掘削時に出土した。39は、多重沈線で加飾されており、図の左下部分には粘土を貼り付けた痕跡が認められ、隆帯がめぐらされていたことがわかる。3トレンチSH20から出土した。40は口縁下に1条の沈線がめぐり、焼成前の穿孔が2孔認められる。縄文はLRである。



第24図 伊賀寺地区出土遺物実測図(3)

41は平口縁で、沈線が1条めぐる。ともに、3トレンチSH20から出土した。

42は、把手のついた浅鉢である。突起状の把手は、両側から竹管状の原体で刺突しているが、貫通はしていない。3トレンチSH20から出土した。43・44は、「く」字に曲がる屈曲部に棒状工具で横位に穿孔した橋状把手が取り付け付く。43は、口縁部の楕円形区画文を押し引き沈線で描いている。44は、橋状把手が約6cmの間隔を開けて取り付け付いている。ともに3トレンチSH20から出土した。45は無文の浅鉢で、3トレンチSK19周辺から出土した。46は、口縁側にLRの縄文が施されている。3トレンチSH20から出土した。

47～50は、3トレンチSH20から出土した底部である。3トレンチSH20出土の土器は、先述のように、北白川C式2・3期が主体であることから、これらの底部もまた、北白川C式2・3期のもものと判断される。

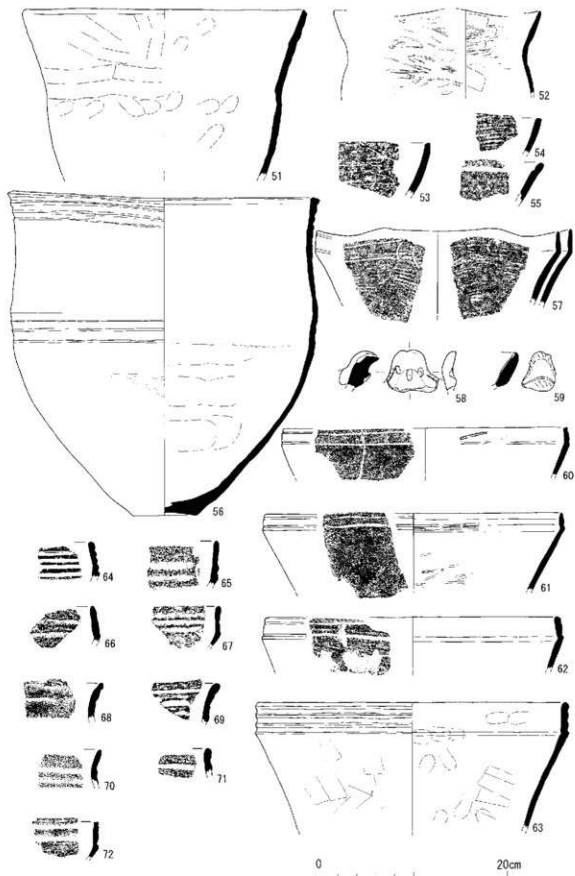
第25・26図は元住吉山～宮滝式の土器で、主として2トレンチから出土したものである。51～71は広口縁深鉢である。51～56は大きく外反しながら口縁部が上方に開くものである。

51は、広口縁深鉢で、口縁端部を面取りしている。頸部と胴部がくびれ、頸部はやや外反する。頸胴部界に不明瞭ながらも1条の凹線をめぐる。内面には横方向の条痕が明瞭に残るが、外面はナデ調整のため不明瞭である。2トレンチの南壁断ち割り内、崖面SX29を埋める埋土中から出土した。52は内外面共に横方向の条痕が見て取れる。2トレンチSH01から出土した。53・54はともに、内外面共に貝殻条痕が見て取れる。53はSK08から、54はSK02から出土した。55は口縁内側に1条の凹線がめぐるもので、広口縁深鉢であろう。2トレンチSK26北側から出土した。56は口縁部に3条、胴部中央に2条の凹線を有する。2トレンチSH01から出土した。

57～59は波状口縁深鉢である。57は、口縁部屈曲直上に縄文をLRに施文した後、2条の沈線を平行にめぐる。縦方向に逆「ノ」字状に沈線を描いている。2トレンチSH01内埋土から出土した。58は波頂部の突起で、基部が厚く作られている。頂部内面には外面に3孔あけられており、側面には刺突沈線が上下に描かれている。2トレンチ南東部の暗褐色砂礫から出土した。59は波頂部の突起で、基部が厚く作られている。外面には沈線が描かれている。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。

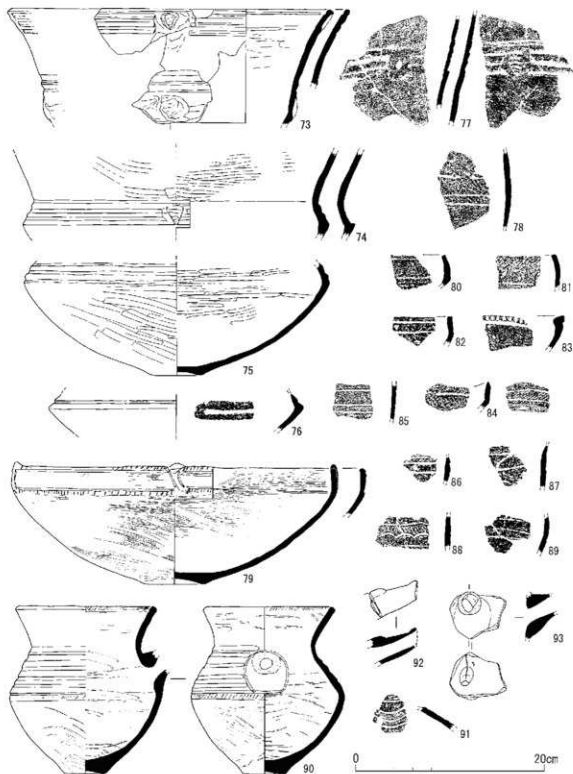
60～63は、口縁が「く」字状に屈曲して立ち上がる平口縁深鉢で、幅の狭い沈線がめぐるもの(60～62)と幅広の凹線がめぐるもの(63)とがある。60～62は、ともに屈曲部内面が強くなでられており、RL縄文地の口縁部に、沈線の間は縄文を磨消している。62は口縁端部に面取りが施されている。これらは2トレンチの南東部暗褐色砂礫から出土した。63は、口縁部が幅広に屈曲し、外面には幅広の3条の凹線がめぐる。2トレンチSK26の南側の暗褐色砂礫から出土した。

64～72は凹線をめぐるせた口縁で、平口縁の深鉢もしくは浅鉢になるものであろう。64は「く」字に立ち上がる幅広の口縁を有し、4条の凹線がめぐる。2トレンチ南東部の暗褐色砂礫から出土した。65は口縁の下部に2条の凹線がめぐる。2トレンチSH01内埋土から出土した。66は平口縁浅鉢で、外面には2条の凹線がめぐる。2トレンチ火葬墓SK26南側の暗褐色砂礫から出土した。67は3条の凹線がめぐる。2トレンチの掘削時に出土した。68はやや外反する口縁を有し、



第25図 伊賀寺地区出土遺物実測図(4)

口縁部に2条の凹線を有する。また、口縁内側にも1条の凹線を有する。2トレンチ中央部の掘削時に出土した。69は幅広口縁部がゆるく外反している。端部は面取りしていない。外面に3条の凹線がめぐる。2トレンチ東南部の暗褐色砂礫から出土した。70は口縁がやや外反するもので、口縁下に2条の凹線がめぐる。2トレンチS H01内埋土から出土した。71は口縁に1条の凹線が



第26図 伊賀寺地区出土遺物実測図(5)

めぐる。2トレンチS H01内埋土から出土した。72は口縁部が幅広く屈曲し、外面に2条の凹線がめぐる。3トレンチS H20から出土した。

第26図73~77は、胴部から頸部に向けていったんすばみ、上方に口縁が大きく開く形態を持つ広口縁深鉢である。73は口縁部に凹線が3条めぐり、粘土を貼り付けた上から貝殻圧痕が施されている。体部中央にも凹線の上に粘土+貝殻圧痕がなされている。2トレンチS K26および暗褐色砂礫から出土した。74・75は胴部上半に凹線が施され、74には直接貝殻圧痕がなされている。ともに2トレンチS H01から出土しており、同一個体の可能性がある。76~78は深鉢の体部片である。76は、「く」字形に屈曲する胴部に凹線が1条めぐり、凹線は粘土を貼付けた手前で途切れている。上半はない。2トレンチS H01から出土した。77は4条の凹線の上から直接貝殻圧痕がなされている。2トレンチの南壁断ち割り内、S X29を埋める埋土中から出土した。78は3条の沈線があり、上2本の沈線と最下部1本沈線の下には縄文が施されており、R Lである。また、最上部の沈線の切れた点から上に向かって半円弧状の沈線が描かれている。沈線両端には刺突が施されている。2トレンチS H01から出土した。

79~89は浅鉢または鉢で、79~83が平口縁、84が波状口縁、85~89が浅鉢もしくは鉢体部片と判断するものである。79は、口縁に平行沈線で画され、上下に斜めの刻み目が施される。2条の沈線の間には、逆「ノ」字状の突起を有し、この左右は上下端に刺突のある沈線で区画される。器面は巻貝条痕によって調整されている。2トレンチS H01から出土した。80は口縁端部に爪状の沈線が施文され、横方向に沈線が3条めぐり、3トレンチS K17から出土した。81は、縄文はL Rで、沈線1条が描かれている。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。82は2条の沈線がめぐる。2トレンチS H01内から出土した。83は口縁部下に1条の凹線がめぐり、口縁端面に刻目が施されている。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。84は波状口縁の浅鉢で、2条の狭い沈線の間の縄文地はL Rである。2トレンチS H01から出土した。85は、2本の平行な沈線により、磨消縄文帯がめぐる。縄文はR Lである。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。86は2条の沈線と斜刻帯で飾り、巻貝回転擬縄文が施される。2トレンチS H01から出土した。87は2条の沈線があり、その下に下弦の連弧文が施される。沈線の間は磨消されており、沈線と連弧文の間は貝殻による擬縄文である。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。88は2条の沈線の間に下弦連弧文があり、縄文地はR Lである。下の沈線と連弧文の間は磨消されている。2トレンチS H01から出土した。89は3条の沈線と斜刻帯がある。2トレンチS H01北柱穴(第11図柱穴c)から出土した。

90~93は注口土器およびそれと判断される破片である。90は、注口部は欠損しており、口縁部背後も意図的に割り取られている。頸部がくびれた小型の広口深鉢に注口が付けられた形状をしている。注口部の周囲には刺突沈線が、7時から5時の方向にめぐらされており、胴部上半には凹線が5条めぐらされている。口縁端面内面には沈線が1条めぐり、その端面側に刻み目がめぐり、凹線の下には同方向の刻み目を有する斜刻帯がめぐる。2トレンチS K03から出土した。91は1条の沈線とその下に連弧状に3状の沈線が描かれており、上2本の重弧状沈線の間は刻み目

が施され、下の2本の沈線は途中で途切れ、その端部にそれぞれ刺突が施されている。注口土器の体部片と判断するものである。2トレンチSK23から出土した。92・93は注口土器の注口部で、92は2トレンチSH01内から、93は2トレンチ暗褐色砂礫層から出土した。

(岩松保・木村啓章)

②石器(第27・28図)

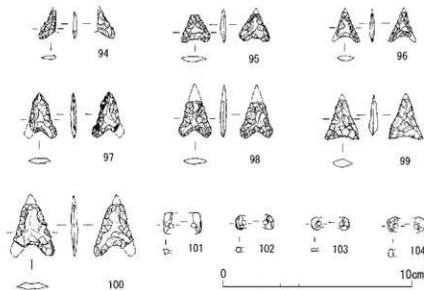
石鉄は7点出土したが、すべて一部が破損している。うち4点は、2トレンチSK03・26から出土したが、火を受けているかどうかは、不明である。

94は、残存長15mm、厚さ2mm、重さ0.25gである。2トレンチSK03から出土した。95は、残存長14.5mm、厚さ2.9mm、重さ0.5gである。2トレンチSK26から出土した。96は、残存長15.5mm、厚さ2.4mm、重さ0.34gである。2トレンチ中央部分の精査中に出土した。97は長さ24mm、厚さ2.7mm、重さ0.77gである。2トレンチSK03から出土した。98は、残存長19mm、厚さ3mm、重さ0.94gである。2トレンチSK03から出土した。99は、残存長21mm、厚さ4.5mm、重さ1.21gである。2トレンチSK10から出土した。100は、残存長27mm、厚さ3.5mm、重さ1.53gである。3トレンチ排土中から出土した。

玉は2トレンチ火葬墓SK26の洗浄土から出土している。約20点出土しているが、軟質なものもあり、洗浄中に割れた可能性がある。これらのうち、穿孔が認められるものは4点あり(101～104)、加工痕が見て取れるものが1～2点ある。材質は碧玉である(5)理化学的分析(3)石材鑑定参照)。

105は磨製石斧の破片で、器壁に殴打痕が見て取れることから、叩き石に転用したものであろう。2トレンチSK26から出土した。火を受けた状態は認められない。重量は324g。106は台石で、両面に殴打痕が見て取れ、殴打痕の位置で切断されていることから、使用中もしくは使用後に破損したものと推測される。重量1500gを測ることから、台石として用いられたものであろう。1トレンチの東端部に設けたサブトレンチ内—2トレンチ崖面SX29から続く崖面を埋める土砂内

から出土した。



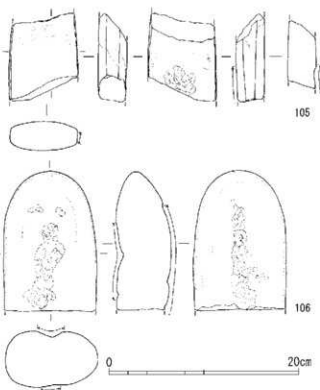
第27図 伊賀寺地区出土遺物実測図(6)

③弥生～庄内式土器(第29図)

弥生時代後期～庄内期にかけての土器が出土したのは1トレンチに限られ、堅穴式住居跡SH02・05、土坑SK13、そのほかのピット内、包含層中よりわずかに出土した。実測図に掲げたものは、

107・109・113～117が竪穴式住居跡
S H02、110～112が土坑 S K13、108
が包含層から出土した。

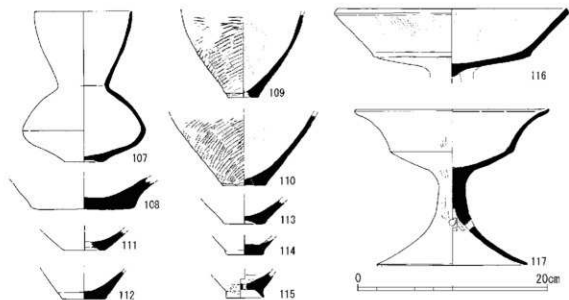
107は長頸壺で、体部下半に算盤玉
状の体部を有し、「ハ」字形に開く口
頸部を有する。器壁表面は摩滅のた
め不明である。約1/2が残存している。
淡赤褐色を呈する。口径10.2cm、底径
4.0cm、器高15.9cmである。竪穴式住居
跡 S H02内の貯蔵穴内の中層から検
出面のやや上位にかけて、小片に割
れて出土した。このような出土状態
から、長頸壺を破砕し、貯蔵穴を埋
め戻す土砂に入れ込んだものと判断
される。108は壺の底部で、外面はナ
デ調整が見て取れるが、内面は摩滅



第28図 伊賀寺地区出土遺物実測図(7)

のため、調整不明である。色調は外面が淡黄褐色、内面が灰白色を呈している。底径は10.5cmである。竪穴式住居跡 S H05の南西部の包含層から出土した。

109は甕の底部で、外面には細かなタタキ目、内面にはハケ目痕が見て取れる。底径は3.2cmで、淡橙褐色～黒褐色を呈する。竪穴式住居跡 S H02内の貯蔵穴内から出土した。110～112の甕底部は S K13から出土した。110は、外面には細かなタタキ目、内面にはハケ目痕が見て取れる。底径は4.5cmで、橙褐色を呈する。土坑 S K13から出土した。111は、内面上はハケメの後、ナデを



第29図 伊賀寺地区出土遺物実測図(8)

施しており、外面は縦方向のハケメが見て取れる。色調は茶褐色で、底径は4.3cmである。112は、底径4.4cmである。内面の調整は不明であるが、外面はナデで調整されている。色調は、底部外面は黒斑のために黒色を呈しているが、赤褐色～淡赤褐色である。113・114はS H02から出土したものである。113は、壺の底部で、内外面共に摩滅を受けているが、内面にはわずかにハケ状工具の痕跡が残る。土器の色調は、外面が淡赤褐色で、内面は淡茶褐色を呈する。底径4.2cmである。114は、壺の底部で、外面には縦方向のハケメがわずかに見て取れ、内面には指で押さえた圧痕が残る。色調は淡黄褐色を呈する。底径3.8cmである。

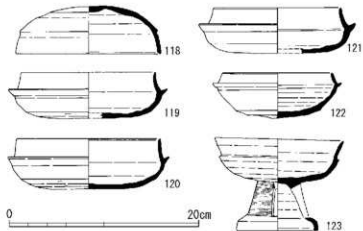
115は鉢の底部で、底部中央に竹状の工具で穿孔されている。内面には工具が当たった痕跡が見て取れるが、内外面共にナデ調整で器壁を調整している。底径3.8cmで、褐色～灰白色を呈する。S H02から出土した。

116は高杯の杯部で、杯部の1/2が残存している。脚柱部等の破片も残るが、図化できない。口径は24.3cmで、灰白色を呈している。107・109と同じく、竪穴式住居跡S H02内の貯蔵穴内及びその周辺から出土した。117は高杯で、杯の体部は斜め上方に大きく開き、口縁部は「く」字に屈曲して外反し、器壁のほぼ全面が摩滅を受けているが、脚柱部～杯部下半部にかけては縦方向のヘラミガキがわずかに残る。全体の約1/3の破片が出土した。口径20.4cm、底径15.9cm、器高16.4cmである。色調は淡黄褐色である。竪穴式住居跡S H02の西半部の床面およびやや上面からほぼ全体にわたる破片が出土していることから、竪穴を埋める際に破砕したものと判断される。

④須恵器

須恵器の出土もわずかであり、2トレンチ溝S D05から出土したもの(118～122)と2トレンチのビットS P18から出土したもの(123)がある。前者はT K10、後者はやや古くMT15～T K10に相当する。

118は、杯蓋で、口径15.2cm、器高5.1cmである。119は杯身で、口径14.2cm、器高4.9cmである。120は杯身で、口径15.2cm、器高5.3cmである。121は杯身で、口径13.3cm、器高4.8cmである。122は杯身で、口径11.4cm、器高4.85cmである。123は高杯で、口径13.6cm、器高9.4～9.8cmである。スカシは3方向に開けられている。



第30図 伊賀寺地区出土遺物実測図(9)

3)小結

伊賀寺地区の調査では、縄文時代中期末の竪穴式住居跡と縄文時代後期の竪穴式住居跡、土壌墓、火葬墓を検出した。

火葬墓S K03・26は死後すぐに焼かれた人骨であることが判明した。縄文時代の火葬骨は、死後数年後に土壌墓を掘り返し、肉を焼ききったものと考えられており、

今回の事例はその評価に再考を促すものである。その詳細については先に報告したところであり、^(図8)参照されたい。

縄文土器は主として2・3トレンチで出土した。大まかには、3トレンチで出土したものは北白川C式2～3期、2トレンチ出土のものは元住吉山式～宮滝式の年代観が与えられる。3トレンチ出土の土器は、竪穴式住居跡SH20床面と判断される状況で出土しており、炉跡SK19の廃棄時に埋められた土器群とともに、一括性が高いものと理解できる。しかし明らかに第25図72のように元住吉山～宮滝式のものも混じっている。

3トレンチの北東側では、府道新設工事のため、長岡京跡右京第941次調査が実施されており、元住吉山～宮滝式期と北白川C式期の遺構が見つかった。そのため、今回の調査地で認められるように、2トレンチ＝元住吉山～宮滝式期＝調査地南半、3トレンチ＝北白川C式期＝調査地北半というように、明瞭に生活空間を分けていたのではない。北白川C式期の遺構は2トレンチでは確認できていないため、2トレンチより南には集落が広がっていなかった可能性はあるが、少なくとも元住吉山～宮滝式期の遺構も本来は3トレンチにも広がっていたと理解するべきであろう。竪穴式住居跡SH20の竪穴がほぼ消失して検出されたことから、本来は北白川C式期と元住吉山～宮滝式期の遺構は重複していたのが、後世に竪穴式住居の深さが削平されたため、ほとんどの元住吉山～宮滝式期の遺構が消失してしまったため、北白川C式期の遺物ばかりが出土したのであろう。竪穴の上から掘り込まれた元住吉山～宮滝式期の遺構の中でも深いものだけが消失から免れ、北白川C式期の遺物に混じって出土したと考えられる。

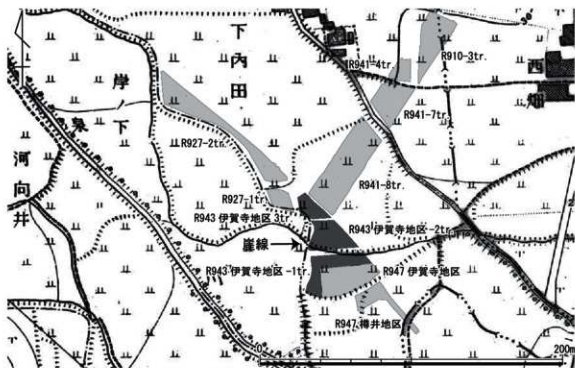
一方、2トレンチでは元住吉山式～宮滝式の時期に限定される。これは環境の変化一例えば河川の移動に応じて、中期末と後期後葉で集落の占地場所が変わったのか、本来は中期末の集落が3トレンチにも展開していたのが、後期後葉段階までに河道の移動のために削平を受けてしまったのか、わからない。

2トレンチで検出した遺構の状況からは、縄文時代の遺構は1トレンチにも広がっていく様相を呈するにも関わらず、1トレンチでは縄文時代の遺構が見つからない。しかも、1トレンチの第6層下面は庄内期の遺構面であり、2トレンチの縄文時代遺構検出面とほぼ同じ高さである。以上のことから、1トレンチでは広範囲に縄文時代の遺構が削平されているものと推測される。

また、1・2トレンチでは崖面を確認した。この崖面は元住吉山～宮滝式期の土器を含む埋土で埋まっている。崖面SX29を東側に延長すると、1トレンチ東端部の断ち割り内で検出した崖面に合致し、2トレンチ西南部分および1トレンチ北端にかけて、ほぼ東西に連なるものである。この崖面より南側で広範囲に縄文時代後期の遺構が削平を受けていることが想定される。遺構面の存否の状況から、縄文時代後期～庄内段階のある段階の小泉川流路痕跡と理解した。この崖面に相当する落ち込みラインは、明治30年前後の仮製地図に描かれている。

(2) 榑井地区試掘(第2・32図)

1) 調査の概要



第31図 仮製地図に表れた崖線

樽井地区は長岡京市友岡樽井地内にあり、伊賀寺地区の南東約150mにある。この対象地は長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)に位置する。調査は7月22・23日に実施し、調査面積は10m²である。

試掘対象地の南西約70mでは、右京第799次調査で試掘調査がなされており、中世以前には土地利用がなされていないか、もしくは、なされていたとしても小泉川により広範囲に削平を受けているものと推定されている。

樽井地区では、2×5mのトレンチを設定して、試掘調査を行った。現地表は標高24mで、以下、攪乱・盛土が80cm、旧耕作土・旧床土が30～35cm堆積しており、その下に濁黄灰色砂(厚さ15cm)、灰色礫(厚さ40cm)、濁灰色礫(厚さ45cm)、その下に灰白色砂礫が50cmの厚さにわたって堆積しているのを確認した。6層より下は、湧水が甚だしく、トレンチ壁面が崩落する危険もあったため、層序の記録と観察を行った上で、すぐに埋め戻した。第5～7層は締まりがなく、若干の土師器・須恵器などの土器片を含んでおり、小泉川の旧流路内の堆積土砂と判断した。灰白色砂礫はこれより上位の砂礫より固く締まっており、小泉川の氾濫源のベースとなる大版層群と判断される。



第32図 樽井地区土層断面図

2) 小結

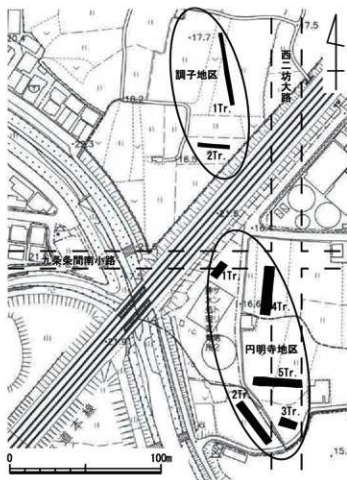
過去の周辺調査の結果と総合すると、樽井地区周辺では中世段階まで小泉川の氾濫源であり、顕著な遺構は遺存していないものと判断された。(岩松保)

(3) 調子地区試掘(第33・34図)

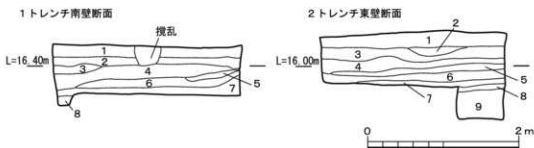
長岡京市調子2丁目地内に2か所の調査トレンチを設定した。本試掘地周辺では平成17年度にも8か所のトレンチで試掘調査が実施された。今回の調査対象地に隣接する平成17年度調査の第2トレンチでは、弥生時代の土器を多く含む流路が検出されたため周辺に、同じ時代の遺構が広がる可能性がある。

第1トレンチは長さ40m、幅2.5mのトレンチである。耕作土直下は、洪水性の堆積物が繰り返してあらわれ、安定した遺構面は存在していなかった。出土遺物には、奈良・平安時代の須恵器・土師器があるが摩滅を受け、再堆積したものと考えられる。

第2トレンチは長さ30m、幅



第33図 円明寺・調子地区調査トレンチ配置図



1. 耕作土
2. 褐灰色粘砂 (10YR5/1)
3. 灰色粘砂質土 (7.5Y4/1)
4. 灰黄褐色砂質土 礫混じり (10YR4/2)
5. 黄灰色砂混シルト (2.5Y4/1)
6. 褐灰色粘砂質土 (10YR4/1)
7. 黄褐色シルト混砂層 (2.5Y5/3)
8. 黄灰色シルト (2.5Y4/1)

1. 耕作土
2. 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)
3. 灰色礫混砂質土 (5Y4/1)
4. 灰黄褐色礫混砂質土 (10YR4/2)
5. 黄灰色砂層 (2.5Y5/1)
6. 灰黄褐色シルト混砂質土 (10YR5/2)
7. 暗灰黄色砂質シルト (2.5Y5/2)
8. 灰色砂質シルト (5Y4/1)
9. 灰黄褐色砂礫 (10YR5/2)

第34図 調子地区土層断面図

2.5mのトレンチである。平成17年度調査の弥生時代と古墳時代初頭の流路の延長上に設定したが、確認できなかった。耕作土下には洪水性堆積物が続き、中には平安時代の遺物が含まれる。新しい洪水によって流路が破壊され残っていないものと考えられる。

(中川和哉)

(4) 円明寺地区試掘

円明寺地区の調査対象地は長岡京右京九条三坊四町、西二坊大路、九条条間南小路推定地付近に所在し、また、長岡京市調子3丁目に所在する^{はま}碓遺跡と乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田に所在する松田遺跡にまたがっている。今回の調査では5か所のトレンチを設定して調査を行った。そのうち、2トレンチが長岡京跡右京第939次・松田遺跡、1・3～5トレンチが長岡京跡右京第940次・碓遺跡にあたる。

1) 長岡京跡右京第939次・松田遺跡

小泉川に平行して長さ約30m、幅約5mの2トレンチを設定した。現地表面の標高はトレンチ北西隅が14.78m、南東隅が14.60mでほぼ水平である。表土の下には層厚約0.2mの茶灰色礫層が広がる。トレンチ南東部約4/5ではこの下に青灰色シルト混じり礫が堆積している。標高約14.3mの青灰色シルト混じり礫の上面で遺構検出に努めたが、遺構は認められなかった。この下には赤茶色礫層があり、断ち割りを行ったところ磨滅の著しい平瓦片が1点出土したが、絶え間なく水が湧き、調査は困難であった。

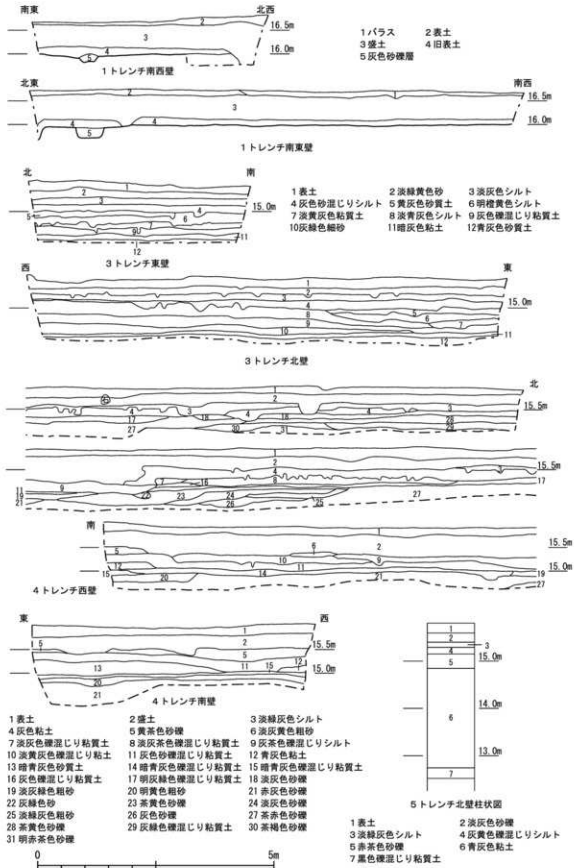
2) 長岡京跡右京第940次・碓遺跡

① 調査概要

1 トレンチ サントリー京都ビール工場内に設定した5m×10mのトレンチである。バラスと表土の下には礫を含む黄色系の盛土が約0.5m均一に堆積している。これは、1977年にサントリーの排水処理施設が造られた時の盛土と考えられる。その下には旧表土(耕土)がそのまま残っており、これを除去すると、地山面上に正方位を向いた耕作に関連する溝が現れた。溝の中にはビニル紐が入っており、1977年まで耕作されていた畑に伴うものと思われる。

3 トレンチ 5m×10mのトレンチである。表土・淡緑黄色砂・淡灰色シルト・灰色砂混じりシルト(1～4層)がほぼ水平に堆積し、その下に淡青灰色シルト(8層)が堆積するが、この上面は小泉川から遠ざかるにしたがって低くなっていく。この面で遺構検出を試みたが、遺構は認められなかった。北東辺と南東辺に沿ってL字形にサブトレンチを入れたところ、淡青灰色シルトから中世前期とみられる土師器皿の小片が出土した。

4 トレンチ 6m×30mのトレンチである。西壁で土層の堆積状況を見ると、表土の下に認められる盛土層の厚さが、トレンチの北約2/3では約0.5m前後であるのに対して南約1/3では1.0m前後とほぼ倍になっており、盛土以前は、調査区の南約1/3が約50cm低かった事がわかる。盛土より下の土層は南に向かって下がる傾斜を基本とする。調査区の北約2/3には盛土の下に均質な淡緑灰色シルト(3層)・灰色粘土(4層)と淡灰茶色礫混じり粘質土(8層)が堆積しているが、南約1/3ではこれらの層が存在せず、削平されたものと思われる。前述の約50cmの比高差は、この



第35図 円明寺地区土層断面図・柱状図

削平によって生じたものと考えられる。灰色粘土からは明の青花碗が出土した。

この下には灰色系のシルトや粘質土(9~11層)、青灰色系の粘質土など(12~15層)が薄い層状に堆積するが、調査区の北約1/4にはこれらの層が認められない。

平面的にみれば、これらの層は北北西から南南東に向かって下がる傾斜で堆積しており、小泉川の旧流路の一部にあたっている可能性が考えられる。これらの層からは、弥生土器、須恵器杯B・甕、灰軸陶器、瓦器碗、土師器杯・皿、白磁碗・皿、青磁碗、室町時代の瓦質土器などのほか、銭貨(祥符通寶)、銅製刀装具(切羽)が出土した。出土遺物から、室町時代の堆積層とみることができる。

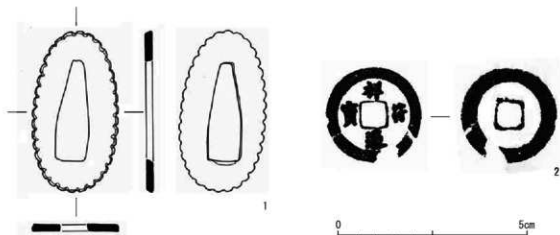
さらに下層には、礫層(18層~)が堆積する。礫層の上面の標高は調査区北端で約15.5m、調査区南端で14.9mと、南北30mの間で南が約0.6m低くなっている。一部を重機によって断ち割ったところ、わずかの掘削で湧水が激しくなり、少なくとも現地地表下3.5m付近までは礫層が続くことを確認したのみで、断面図の作成などは不可能であった。礫層の上部からは須恵器杯B・碗・甕、土師器皿、黒色土器碗、瓦器碗、瓦、銭貨などが出土したことから、鎌倉時代に堆積したものと考えられる。重機掘削の廃土から土師器小片を確認したのみで、時期のわかる遺物は出土しなかった。

5 トレンチ 6m×30mのトレンチである。表土の下には淡灰色砂礫、淡緑灰色シルト、灰黄色礫混じりシルト、赤茶色砂礫が堆積する。この赤茶色砂礫は、角礫を含むこと、粒度がそろっていないことなどから、客土の可能性が考えられる。その下に堆積する青灰色粘土の上面で精査したが、遺構は認められなかった。青灰色粘土層からは、土師器皿、瓦器碗、瓦質土器などの小片が出土した。青灰色粘土層の一部を重機によって断ち割ったところ、標高12.75m付近で現れる黒色礫混じり粘質土まで青灰色系の粘質土が続く。途中で礫混じりの層や灰色の強い層があつて何層かに分かれるものと思われるが、表土直下の淡灰色砂礫からの湧水の激しい流入によって壁面が崩落し、断面図の作成は不可能であった。重機による断ち割りでは遺物は認められなかった。

出土遺物(第36図) 1は4トレンチ暗青灰色礫混じり粘質土から出土した銅製刀装具の切羽である。長さ43mm、幅23mm、厚さ2mmを測る。外縁部は花弁状に加工されている。表面は水平方向の研磨痕がみられるが、鏝に接する面には特に調整を施さない。茎穴は27mm×9.5mmを測る。2は4トレンチ側溝の暗青灰色礫混じり粘質土から出土した祥符通寶である。径2.51cm、厚さ0.8mmを測る。

②まとめ

長岡京跡右京第939・940次調査では、小泉川に近いトレンチほど湧水が激しく、小泉川から離れたトレンチでも小泉川に平行する方向の堆積土が確認され、全体に小泉川の旧流路にあたっている可能性が考えられるが、4トレンチでは下層に砂礫層が厚く堆積しているのに対して、5トレンチでは下層に粘質土が厚く堆積しているなど、堆積土の様相は複雑であることが判明した。顕著な遺構は検出されなかったものの、出土遺物からみて、これらの層の形成が鎌倉時代以降で



第36図 円明寺地区出土遺物実測図

あることが判明するなど、周辺の地形の変遷を考えるうえで貴重な知見が得られた。

(森島康雄)

(5) 理化学分析

1) 人骨の鑑定

京都府長岡京市に所在する伊賀寺遺跡の発掘調査において縄文時代後期の火葬墓SK03と火葬墓SK26より焼骨が出土し、発掘現場で取り上げられた後、肉眼解剖学的調査を行った。焼骨は断片的なものが多く、1cmに満たない破片については人骨か獣骨であるのか同定することは困難であったが、2～3cm程度の小断片では人骨と同定できるものが確認できた。人骨は、灰白色や白色になるまで焼かれており、収縮や変形が目立つ。それぞれの土壌ごとに人骨の残存状況、性別、死亡時の年齢、病変など特記事項、焼成についてその所見を報告する。

① 火葬墓SK03

<残存状況>

出土した人骨は断片的に残存しており、いずれも焼かれたものばかりである。人骨は、頭蓋骨から足の指骨まではほぼ全身の骨を確認できるが、小さな断片や破片となり、保存状態は良くない。歯牙も数点残存しており、いずれもエナメル質が脱落し、象牙質が露呈した状態である。残存骨には数点の重複部位が確認でき、最も多かったのは下顎骨右側の歯槽部分で9点重複している。頭蓋骨の他の部位では、左側頭骨の外耳道周辺部分が7点、下顎骨右側の関節突起が7点、下顎骨オトガイ部分が6点重複しており、頭蓋骨以外の部位では、左肩甲骨関節窩から烏口突起周辺にかけての部分が6点、上腕骨の遠位端、尺骨と橈骨の近位端、膝蓋骨でも3点から4点重複している。特に下顎骨で重複する部分がよく残っているようである。また、これら重複する骨よりもさらに若い子供の軸椎や尺骨が残ることから、火葬墓SK03には少なくとも10体分の人骨が残ると考えられる。

<性別>

残存する部位がいずれも断片的であり、焼成による骨の収縮や変形があるため、性別を確実に

判別できる部位は確認できない。しかし、眉上隆起が発達した前頭骨、外後頭隆起が発達した後頭骨、厚く大きな胸骨柄、骨体が太く三角筋付着部の発達した上腕骨が確認できることから、これらの特徴を持った骨については男性の遺骨の可能性が考えられる。一方、眼窩上縁が鋭い前頭骨、外後頭隆起の発達が弱く薄い後頭骨、華奢な頬骨、細く華奢な上肢骨が確認できることから、これらの特徴を持った骨は、女性のものである可能性が高い。いずれの骨についても保存状態が悪いため、性別に関しては可能性を示すだけであるが、男女の骨が残存するようである。

＜死亡時の年齢＞

大多数の骨は成人のものであり、数点のみ子供の骨を確認できる。成人骨の中で詳細な死亡時の年齢を推定できるものは数点のみしかない。ひとつは寛骨の破片で、仙骨との関節部分である耳状面の形態から壮年(25～40歳)程度の人のもと判明した。他には数点の頭蓋骨片があり、縫合線の内板部分のみが癒合しているのを確認できたことから、壮年以上の人の遺骨と推測できる。子供の骨では、下顎骨、軸椎、尺骨それぞれの小断片3点から死亡時の年齢を推定できた。下顎骨は関節突起のみが残り、そのサイズから10代後半あたりと推定できる。軸椎は左椎弓から棘突起部分が残る。棘突起が癒合済みであることから3～4歳に達していたことがわかる。さらに、3～4歳の個体の軸椎と比較するとサイズがかなり小さくなっていることから、焼かれたことで大きく収縮したと考えられるので、3～4歳からそれほど経過しない年齢、およそ4歳前後あたりで死亡したと推定する。尺骨は右の近位関節部分のみが残る。この関節部分のサイズは新生児並みであるが、滑車部分の形態が新生児のそれよりも明瞭であることからより発育が進んだ段階にあると考えられ、およそ1歳前後に達していた可能性がある。さらに、焼成による骨のサイズの収縮も考慮する必要がある。骨の収縮率に関してはいくつかの見解があり、最小で0%、最大で30%台の収縮率とある(池田,1981; Thompson,2005)。そこで、滑車部分の長さを基準にして30%収縮した場合を想定すると、収縮前の骨のサイズは5歳程度の幼児のサイズに相当する。よってこの尺骨は、1歳前後から5歳程度までの間に死亡した幼児の骨と考えられる。他に子供の骨と同定できるものは確認できなかったが、子供の骨は成人骨よりも脆く壊れやすいので、多量に残存する破片の中に含まれている可能性は十分ある。

＜病変など特記事項＞

病変として、変形性関節症の疑いがある下顎骨関節突起の小断片を2点確認できる。左右それぞれ1点ずつあり、両方ともに関節部分が前後方向に薄くなり変形している(図版第19a・b)。他に病変は認められなかったが、多くの骨が焼成により変形し破片となっていることから、他にも病変や損傷などがあつた可能性は否定できない。

特記事項として、生前における歯牙の脱落痕をあげられる。下顎骨の切歯から小臼歯までの歯槽部分で一部または大部分が吸収されて閉鎖しているのを確認できる。これらは3個体分確認でき、1体は中切歯からおそらく第1小臼歯までの歯槽、2体目は切歯部分と思われる歯槽、3体目は犬歯と第1小臼歯部分の歯槽が閉鎖している。歯槽の閉鎖は、生きている間に何らかの理由で歯が脱落し、その部分の歯槽が吸収されて生じる。歯の脱落理由は分からないが、縄文人の抜

歯風習はよく知られる所であり、これら下顎骨の歯槽閉鎖も風習的な抜歯によるものかもしれない。

<焼成>

人骨の断片や破片を観察すると、変形しているものが数多く確認できる。骨表面に深い亀裂が入り、頭蓋骨などの扁平骨は反り返り、長骨では長軸方向や横方向の輪状の割れやよじれが生じている(図版第19下段骨)。焼成による人骨の変化についてStewart(1979)や池田(1981)を参考にすると、上述の火葬墓SK03の人骨に見られる変形は、軟部組織が残る新鮮骨の状態では焼かれたことにより起こったと考えられる。また、焼成温度の違いによる骨の色調変化についてBuikstraとUbelaker(1994)は、比較的低い温度(200℃から300℃)で焼かれた骨は茶色や黒色であるが、高温(800℃)で焼かれた骨は青灰色や白色になると指摘する。さらに、歯牙において焼成温度が約500℃以上になると、エナメル質部分が剝離し象牙質が露呈した状態となる(Buikstra and Goldstein, 1973)。火葬墓SK03の人骨の色調は、灰白色や白色を呈しており、残存する数本の歯ではエナメル質が全て脱落し、象牙質が露呈した状態であることから、詳細な焼成温度は定かでないが高温で焼成したと考えられる。以上のことから、火葬墓SK03から出土した人骨は、死後それほど経過する間もなく、高温で火葬されたと想定できる。

②火葬墓SK26

<残存状況>

焼かれて変形した人骨が断片的に残る。小さな破片となって残る骨が大半で同定できるものは少ないが、土ごと取り上げられた骨は大きな断片状で残るためかろうじて形がわかる。残存する部位は、頭蓋骨、下顎骨、肋骨、椎骨、肩甲骨、四肢長骨、手骨、足骨とほぼ全身の骨を確認できるがいずれも部分的にしか残らない。また、いずれの骨にも重複する部位はなく、別個体と考えられるような異なった特徴をもつ部位も確認できないことから、少なくとも1個体分の人骨があるといえる。

<性別>

性差を顕著に示す部位が残らないため不明。

<死亡時の年齢>

詳細は不明であるが、子供の骨と思わせるようなものは確認できず、四肢長骨では骨端の癒合が完了し、骨体のサイズが大人並みに大きいことから成人の遺骨が残存することは確認できる。

<病変など特記事項>

病変や損傷などは認められない。破片状のものが多く、変形も著しいので、検出できないだけかもしれない。

<焼成>

四肢長骨では長軸方向や横方向の深い亀裂、振れが認められ、頭蓋骨や肩甲骨などの扁平骨や椎骨の表面にも深く亀裂が入っている。また、骨の色調は灰白色や白色に変色している。こうした特徴から、火葬墓SK26の遺骨は、軟部組織が残る新鮮骨の状態にあるとき、すなわち死後そ

れ程時間が経たないうちに高温で焼かれたと推測できる。

③まとめ

火葬墓 S K 03ならびに S K 26から出土した人骨は、いずれも死後もまもなく軟部組織が残る状態のときに高温で火葬された人の遺骨と推測できる。また、火葬墓 S K 03においては、少なくとも10体分の人骨が存在し、成人男女ならびに約5歳以下の幼児や10代後半の子供の遺骨が残る可能性を指摘できた。さらに、火葬墓 S K 26においては、少なくとも1体分の成人の遺骨が残ることが判明した。

(京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室・大藪由美子)

<参考文献>

Buikstra J.E. and Goldstein L. (1973) The Perrins Ledge Crematory. Illinois State Museum Reports of Investigations, 28:1-40.

Buikstra J. E. and Ubelaker D. H. (1994) Postmortem Changes: Human Taphonomy. In: Buikstra J. E. and Ubelaker D. H. (eds.), Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains: Arkansas Archeological Survey Research Series No.44. Arkansas, pp.95-106.

池田次郎 (1981) 出土火葬骨について、『太安萬侶墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書, 43: 79-88.

Stewart T. D. (1979) Burned Bones. In: Thomas C.C. (ed.), Essentials of Forensic Anthropology. Springfield, pp. 59-68.

Thompson T. J. U. (2005) Heat-induced Dimensional Changes in Bone and their Consequences for Forensic Anthropology. Journal of Forensic Sciences, 50(5): 1-8.

2) 放射性炭素年代推定

①測定対象試料

伊賀寺遺跡は、京都府長岡京市下海印寺下内田地区内に所在する。測定対象試料は、2 tr. S K 03 注口土器内の土壌から出土した炭化物 (No.1 : IAAA-81011)、2 tr. S K 26から出土した炭化物 (No.2 : IAAA-81012)である。

②測定の意義

火葬墓 S K 03と S K 26の前後関係や同時性を確認する。出土遺物から、ともに縄文時代後期と判断される。

③化学処理工程

(1)メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2)酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA: Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、

超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

(4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

④測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOXII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑤算出方法

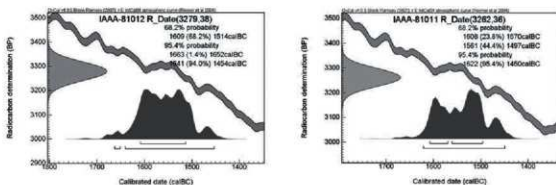
(1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}C$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) $\delta^{13}C$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

(4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応



第37図 暦年較正年代グラフ

する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

⑥測定結果

^{14}C 年代は、SK03注口土器内から出土した炭化物 (No.1: IAAA-81011) が $3260 \pm 40\text{yrBP}$ 、SK26から出土した炭化物 (No.2: IAAA-81012) が $3280 \pm 40\text{yrBP}$ である。2点は誤差範囲内で一致し、同時期の所産と判断される。暦年較正年代 (1σ) は、No.1が $1608 \sim 1570\text{BC}$ (23.8%)・ $1561 \sim 1497\text{BC}$ (44.4%)、No.2が $1609 \sim 1514\text{BC}$ (68.2%)である。2点の炭素含有率は共に60%以上であり、十分な値であった。また、化学処理および測定内容にも問題が無く、縄文時代後期と予想された調査所見とも整合的であることから、妥当年代と考えられる。

((株)加速器分析研究所)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-81011	No.1	2tr.SK03注口土器内 土壌	炭化物	AAA	-25.91 ± 0.88	3260 ± 40	66.62 ± 0.30
IAAA-81012	No.2	2tr.SK26	炭化物	AAA	-24.64 ± 0.95	3280 ± 40	66.48 ± 0.31

[#2400]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81011	3280 ± 30	66.50 ± 0.28	3262 ± 36	1608BC - 1570BC (23.8%) 1561BC - 1497BC (44.4%)	1622BC - 1450BC (95.4%)
IAAA-81012	3270 ± 40	66.53 ± 0.29	3279 ± 38	1609BC - 1514BC (68.2%)	1663BC - 1652BC (14%) 1641BC - 1454BC (94.0%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy; the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C. van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

3) 石材鑑定

はじめに

今回の分析調査では、伊賀寺遺跡の発掘調査で検出された縄文時代後期後半の墓坑から出土した玉類の石材の種類を特定することを目的として、薄片作製観察を行った。

① 試料

縄文時代後期後半の墓坑(S K26)からは、穿孔加工痕のある玉製品とその材料として利用されたとみられる石材破片が水洗選別により抽出されている。今回の分析は破壊分析になることから、調査担当者との協議の上、抽出された石材破片のうち、肉眼的に玉製品と同質と判断される石材破片を選択し、分析用試料とすることとした。分析に供した試料の状況は写真撮影を行い図版として示した。なお、S K26洗浄土の細片試料は、肉眼観察では頁岩、チャート、緑色千枚岩、緑色岩、碧玉が確認された。

② 分析方法

薄片の顕微鏡鑑定は、岩石を0.03mmの厚さに薄く研磨し、顕微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

試料は微小のため、エポキシ系樹脂により包埋処理を施し、薄片用のチップとする。#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で研磨した後、そのチップをプレバラートに貼り付ける。プレバラートに貼り付いたチップをダイヤモンドカッターにて薄く切断した後、切断面を#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレバラート上で薄くなった岩石薄片の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を用い、下方ポーラーおよび直交ポーラー下において観察・記載を行う。

③ 結果

偏光顕微鏡下の観察では岩石の構成鉱物および組織の記載岩石学的な特徴を明らかにした。各構成物の量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量(>50%)、中量(20～50%)、少量(5～20%)、微量(<5%)およびきわめて微量(<1%)という基準で目視により判定した。顕微鏡鑑定に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下で撮影した写真を添付した。以下に各試料の観察記載結果について述べる。

岩石名：石英緑泥石-セリサイト岩

岩石の組織：交代状組織(replacement texture)

原岩の組織が完全に消滅している変質交代岩である。

主成分鉱物

セリサイト：多量存在し、粒径最大0.15mmの他形で不定形板状～繊維束状を呈し、弱い配向性を示して広範に分布する。

緑泥石：中量存在し、粒径最大0.12mmの他形で繊維束状を呈し、淡緑色を示す。セリサイトと共生して広範に分布する。肉眼的に緑色を呈する部分において粗粒なものが分布する。

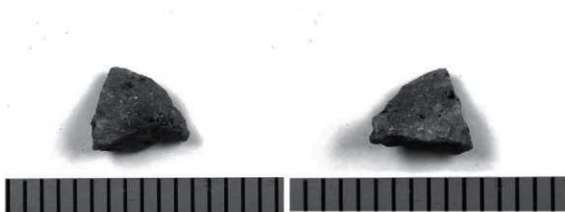
副成分鉱物

石英：微量存在し、粒径最大0.25mmの他形で不定形状を呈し、セリサイトや緑泥石の粒間を埋めて点在する。

緑廉石：きわめて微量存在し、粒径最大0.02mmの他形で不定形状を呈し、筋状に配列して分布する。

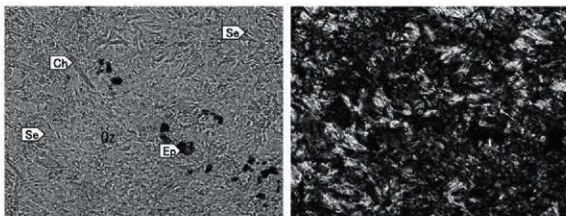
④考察

碧玉は、細粒、塊状緻密質な玉髄で、不純物を含み、各種の色調を示す。考古学の分野では、



1. 墓坑(SK26)出土試料(表面)

2. 墓坑(SK26)出土試料(裏面)



3. 墓坑(SK26)出土試料薄片写真 石英-緑泥石-セリサイト岩

Qz:石英 Se:セリサイト Ch:緑泥石 Ep:緑廉石

第38図 試料および薄片

特に緑色の色調を示す玉髄または石英などのシリカ鉱物からなるものに対して碧玉の名称が使用される。その他、このようなシリカ鉱物以外にも、緑色を呈する変質凝灰岩なども碧玉とされる場合も多い。今回の分析試料は、偏光顕微鏡観察の結果、石英-緑泥石-セリサイト岩という交代岩と鑑定された。石英含有量は少ないが緑泥石、緑糜石といった緑色変質鉱物を含むことにより、緑色の色調を呈し、肉眼的に碧玉に近い岩相となっている。したがって、考古分野における碧玉に該当する石材とみなすことができる。

近畿、中国、北陸地方における碧玉および碧玉様岩の産地としては、数か所程度が知られている。弥生時代後期から古墳時代にかけて盛んに使用されていた鳥根県松江市花仙山を初めとして、兵庫県豊岡市の玉谷、兵庫県南市の石戸、石川県小松市の菩薩・那谷、富山県細入村の細入、新潟県佐渡島の猿八といった原産地が現在のところ明らかとなっている(薬科, 2006)。分析試料は、シリカ鉱物からなる典型的な碧玉とは異なっており、良質な碧玉が産出する花仙山のような産地のものとは考えにくい。試料の構成鉱物である緑泥石、緑糜石、セリサイトといった変質鉱物の種類は、新第三紀中新世のいわゆるグリーンタフ地域に産出する変質交代岩と共通する特徴を有している。したがって、産地の特定は難しいものの、グリーンタフの分布する兵庫県北部や、福井県北部といった地域がまず採取地域として想定される。成分分析データなども加えて、今後検討していく必要があるだろう。

(バリノ・サーヴェイ株式会社)

引用文献

薬科哲男, 2006. 碧玉製玉類の科学的分析最新成果. 季刊考古学, 94, 100-102.

3. まとめ

今回の府道関連遺跡の調査は、発掘調査は下海印寺地区で1か所、試掘調査は樽井地区、調子地区と円明寺地区の3か所で実施した。伊賀寺地区では縄文時代の火葬墓や土壙墓、竪穴式住居跡、庄内期の竪穴式住居跡を検出した。それに対して、試掘調査の結果は、旧小泉川の氾濫源にあっており、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

小泉川流域では、脇山遺跡、友岡遺跡、下海印寺遺跡で縄文集落が確認されており、昨年度の右京第927次調査では縄文時代中期末の集落を調査した。今回の伊賀寺遺跡では、北端の3トレンチでは縄文時代中期末の竪穴式住居跡を検出し、2トレンチ南半では縄文時代後期後半の居住域と墓域を確認した。また、火葬墓は新鮮な遺骸を焼いたものであり、従来の縄文期の火葬に対する見解とは異なるものである。これらの成果の詳細は調査の概要で述べたとおりである。

今回の右京第943次調査と平行して、周辺地では府道関連事業として右京第910・941次調査や第二外環関連調査として第947次調査が行われており、特に北東側に隣接した第右京910・941次調査では、縄文期の竪穴式住居跡や土坑、多数の遺物が出土している。昨年度に調査を実施した右京第927次調査でも縄文時代中期の竪穴式住居跡や土坑が検出されており、今回の調査地の所在する段丘上には、広範囲に縄文時代中期末、後期後半期の集落が広がっていることが分かって

きた。目を広げて、小泉川流域では、下海印寺遺跡や臨山遺跡、友岡遺跡などで縄文時代の集落跡が確認されており、今回の伊賀寺遺跡の成果は、小泉川流域における縄文社会を復元する上で、重要な知見となった。

現在、府道関連事業の右京第910・941次調査の出土遺物の整理が進められており、それらの成果と併せて今回の伊賀寺遺跡の成果を捉えていく必要があろう。

(岩松 保)

注1 「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

注2 「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

注3 「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

注4 注2に同じ

注5 京都大学片山一道・大藪由美子・泉拓良・千葉豊・富井眞、文化財研究所奈良文化財研究所松井章・丸山真央、鳥根大学山田康弘、大山崎町教育委員会林亨・寺嶋千春・古閑正浩、長岡京市教育委員会中尾秀正・小田桐淳・中島啓夫、長岡京市埋蔵文化財センター岩崎誠、向日市教育委員会中塚良

注6 注1に同じ

注7 「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注8 岩松保・大藪由美子「長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について」(「京都府埋蔵文化財情報」第107号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注9 注1に同じ

注10 注2に同じ

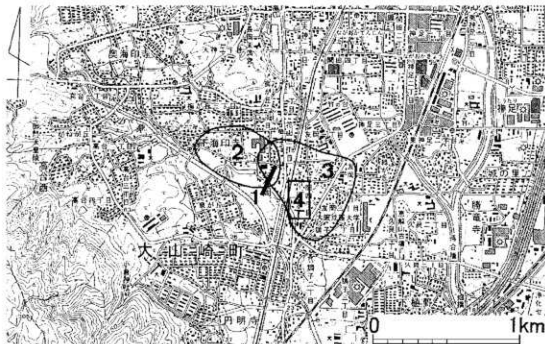
4. 長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5-NNT-3地区)・ 941次(7ANOOD-5-0IR-7-NNT-4地区)・友岡遺跡・ 伊賀寺遺跡発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に伴う事前調査であり、京都府乙訓土木事務所の依頼を受け実施した。

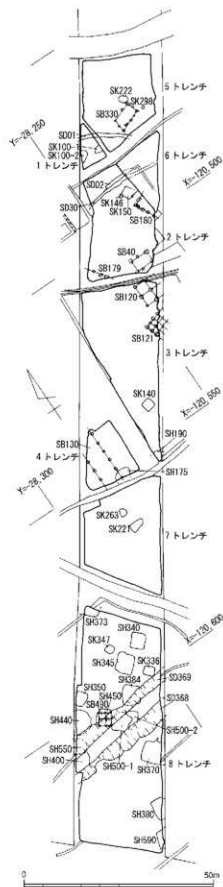
調査地は、長岡京市友岡西畑、下海印寺伊賀寺・下内田に所在する。小泉川左岸の河岸段丘とその北側に広がる低位段丘上に立地する。付近の標高は、27.1~30.1mである。長岡京の条坊復元によると、七条三坊十一・十三・十四町(新条坊では八条三坊九・十五・十六町)にあたり、新条坊の七条大路・八条条間北小路・西三坊坊間西小路が想定される位置にあたる。また、旧石器時代から中世にかけての集落遺跡である友岡遺跡、伊賀寺遺跡の範囲にも含まれる。

周辺での調査状況は、調査地西側40mで、現NTT建物建設に伴い昭和56年度に実施された右京第70次調査^(8.1)では、旧石器時代から近世に至る遺物が出土した。6世紀末~7世紀前半の堅穴式住居跡7基、土坑1基、西三坊坊間西小路、七条大路北側溝の可能性が指摘されている溝、鎌倉時代の掘立柱建物跡6棟・土坑3基・欄列が検出されている。古墳時代後期の堅穴式住居跡は右京第324次調査^(8.2)でも検出されている。北側の右京第118次調査^(8.3)では、緑釉火舎などの出土から寺院



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

1.調査地 2.伊賀寺遺跡 3.友岡遺跡 4.新岡院寺



第2図 トレンチ配置図

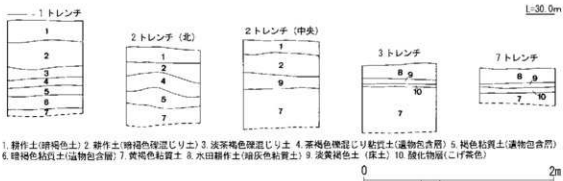
関連の施設が推定されている。また、右京第661次調査^(R4)では鎌倉時代の掘立柱建物跡、長岡京期の東西溝等が検出されている。右京第423・434次調査^(R5)^(R6)では、古墳時代～中世の遺物が出土している。

本道路事業に伴う友岡遺跡内の調査では、右京第787・829・856次調査^(R7)^(R8)^(R9)が北側で行われている。右京第787次調査では、平安時代前期・鎌倉時代の掘立柱建物跡の一部が検出された。調査地のすぐ北側となる右京第829次調査では、飛鳥時代の溝2条、長岡京期の条坊内の宅地を細分する区画溝と想定されている溝が検出されている。それらとともに、平安時代前期～中期の掘立柱建物跡2棟、櫓、鎌倉時代には井戸や溝とともに多数の柱穴が検出された。右京第856次調査では、12世紀後半～14世紀前半にかけての遺物とともに、多数の柱穴が検出された。

南側の河岸段丘上では、道路予定地内や第二外環状道路建設に伴う右京第907・943・947次調査^(R10)^(R11)で、縄文時代中期末～後期後葉の遺物とともに堅穴式住居跡・土坑・火葬人骨を埋納した墓壇や、古墳時代前期・後期の堅穴式住居跡、長岡京期の区画溝など多くの遺構が検出されている。このように、周辺では多くの調査が行われ多大な成果が上がっている。加えて、低位段丘上では、古墳時代後期～鎌倉時代の遺構が確認されている。

調査は、平成19・20年度の2年度にわたって実施した。現地調査は、平成19年度(右京第910次調査)は当調査研究センター調査第2課調査第2係長森正、同主任調査員増田孝彦、同専門調査員竹井治雄が担当した。調査期間は、平成19年7月26日～平成20年1月30日、調査面積は、1,200㎡である。平成20年度(右京第941次調査)は、調査第2課調査第1係長小池寛、同主任調査員松井忠春・増田孝彦、同調査員石崎善久・高野陽子が担当した。調査期間は、平成20年4月24日～10月31日、調査面積は2,200㎡である。本調査報告は、増田が執筆した。

調査にあたっては、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都府教育委員会・京都府乙調土木事務所・地元自治会・近隣住民の方々をはじめとす



第3図 トレンチ土層柱状図

る関係諸機関からご指導・ご協力をいただいた。現地作業・整理作業については、補助員・整理員の協力を得た。記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府乙調土木事務所が負担した。

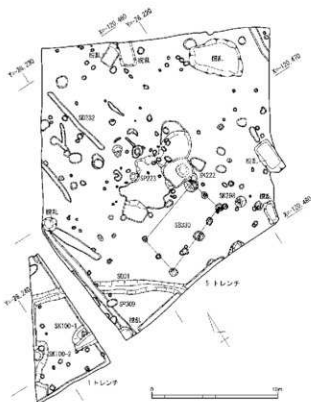
2. 調査概要

調査は、平成19年度に1～4トレンチ、平成20年度に5～8トレンチの調査を実施した(第2図)。本調査報告では、1～7トレンチまでの調査結果を載せている。8トレンチは多くの遺構・遺物を検出したため、次年度に報告することとする。また、3・5トレンチについては、土砂置き場の関係上2分割し、反転して調査を実施した。以下、年度ごとに調査結果を報告する。

(1) 平成19年度調査

調査地は農業用水路により分断されており、北から順に1～4トレンチを設定した。調査地の現状は、1・2トレンチは畑地、3トレンチは水田、4トレンチは駐車場跡地であり、多量の盛土が施されていた。重機により表土掘削を行い、遺物包含層確認後は、人力掘削により遺構検出に努めた。

調査地の基本層序(第3図)は、1トレンチ・2トレンチ東側断面をみると、北側には畑地に伴う表土が約0.3～0.5m程あり、その下は1トレンチでは淡茶褐色礫混じり土、2トレンチS B180南端付近では、水田の床土に相当する淡黄灰色土がともに0.15mある。その下層は、部分的に茶褐色土系の遺物包含層が2層にわたり0.2～0.3m堆積し、上層が中世の遺構検出面となり、下層



第4図 1・5トレンチ平面図

は奈良時代・平安時代の遺物包含層となっている。包含層を除去すると、黄褐色粘質土の地山面となり、大半の遺構はこの面で検出した。3トレンチは、耕作土約0.15mを除去すると、薄い床土層が0.1m程あり、その下層には堅くしまった酸化土層が約3cmあり、その下が遺構検出面である地山面となる。4トレンチは、駐車場造成に伴う盛土を除去すると、削平を受けた地山面であった。調査地全体の遺構検出面は、西から東に緩やかに高くなる自然地形を成している。遺構の残存状況は、後世の削平が著しい3・4トレンチでは悪く、包含層が確認された1・2トレンチでは良好であった。遺構が希薄な部分は、削平により消滅したと考えられ、4トレンチの堅穴式住居跡の遺構残存深度が浅いのは、これを物語るものと考えられる。地山面は、黄褐色粘質土がベースとなるが、自然地形の起伏により部分的に段丘礫が露出したリ、礫と黄褐色粘質土が混在する部分も認められた。遺構は黄褐色粘質土内に掘削されたものは深く、掘削途中で段丘礫にあたったものは浅い傾向が認められた。また、2トレンチで旧石器末～縄文時代初めと考えられる有茎尖頭器や、3トレンチで縄文時代中期後半の堅穴式住居跡が検出されたことにより、黄褐色粘質土下層での遺構の有無を確認するため、2・3トレンチにサブグリッドを設定し確認調査を行った。2・3トレンチ長軸の中央部分に3m間隔で2m四方のサブグリッドを各6カ所、計



第5図 2・6トレンチ平面図

12カ所設定し、面的に段丘礫まで人力掘削を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

各トレンチごとに検出された遺構の概要を報告する。

1) 検出遺構

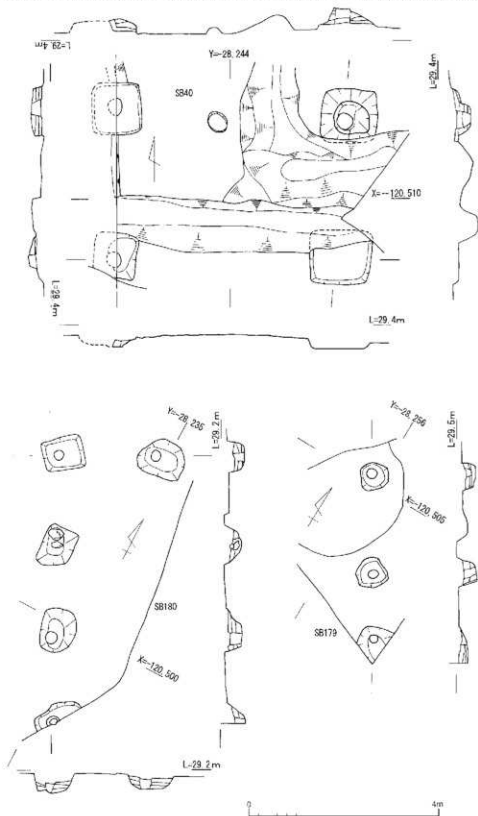
検出された主な遺構としては、中世の溝・土坑・柱穴、長岡京期の掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴、飛鳥時代の堅穴式住居跡、時期不明の掘立柱建物跡、縄文時代の堅穴式住居跡などがある。数多く検出された柱穴には、根石が残るものも認められたが、建物跡を特定するまでには至らなかった。

① 1トレンチ(第4図、図版第3)

トレンチ中央部分で、東西に延びる溝とその南側で土坑および柱穴を検出した。

溝SD01(第4図、図版第3) 1トレンチから5トレンチにかけて検出したもので、北西から南東方向に延びる。南側に溝状の落ち込み(SK100-1・2)を検出したため、これに挟まれる土塁状の遺構が想定されたが、SK100-1は5トレンチ側に延びないため、土塁

状の施設ではなく土坑であることが明らかとなった。S D01の延長部分は5トレンチで検出した。溝幅0.75~1.1m、深さ0.32~0.4mを測り、25m分を検出した。5トレンチも含めると全長9.5mを検出したことになる。内部埋土は暗黄灰褐色土・暗黒灰色土からなり、瓦器片が少量出土した。



第6図 掘立柱建物跡S B 40・179・180実測図

12～13世紀代と推定される。

土坑SK100-1 (第4図、図版第3) 東壁で検出した楕円形の土坑で、長軸1.8m、短軸1.5m、深さ0.6mを測る。遺物は小片化した土師器が少量出土した。

土坑SK100-2 (第4図、図版第3) 西壁で検出した土坑である。1m×3.2m分を検出した。深さは0.7mを測り、断面形はレンズ状を呈する。遺物は小片化した土師器が少量出土した。土坑SK100-1・2とも溝SD01と同じ面より掘り込まれていることから、中世の遺構と考えられる。

②2トレンチ(第5図、図版第4)

トレンチ中央部分の南北、南端の東西を耕作に伴う溝や攪乱による削平を受けていたが、遺構の残存状況が良好なトレンチである。中央部東側には長岡京期以降の包含層も一部残存していた。検出された遺構には、掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴がある。南端の包含層中からは石冠、東側からは帯金具などの出土があった。

掘立柱建物跡SB40 (第6図、図版第5) トレンチ南端で検出した。耕作に伴う溝などにより削平を受けるが、東西1間(4.9m)、南北1間(3.3m)の正方位建物跡で、柱穴の掘形は一辺1～1.2m、深さ0.1～0.45mを測る。時期は長岡京期である。

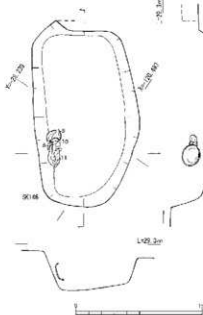
掘立柱建物跡SB179 (第6図、図版第6) トレンチ南西端で2間分(3.65m)のみ検出した。



第7図 溝SD02・30断面図

柱穴の掘形は一辺0.6m、深さ0.18～0.42mを測る。主軸はN31°Wである。柱間寸法は2.15m、1.4mである。柱穴検出面で長岡京期の須恵器蓋が出土しているが、混入遺物の可能性がある。

掘立柱建物跡SB180 (第6図、図版第7) トレンチ中央部の南東壁寄り検出したもので、梁間1間(2.1m)、桁行3間(5.6m)を確認した。6トレンチ側に延びるものであるが、6トレンチ側の柱想定位置に、後世の耕作に伴う溝があり、柱穴が削平されたよう存在しない。また、これより南東方向に延びないため、2間×3間程度の建物が推定される。柱間寸法は梁間2.1m、桁行1.8m・2m・1.8mである。復元される規模は、梁間4.2m×桁行5.6mとなる。柱穴の掘形はほぼ方形で一辺0.6～0.9m、深さ0.38～0.5mを測る。掘形内には根石が残るものがある。主軸はN64°Eである。須恵器杯(第17図4)が柱穴検出面から出土したが、建物の時期を示すものとは考えにくい。



第8図 土坑SK146実測図

溝SD30 (第5・7図、図版第4・6) トレンチ北端で検出した東西溝で、2・6トレンチ境付近では直線的でなく、北側に弓なりにやや張り出す。6トレンチではSD02

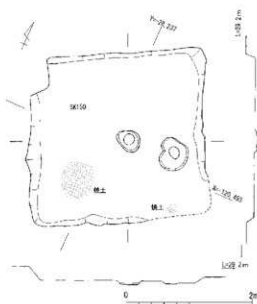
に先行する。溝幅0.4~1.1m、深さ0.38~0.5mを測り、11.5mを検出した。6トレンチを含めると19mとなる。溝の勾配は西から東に緩く下がる。削平を受けるためSD02と同一面より掘り込まれる。埋土は上から淡黄灰色土・淡灰褐色土・暗褐色土である。細片化した土師器が少量出土している。

溝SD02(第5・7図、図版第4・6) SD30に平行して検出した。6トレンチ延長部分では南側に直角に曲がる。溝幅0.4~1.0m、深さ0.05~0.4mを測り、6トレンチ側の南北方向の溝は浅くなる。区画溝と考えられ、2トレンチで東西5.7m、6トレンチで東西5m、南北7.5m分を検出した。溝の勾配は東西が西から東に、南北が北から南に緩く下がる。埋土は上から褐色土・淡褐色土・暗褐色土であり。内部埋土より長岡京期の土師器杯、土馬が出土した。

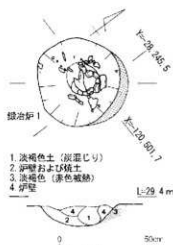
土坑SK146(第8図、図版第4) 2トレンチ北寄りでは検出したもので、SK150と切り合う。長辺1.45m×短辺0.83m、深さ0.32mを測る長方形の掘形を有する。主軸はN56.5°Eである。土坑中央部北西壁に沿って土師器皿が5枚出土した。土坑の形状や遺物の出土状況から土坑墓と考えられるが、木棺等の痕跡は確認できなかった。12世紀後半~13世紀前半の時期が推定される。

土坑SK150(第9図、図版第6) 土坑SK146と西側が切り合いSK146に先行する。一辺2.7m、深さ0.28mの竪穴式住居状の掘形を持つ。中央部に直径0.35~0.4m、深さ0.13mの柱穴があり、その南側に径0.6m、東側に径0.2mの炭混じりの焼土が広がる。内部から土師器甕が出土している。奈良時代後半と考えられる。

鍛冶炉(第5・10図) 2トレンチの中央部で鍛冶炉1、SK150南側で鍛冶炉2を検出した。鍛冶炉1はほとんど破壊されており、径0.5m、深さ0.11mの掘形は認められたが、西側は破壊に伴う掘形のように、炉床裏側の被熱した部分は認められなかった。東側は、炉床裏側に赤色に被熱した部分が残存していた。内部は焼土や炉壁が混入していた。鍛冶炉2は、径0.5mほどの焼土の広がりのみである。フイゴ羽口の装着痕や鍛冶炉を覆う建物跡は、確認することができなかった。鍛冶炉1・2とも掘形内や周辺に土砂を採集・水洗い、磁石により内容物の採取を行ったところ、ともに鍛造剥片・粒状滓・小鉄片・小鉄塊が採取でき鍛冶炉であることが明らかとなっ



第9図 土坑SK150実測図



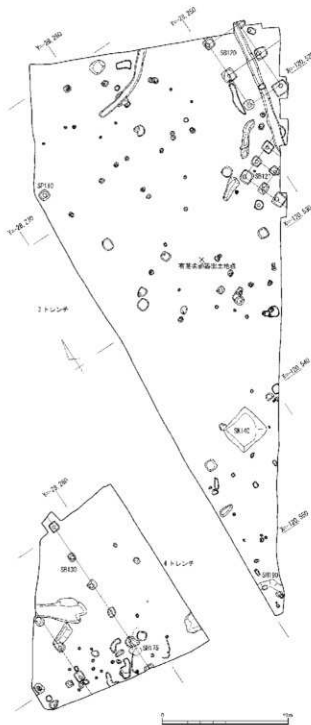
第10図 鍛冶炉1実測図

た。

③ 3 トレンチ (第11図、図版第4)

西側は削平によるためか遺構の密度が少なかったが、トレンチ東側では掘立柱建物跡、中央部で土坑、南端で竪穴式住居跡、全城で柱穴を検出した。また、中央付近の地山面上では有茎尖頭器が出土した。

掘立柱建物跡 S B 120 (第12図、図版第7) トレンチ北端で検出した。南北2間(5.7m)、東西1間以上(3m以上)の正方位総柱建物跡である。柱穴の掘形は一辺0.7~1.1m、深さ0.3~0.38mの規模を測る。柱間寸法は梁間3m・2.7m、桁行3mの等間隔である。須恵器杯B(第17図22・23)が出土した。時期は、長岡京期である。



第11図 3・4トレンチ平面図

掘立柱建物跡 S B 121 (第12図、図版第7・8) トレンチ中央部南東壁寄りで検出した。東西3間(4.6m)、南北2間(3.2m)以上の総柱建物跡と考えられる。主軸はN70°Eである。柱穴の掘形は、方形で一辺0.6~1m、深さ0.2~0.35mを測る。柱間寸法は梁間1.4m・1.8m、桁行1.5mの等間隔である。時期は不明である。

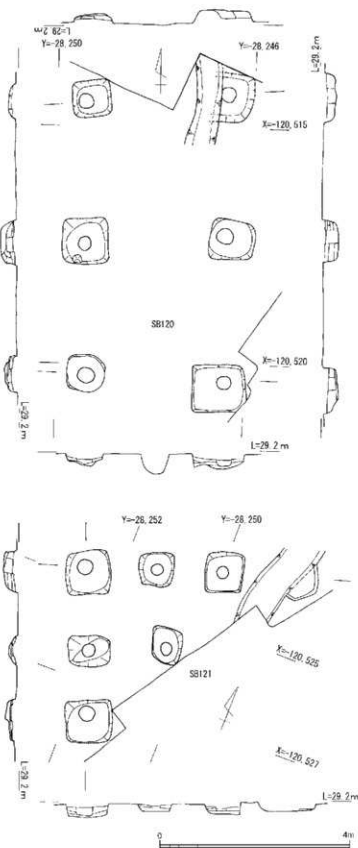
竪穴式住居跡 S H 190 (第13図、図版第8・9) 南端で検出したもので、大半が調査地外になるものと思われる。不整形な円形ないし方形を成すと考えられ、明確な側壁を有さず、レンズ状に約20cm掘込まれる。7トレンチで住居の一端が検出されなかったため、5m程の規模が想定される。内部埋土は2層からなり、上層からは、焼土・炭に混じって細片化した縄文土器や叩き石・石錐が出土した。下層は、少量の縄文土器が出土した。出土遺物から縄文時代中期後半の時期が考えられる。この時期に相当する遺構・遺物は、南方の1段低い河岸段丘上の8トレンチから多量に出土している。

土坑S K 140(第14図、図版第8) 中央付近で検出した。一辺2.5×2.7mの方形の掘形を有し、深さ0.54mを測る。主軸はN14.5°Wである。規模から井戸を想定して掘削を行ったが、段丘礫に達した時点で掘削が中断されており、底面は中央部に礫が集中しており、これらとともに長岡京期に比定される須恵器・土師器、および縄文時代の石鏃が出土した。

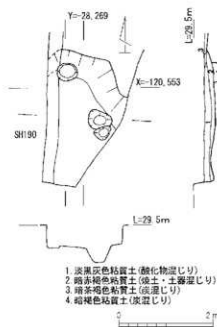
④4 トレンチ(第11図、図版第9)

駐車場造成に伴い削平を受けており、全体的に遺構の残存状況は浅いものであった。検出された遺構は、掘立柱建物跡・竪穴式住居跡・柱穴である。

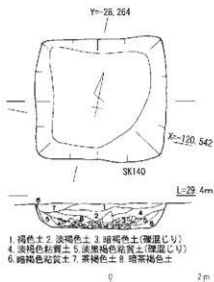
掘立柱建物跡S B 130(第15図、図版第9) トレンチ中央部で検出した正方位建物跡である。妻部分を検出していないので確定はできないが、東西2間(5m)、南北4間(13.5m)以上の建物跡と考えられる。南北の柱間は2.7mの等間隔である。柱穴の掘形は方形で一辺0.6~0.8m、深さ0.1~0.3mを測る。南端は、7トレンチで検出されなかったため、検出された建物南端よりあと一間分延びるものと考えられ、5間以上の建物跡とも考えられる。遺物は出土しなかったが、S B 40・S B 120同様、正方位建物である



第12図 掘立柱建物跡S B 120・121実測図



第13図 竪穴式住居跡 SH190実測図



第14図 土坑 SK140実測図

半はユビオサエ、11は内面にミガキの痕跡が残る。6～10は、口径9.3～9.4cm、器高1.45～2.05cm。11は、口径14.4cm、器高3.1cm。色調は明茶褐色である。12世紀後半～13世紀前半の時期が推定される。12・13は、土師器杯である。12は2トレンチS P01から出土した。口径13.4cmで小振りである。口縁部はナデ、体部はミガキが残る。色調は茶褐色である。13は、S D02から出土した。内外面ともヨコナデを施す。口径17cm。14は、S D02から出土した土馬である。前両脚と後右脚・頭部を欠損する。色調は茶褐色である。15は、S P01から出土した須恵質風字碇の破片である。使用痕が残る部分は黒色に変化している。16は、土師器甕である。SK150から出土した。奈良時代後半である。17は、フィゴ羽口である。先端付近は高熱により青灰色に変色する。2トレンチS P27から出土した。18は2トレンチS P04から出土した、緑色凝灰岩の玉の

ことから、長岡京期と考えられる。

竪穴式住居跡 SH175 (第16図、図版第10) トレンチ南壁寄りで検出した。掘立柱建物跡S B130に一部壊され、住居西壁の一部を検出したのみで、遺存状態が悪い。主柱穴は認められない。一辺約4mの竪穴式住居が復元される。西壁にカマドが存在していた痕跡を示す楕円形の焼土面を、東西0.8m、南北0.5mの範囲で検出した。西側掘込み側壁は0.15m確認した。西壁での軸はN39°Eである。右京第70次調査で検出された住居跡も柱穴を有さず、規模的にも似ている。床面から須恵器蓋・甕が出土した。7世紀前半と考えられる。

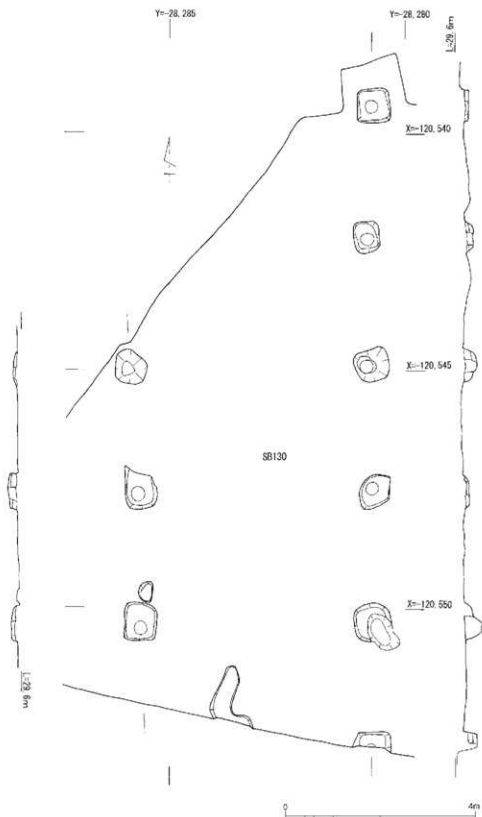
2) 出土遺物

平成19年度調査で出土した遺物には、縄文土器・須恵器・土師器・瓦・土馬・フィゴ羽口・石器・石製品・金属製品・鍛冶生産関連遺物などがある。

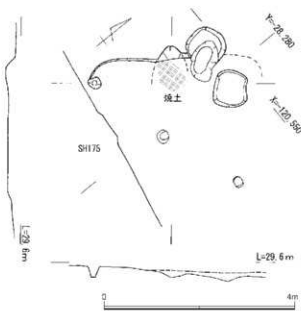
①遺構出土遺物 (第17図、図版第17・18)

1・2・3は須恵器杯B蓋である。1は、2トレンチS P87から出土した。内面にかえりが付き、宝珠つまみがつくものである。2・3は、宝珠つまみがつくが、内面にかえりは付かない。2は2トレンチS P01から、3はS B179柱穴検出面から出土した。4は須恵器杯である。口径12.4cm、器高4.05cm。S B180から出土した。5は、須恵器杯BでS B40から出土した。高台の位置が底部と体部の屈曲部のやや内側にある。奈良時代後半～長岡京期。6～11は土師器皿でS K146から出土した。いずれも完形品で、6～10は、体部外面上半はナデ、下

原石である。軟質のもので、緑灰白色を呈する。所属時期は不明であるが、右京第943次調査では火葬骨埋納土壙から碧玉が出土しており、縄文時代に属する可能性もある。19は、SB175柱穴内から出土した砥石である。砥面は4面で淡黄褐色である。残存長7cm、残存幅4cm、である。



第15図 掘立柱建物跡SB130実測図



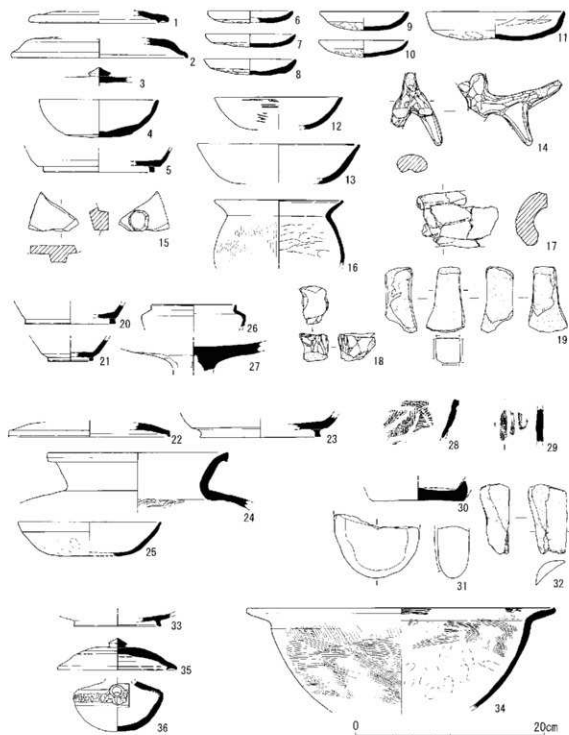
第16図 竪穴式住居跡SH175実測図

りをすると思われる。28～32はSH190から出土した。28～30は縄文土器深鉢で同一個体と思われる。28は口縁下の文様帯、29は体部中位部分の破片で縦方向の沈線がみられる。30は底部片である。31は、花崗岩質砂岩製の磨石で1/2が残存する。32は砂岩製の石器と考えられるが、研磨面のみで用途は不明である。これらの遺物は縄文時代中期と考えられる。33・34は2トレンチSP147から出土した。33は、施釉陶器碗である。貼り付け高台で、内面に施釉され灰緑褐色に発色する。高台の一部にも釉が付着している。平安時代前期。34は、土師器鍋である。口縁はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面上半ハケメ、下半はナデ仕上げを施す。口径32.4cm、色調は茶褐色である。35・36は竪穴式住居跡SH175から出土した。35は杯蓋Dで内面に返りを有し、宝珠つまみをもつ。口径11.4cm、器高3.4cmの完形品である。飛鳥時代。36は甕で、体部のみのもので、頸部と体部を意識的に欠損させた痕跡が認められる。肩部に2条の沈線をめぐらせ、その間に櫛描波状文を入れる。孔は斜め上方に約3.5mm注口状に突出している。古墳時代後期。

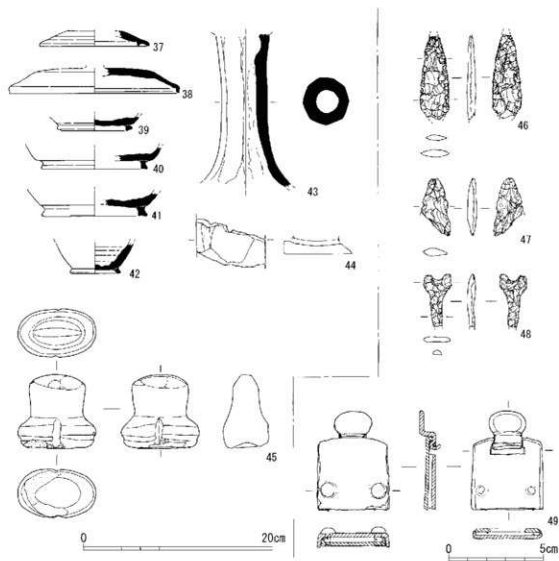
②包含層出土遺物(第18図、図版18)

37～46は包含層出土のものである。37・38は須恵器杯B蓋である。37は宝珠つまみが付き、内面にかえりが付く。38は内面にかえりが付かない。39～41は杯Bである。内外面とも回転ナデを施す。42は、須恵器壺L底部である。40は高台が底部内寄りに付されるが、ほかは屈曲部付近に高台を付す。43は、土師器高杯である。大型品であり、筒部は9面の面取りを施す。44は、粘板岩製視片である。45は石冠である。火成岩製で、高さ8.4cm、幅8.4cm、厚さ4.9cm、重量305g。全体が丁寧に磨かれている。頭部は斧形に面取りし、下半は全周に幅6mm、深さ1.5～2mmの線刻がめぐり、広端面中央に縦に幅6～8mm、深さ2～3mmの紡錘形の凹みが刻まれる。基部底面は、レンズ状に4～4.5mm凹む。一部剥離後に再研磨した痕跡が認められる。また、赤色顔料が付着したような痕跡も残り、全体に塗布されていた可能性もある。上下に斧と凹みにより、両性

具有を表現したように見える。46は、3トレンチ黄褐色粘質土上の地山面で検出した有茎尖頭器である。小型のもので、先端と茎部の一部を欠く。現存長4.4cm、幅1.6cm、厚さ4mm、重さ3.5gである。明瞭な茎部を持たないものである。石材は赤みがかったチャートである。身部断面は二等辺三角形を成し、丁寧な押圧剥離により調整される。47は、SK140から出土した凹基式無茎石鏃である。一部欠損するが、長さ3.05cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm、重さ1.8g。サスカイト製



第17図 出土遺物実測図(1)



第18図 出土遺物実測図(2)

である。48は、S D176から出土した石錐である。先端を欠損するが長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ1.2g。サヌカイト製である。49は、鉄地銀装の帯金具である。方形の箱状の鉄板2枚で皮帯を挟み込み、金銅の鉸2本で綴じる。皮帯の縫いしろには、針金を縫い込んでいたようで、2本の針金が残存する。裏側の箱状の板には窓があり、吊り手状のものが挟み込まれている。鉸を除き帯金具全体が、銀装である。時期はわからない。

(2)平成20年度調査

トレンチ名は、平成19年度調査トレンチに続けた。調査地は1トレンチ東側(5トレンチ)、2トレンチ東側(6トレンチ)、4トレンチ南側(7トレンチ)である。平成19年度調査同様、6トレンチを除いて、農業用水路や里道により分断されており、トレンチを接合することはできなかった。調査前の状況は、5トレンチが公園・建物跡地、6トレンチが駐車場跡地、7トレンチは水田であった。調査は重機により表土を除去し、遺物包含層確認後は、人力掘削により遺構検出に

努めた。

1) 検出遺構

検出された主な遺構としては、中世の掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴・柱穴、長岡京期の溝・土坑・柱穴がある。数多く検出された柱穴は、建物跡を特定するまでには至らなかった。

基本層序(第3図) 各トレンチとも隣接する平成19年度調査トレンチと同様な堆積状況をなしているが、5トレンチは道具や建物基礎により攪乱を受ける部分が認められた。6トレンチは駐車場表土下に旧耕作土・床土があり、その下層は黄褐色粘

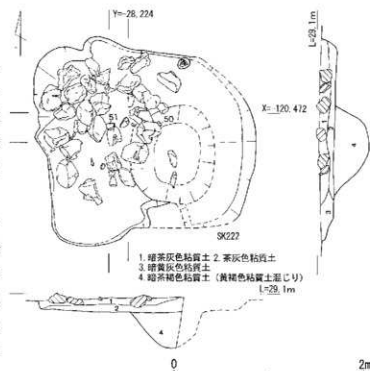
質土の地山面となるが、部分的に薄く遺物包含層が残る所も見られた。7トレンチは耕作土を除去すると、約3cmの酸化層があり、その下は地山面となる。また、南西側は低位段丘の台地の端にあたり、自然地形が傾斜し始める部分に位置する。各トレンチごとに検出された遺構の概要を報告する。

①5トレンチ(第4図、図版第11)

攪乱や削平を受け遺構の残存状況は良くなかったが、検出された主な遺構として、中世の土坑・溝・柱穴、平安時代掘立柱建物跡・柱穴などがある。

溝S D01(第4図、図版第12) 南端より1トレンチの延長部7mを検出した。溝幅0.7~1m、深さ0.36mを測る。6トレンチ側に延長部が認められないため、5・6トレンチ間の未調査部分に通じているものと思われる。

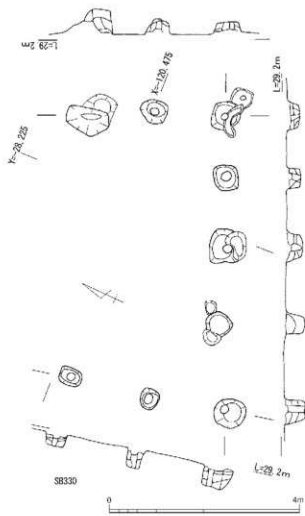
土坑S K222(第19図、図版第12) 5トレンチ中央部で検出した。一辺2.3×2.1m、深さ0.15mを測るほぼ方形の掘形を有する。検出面上の土坑西寄りの1.5m四方に径0.1~0.3m程の礫が集中している。土坑底面中央より東寄りが柱穴状に長径1m×短径0.9m、深さ0.37mの楕円形状に掘



第19図 土坑S K222実測図



第20図 土坑S K298実測図



第21図 掘立柱建物跡 S B 330実測図

は基本的には円形であるが、隅丸方形に近い円形のものもある。直径ないし一辺0.35～0.8m、深さ0.3～0.58mを測る。柱穴内より土師器・黒色土器片が出土した。平安時代前期と推定される。

② 6トレンチ(第5図、図版第13・14)

2トレンチ寄りを南北に延びる耕作に伴う溝は、東側は攪乱により削平を受けている。検出された遺構は溝・土坑・柱穴などがあるが、時期を特定できないものが多い。

溝 S D 30(第5・7図、図版第13・14) 2トレンチの延長部であり、S D 02を切る東西溝である。溝幅0.7m、深さ0.22～0.39m、長さ7.5mを検出した。東端は攪乱により削平を受ける。

溝 S D 02(第5・7図、図版第13・14) 2トレンチのS D 02の延長部分である区画溝と考えられる。2トレンチから続く東西溝が6トレンチで南に屈曲する。東西5m、南北7.5m分を検出したので、2トレンチで検出した分と合わせて東西は総長10.7mを測る。南北部分は幅0.4m～0.5m、深さ0.05mを測り、北から南に緩く傾斜する。長岡京期である。

③ 7トレンチ(第22図、図版第14・15)

表土直下で遺構面であり、遺構の残存状況は浅いものであったが、中世の土坑、長岡京期の廃棄土坑・溝・柱穴を検出した。

り込まれる。この中には礫は含まれない。検出面の礫に混じて黒色土器碗・土師器羽釜が出土した。13世紀代と推定される。改葬に伴う廃墓と考えられる。

土坑 S K 298(第20図、図版第13) 5トレンチ南東寄りで検出した。長径1.7m×短径1.6m、深さ0.1mを測る楕円形土坑である。土坑中央に径1mほどの範囲に径5～15cmの礫が集中する。礫の下は短径0.9m×長径1.2m、深さ0.15mの楕円形状に掘り込まれる。この中には礫は含まれない。礫に混じて瓦器片が少量出土した。13世紀代と推定される。S K 222同様、改葬に伴う廃墓と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 330(第21図、図版第12) 5トレンチ中央部で検出した、平面形のいびつな建物跡である。南北2間(西側3.3m、東側3m)、東西4間(6.2m)を測る。北側桁行は、反転調査を行った際の境界部分に当たり、削平してしまったのか確認できなかった。主軸はN68°Eである。掘形

土坑 S X 263 (第23図、図版第15) 7トレンチ北寄りで検出した。一辺 1.9×1.75 m、深さ 0.3 mを測るやや台形状の掘形を有する。土坑内中位に径 $5 \sim 20$ cm程の礫が北寄りに 1×1.5 mの範囲に集中する。土坑底面は、レンズ状に凹む。5トレンチの土坑 S K 222や S K 298のような1段下がる掘り込みはない。礫に混じて古墳時代、長岡京期の土器・瓦を中心に少量の土師器小皿片が出土した。中世と考えられる。S X 222・298同様、改葬に伴う廃墓の可能性が高い。

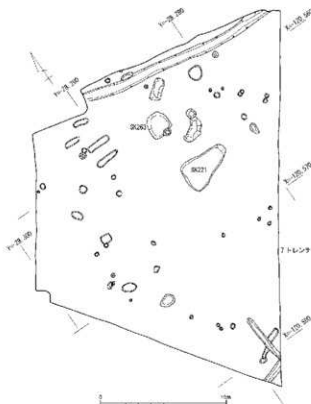
土坑 S K 221 (第24図、図版第15・16) 7トレンチ中央部で検出した。平面形は、縦長の台形状を呈し、西側が広く東側が狭い。長さ 4 m \times 広端辺長 2.5 m・狭端辺長 0.8 m、深さ 0.25 mを測る。土坑内からは、長岡京期の須恵器・土師器・瓦に混じて、縄文時代の石鏃・磨石、古墳時代後期の須恵器が出土した。出土状況から、長岡京期の廃棄土坑と考えられる。

2) 出土遺物

平成20年度調査で出土した遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・瓦・製塩土器・土馬・石器などがある。

① 遺構出土遺物 (第25・26図、図版第17)

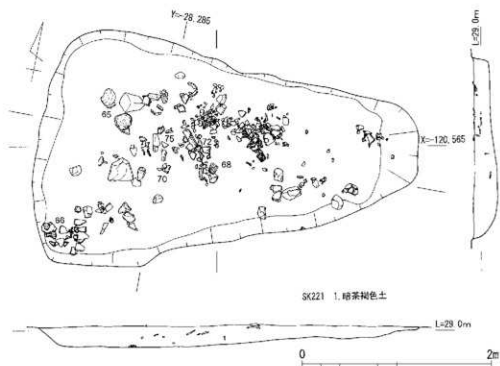
50・52は、黒色土器碗である。内外面とも黒色処理をする。50は底部片であるが、見込み部分に密なミガキが施される。52は、内外面・見込み部分とも密なミガキを施しているが、遺存状態がやや悪い。口径 15 cm、器高 6 cmを測る。50は S K 222、52は S P 309から出土した。10世紀後半～11世紀と推定される。51は、土師器羽釜である。浅い桶状の体部に小さく突出する鐔をつけたものである。外面は、鐔以下がユビオサエ、鐔下方に煤が付着



第22図 7トレンチ平面図

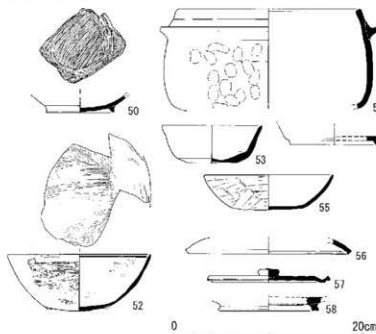


第23図 土坑 S K 263実測図



第24図 土坑SK221実測図

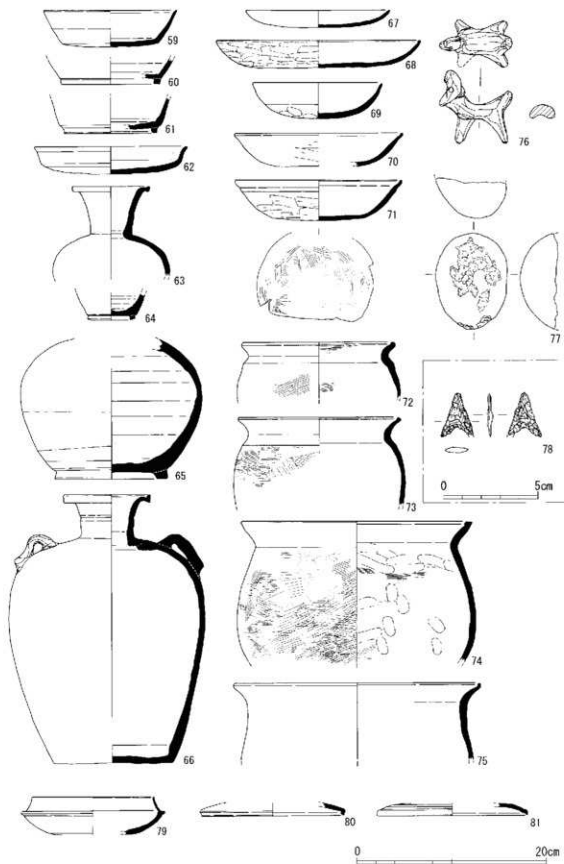
している。内面はナデ調整する。13世紀中頃と考えられる。口径19.1cm。SK222から出土した。53・54は、須恵器杯である。53は、小型で古墳時代後期後半の杯で、底部はヘラケズリ後ナデ調整する。口径10.4cm、器高3.9cm、色調は暗青灰色である。SK230から出土した。54は、高台が底部端に付される。内外面とも回転ナデである。SP223から出土した。55は、土師器杯である。外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。口径13.6cm、器高3.7cm、色調は茶褐色である。SD232から出土した。56・57は、須恵器杯B蓋である。57は擬宝珠状のつまみをもつ杯蓋である。



第25図 出土遺物実測図(3)

天井部外面はヘラケズリ、他は回転ナデである。口径13cm、器高1.45cm。色調は暗青灰色である。奈良時代末期～平安時代初期。58は須恵器杯Bである。底部の破片で、色調は青灰色である。

59～75はSK221から出土した。59は須恵器杯A、60・61須恵器杯Bである。59は、底部ヘラケズリ、内外面とも回転ナデである。口径13.9cm、器高3.9cmである。

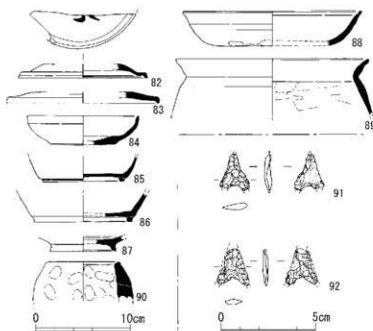


第26図 出土遺物実測図(4)

色調は明青灰色である。60・61は底部端に貼り付け高台が付される。内外面とも回転ナデである。底部はヘラケズリである。62は、須恵器皿である。口径16cm、器高2.9cm、色調は明青灰色である。底部外面はヘラ切り、他は回転ナデを施す。63～66は、須恵器壺である。64・65は高台が底部端に付される。64は、底部に糸切りの痕跡が残る。66は、双耳壺で肩部に退化した把手を取り付けている。内外面とも回転ナデ仕上げ。色調は暗青灰色である。外部全体に自然釉が付着する。67・68は土師器皿である。67は口径21.4cm、器高2.95cm、色調は茶褐色である。68は外面の全面にヘラケズリを施す。69～71は、土師器杯である。69は、口縁部ヨコナデ、体部下半ナデ仕上げ。色調は茶褐色である。口径13.6cm、器高3.8cmである。70・71は口縁部ヨコナデ、他はヘラケズリ、内面はナデを施す。色調は赤茶褐色である。72～75土師器甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面は口縁部ヨコナデ調整。72は口径15.7cm、74は口径24cmである。76は、土馬である。左前脚のみ欠損する。77は花崗岩質砂岩製の敲石である。78は、一部欠損する凹基式無茎石鏃である。長さ2.35cm、幅1.75cm、厚さ0.25cm、重さ0.6g。サヌカイト製である。これらの遺物は、石器を除き長岡京期である。79～81はS X 263から出土した。79は須恵器杯身である。色調は灰色で、底部外面はヘラケズリ、他は回転ナデを施す。口径12.8cm、器高3.8cm。古墳時代後期。80・81は須恵器蓋Aで口縁端部を内側に巻き込む。8世紀後半。

②包含層出土遺物(第27図)

82・83は須恵器蓋である。82は、天井部外面に墨書が認められるが、判読できない。奈良時代後期～長岡京期。83は、須恵器杯B蓋で天井部ヘラ切り、内外面とも回転ナデである。84は、須恵器杯である。天地は不明である。底部はヘラ切り、他は回転ナデである。85・86は須恵器付Bである。いずれも高台が底部端近くに付される。87は、緑釉陶器椀で削出し高台で、胎土は明灰色、釉は緑褐色に発色する。11～12世紀。88は、土師器杯で口縁部はヨコナデ、外面底部付近は



第27図 出土遺物実測図(5)

ユビオサエ、内面はナデである。口径18.8cm。89は、土師器甕で口径20.2cmである。摩滅が著しい。90は、製塩土器である。上半のみ遺存し外面はナデ、内面はユビオサエである。体部に比して口径が狭く、厚さが1.5cmあり分厚い。胎土に長石・石英を含む。色調は茶褐色である。91・92は、凹基式石鏃である。一部欠損するが、91は長さ1.95cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重さ0.9g。92は長さ1.95cm、幅1.7cm、厚

さ0.25cm、重さ0.7g。サスカイト製である。

3. まとめ

今回の調査成果について簡単にまとめておく。有茎尖頭器は地山直上で出土したものであるが、周辺では同じ台地上に立地する下海印寺遺跡、右京第70次調査でも出土しており、旧石器時代末～縄文時代初めにかけての遺跡が広範囲に広がっていることを示唆するものである。

3トレンチ南端で検出した縄文時代中期の竪穴式住居SH190は、8トレンチ周辺で行われた河岸段丘上の調査で、縄文時代中期末～後期後葉にかけての遺物や竪穴式住居跡・土抗が多く検出されており、台地上にも集落が広がっていることが明らかとなった。また、縄文時代晩期と考えられる石冠は、京都府下では2例目の出土であり、その分布は中部地方を中心として出土するもので、地域間交流があったことを示すとともに、周辺に当該時期の遺構の存在を示唆する。

飛鳥時代の竪穴式住居跡や包含層出土の遺物などからすると、右京第70次調査で検出された竪穴式住居跡と同時期のものであり、今後集落の範囲が広がっていくものと考えられる。8トレンチ周辺では6世紀前半～中頃の住居跡が検出されているが、6世紀後半以降の住居跡は認められない。6世紀後半になると、集落は北方の台地上に移動した可能性も考えられる。

調査地周辺では、平安時代～鎌倉時代の遺構遺物が多く検出されたが、これらに比べると長岡京期の遺構・遺物はやや少ない状況であった。今回の調査で検出された建物跡については、正方位を示すもので今後、長岡京の土地利用を考える上で重要な資料となる。また、同時期の土馬が出土したことや廃棄土抗の存在など、周辺部にも長岡京に関する遺構が広がっている可能性がある。

時期不明の建物跡S B179・180に関しては方形の掘方を有するもので、第70次調査で確認されているものと同方向を向く傾向がある。周辺の調査結果からすると、長岡京期以後、平安時代前期には東に振る傾向があり、平安時代後期には再び正方位に戻ると指摘されている。右京第70次調査検出の建物跡については、13世紀にこの周辺が摂関家の荘園となったことから、荘官クラスの邸宅とも位置づけられている。時期・建物跡を特定することはできなかったが、2基の鍛冶炉、フイゴ羽口の出土など鍛冶生産関連遺構・遺物については、右京第70次調査で竪穴式住居跡から鉄滓が出土していることから古墳時代の可能性もあるが、周辺の遺構・遺物の検出状況からすると、平安時代の邸宅内に付随する鍛冶工房であったとも考えられる。

(増田孝彦)

注1 高橋美久二ほか「長岡京跡右京第70次(7ANOIR地区)調査概要」(「長岡京市文化財調査報告書」第9冊 長岡京市教育委員会)1982

注2 木村泰彦「長岡京跡右京城の調査 第324次(7ANOIR-2地区)調査略報」(「長岡京市埋蔵文化財センター年報」昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1990

注3 續伸一郎「長岡京跡右京の調査 右京第118次(7ANNM地区)調査概報」(「長岡京市埋蔵文化財センター年報」昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1983

- 注4 中島皆夫「長岡京右京第611次(7ANNM-2地区)調査概要—長岡京跡右京七条三坊十町、友岡遺跡」(『長岡京市文化財調査報告書』第42集 長岡京市教育委員会)2001
- 注5 中尾秀正「長岡京跡右京域の調査 右京第423次(7ANNKC-3地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1992
- 注6 中島皆夫「長岡京跡右京域の調査 右京第434次(7ANNKC-3地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1993
- 注7 竹井治雄「6. 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・友岡遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第111冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004
- 注8 竹原一彦「4. 長岡京跡右京第829次(7ANNM-5地区)・友岡遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第115冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 注9 戸原和人「4. 長岡京跡右京第856次(7ANNM-6地区)・友岡遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 注10 中川和哉「15.平成19年度京都第二外環状道路関係遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第106号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 注11 岩松保・大蔵由美子「長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について」(『京都府埋蔵文化財情報』第107号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 注12 杉江貴宏・坂内裕志・木村啓章・乾茂年・天池佐栄子・松下道子・阿保悠希・山本弥生・中島恵美子・山川幸乃・荒川仁佳子・福島厚子

5. 魚田遺跡第7次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、平成20年度一般府道富野荘八幡線地方道路交付金事業に伴う発掘調査を京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。魚田遺跡は、八幡市岩田南辺部と京田辺市の大住北辺部にまたがる弥生時代から中世までの遺物散布地として知られる遺跡である。今回の調査地は、京田辺市大住大峯に位置し、遺跡範囲の北東部分での遺構の確認を目的とした試掘調査である。

現地調査は、平成20年10月6日～11月12日の期間実施した。調査面積は、230㎡である。調査は、調査第2課長補佐兼調査第3係長石井清司ならびに同調査員村田和弘が担当し、現地調査および報告については村田が担当した。掲載とした魚田遺跡周辺の地形および破堤堆積物の考察については、増田富士雄(同志社大学理工学部・当調査研究センター理事)・伊藤有加(同志社大学工学研究科)・坂本隆彦(同志社大学聴講生)・佐藤智之(京都大学大学院理学研究科)が執筆した。また、

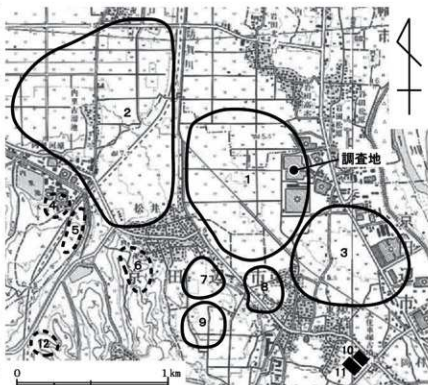
現地調査にあたって

は、京田辺市教育委員会ならびに京都府教育委員会、各関係機関の方々にご指導・ご教示を得た。記して感謝したい。

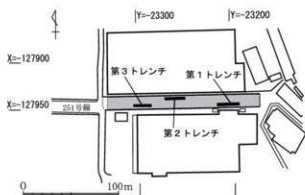
なお、調査に係る経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。

2. 位置と環境

京田辺市は、京都府南部に広がる南山城平野のはほぼ中央に流れる木津川の左岸に位置する。西部は生駒山地に連なる丘陵地帯で、東部は北に流れる木津川



第1図 調査地と周辺の遺跡(国土地理院 1/25,000 淀・宇治)
1.魚田遺跡(今回の調査地) 2.新田遺跡 3.門田遺跡 4.女谷横穴群
5.荒坂横穴群 6.松井横穴群 7.相合遺跡 8.西村遺跡 9.向谷遺跡
10.大住車塚古墳 11.大住南塚古墳 12.口仲谷古墳群



第2図 調査トレンチ配置図

遺跡などが所在する。南西側の丘陵裾部および谷地形には、古墳時代後期に属する女谷・荒坂横穴群や松井横穴群などがあり、さらに南側の谷筋裾部には口仲谷古墳群が所在する(第1図)。八幡市の南東部から京田辺市の北端部の丘陵および平野部は、数多くの遺跡が集中して分布する地域である。

3. 調査概要

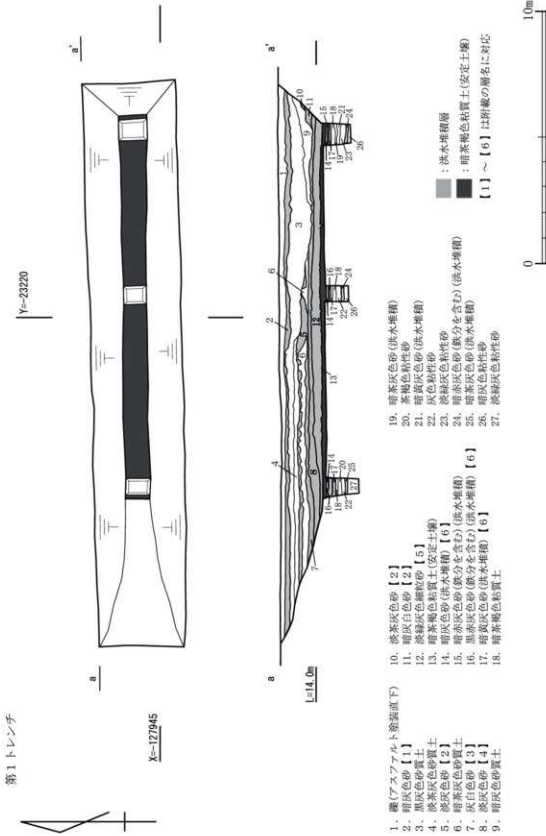
今回の調査地は、魚田遺跡においても北東端部にあたり、京田辺市大住大峯に所在する。調査は、遺構を確認するための試掘調査として、調査範囲内に3か所の試掘トレンチを設定し調査を実施した(第2図)。まず、重機による表土掘削を行い、遺構と思われる溝が確認できた粘土層の安定面まで掘削した。その後、人力による掘削作業を行い遺構の検出作業を進めた。試掘トレンチとして設定した調査地区を東から順に1～3トレンチと呼称し、遺構の確認作業を行った。

(1) 第1トレンチ 調査地内の東端部に設定した調査区である。現地表面から20cm程で現代の耕作面である黒色土の堆積層があり、その直下から約1.6mの深さまでは、数度にわたる木津川の氾濫(洪水破堤)によって堆積した砂の堆積層が続き、約1.9mで粘土質の安定面を確認した(第3図)。遺構の確認作業を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。さらに、下層遺構を確認するために3か所の断ち割り(約1.5m)を行ったが、10cm前後の砂と粘土層の互層が続くのみであった。しかしながら、トレンチ壁面では、木津川の洪水破堤によって形成された地形や洪水砂の堆積状況が良好に残っており、調査地周辺の地形の成因に関して良いデータを得ることができた。

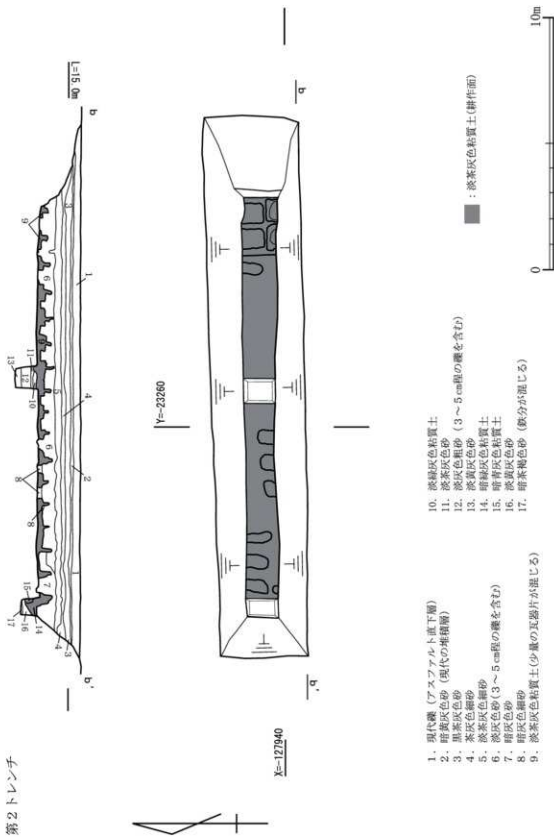
(2) 第2トレンチ 調査地の中央部に設定した調査区である。現地表面から20cm程で現代の耕作面、その直下約1.5mの深さまでは木津川の氾濫(洪水破堤)による数層の砂の堆積層、約1.8mで粘土質の安定面を確認した(第4図)。粘土質の安定面には、人力で掘削された溝状の遺構を確認した。溝は、南北方向に約1mの幅で等間隔に掘り込まれている。溝の底部には、鋤などの耕具使用痕跡が残っていた。また、一部であるが東西方向に区切られたものも確認した。溝の埋土は、洪水による砂で一度に埋まった状況が確認できた。溝状の遺構は、何らかの耕作溝と考えられるが、用途については不明である。この溝の埋土(第4図第6層)からは、土師器皿(第

によって形成された沖積地が広がっている。魚田遺跡の調査は、これまで6度の調査が実施されている。^(R.3)

周辺の遺跡として、北西側には弥生時代～古墳時代の集落跡で、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡、溝などの遺構が検出された新田遺跡^(R.3)、東側に飛鳥時代の竪穴式住居跡などが検出された門田遺跡、南側には中世の集落跡である向谷遺跡や西村

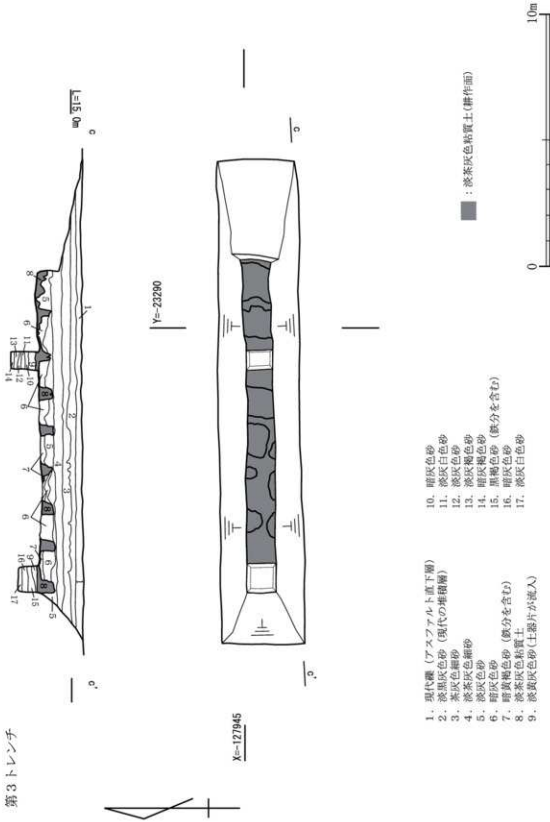


第2トレンチ



第4図 第2トレンチ平面・断面図

第3トレンチ



第5図 第3トレンチ平面・断面図

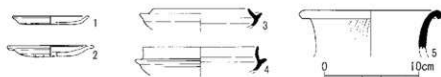
- 1. 現代礫 (アスファルト直下層)
- 2. 淡灰色砂 (現代の堆積層)
- 3. 茶灰色細砂
- 4. 漆茶灰色細砂
- 5. 漆灰色砂
- 6. 暗褐色砂 (雜分を含む)
- 7. 暗褐色砂 (雜分を含む)
- 8. 漆茶灰色粘質土
- 9. 淡灰色砂 (土器片が流入)

- 10. 暗灰色砂
- 11. 淡灰白色砂
- 12. 淡灰色砂
- 13. 漆灰褐色砂
- 14. 暗褐色砂
- 15. 暗褐色砂 (雜分を含む)
- 16. 暗灰色砂
- 17. 淡灰白色砂

■ : 漆茶灰色粘質土(耕作面)

X=127945

Y=23290



第6図 出土遺物実測図

堆積のため、この遺構の時期を示す可能性は低い。下層遺構を確認するために2か所の断ち割り(約1.2m)を行ったが、30cm前後の粘土層より下層は洪水による砂の堆積層であった。

(3) 第3トレンチ 調査地内の西端部に設定した調査区である。現地表面から20cm程で現代の耕作面、その直下約1.5mの深さまでは木津川の氾濫(洪水)による数層の砂の堆積層、約1.8mで粘土質の安定面を確認した(第5図)。粘土質の安定面で、2トレンチと同様の溝状の遺構を確認した。溝は、南北方向に約1.3mの幅で等間隔に掘り込まれて、底部には鋤などの耕具痕跡が残っていた。下層遺構を確認するために2か所の断ち割り(約1.2m)を行ったが、10cm前後の粘土層より下層は洪水による砂の堆積層であった。砂の堆積層(第5図第9層)から、古墳時代の須恵器杯身・壺の破片(第6図3～5)や土師器壺の破片(図版第6-3(出土遺物6))が出土したが、こちらも洪水による堆積のため、この層の時期を示す可能性は低い。

4. まとめ

今回の調査は、遺跡範囲および遺構の確認が目的の試掘調査であったが、等間隔に掘り込まれた溝群を除いて遺構は確認できなかった。今回、第2・3トレンチで確認した等間隔に掘り込まれた溝群は、詳細な時期については不明であるが、おそらくは近現代の耕作によるものと推測される。また、粘土層の上下では、各トレンチの断面観察により木津川の氾濫による洪水砂の堆積状況が確認でき、その堆積状況の観察から、氾濫による水および砂は主として北西方向に流れていたことがわかった。また、過去に複数回の氾濫による砂の堆積があることも確認できた。

今回の対象地内には、明確な時期を示す遺構の存在は確認できなかったが、後世の木津川の洪水破壊によって遺構が消失した可能性も考えられる。

(村田和弘)

- 注1 調査参加者川原淳司・松元章徳・村上優美子・長尾美恵子・大村潤子
ご指導・ご教示を頂いた方(敬称略)：増田富士雄(同志社大学理工学部・当調査研究センター理事)、
鷹野一太郎(京田辺市教育委員会)
- 注2 鷹野一太郎「魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報－大住地区は場整備事業地内の調査 その1」(「田辺町埋蔵文化財調査報告書」第22集 田辺町教育委員会)1997
中村周平「大住地区府営は場整備事業関係遺跡発掘調査概要 魚田遺跡第6次・西村遺跡・門田遺跡」
(「京都府遺跡調査概報」第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 注3 鷹野一太郎「新田遺跡発掘調査概報」(「京田辺市埋蔵文化財調査報告書」第27集 京田辺市教育委員会)1999
筒井崇史・岡崎研一ほか「新田遺跡第5次発掘調査概要」・「新田遺跡第6次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第94冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2000

附載 京都府京田辺市魚田遺跡付近の地形と洪水破堤堆積物

増田富士雄（同志社大学理工学部）・伊藤有加（同志社大学工学研究科）

坂本隆彦（同志社大学聴講生）・佐藤智之（京都大学大学院理学研究科）

1. はじめに

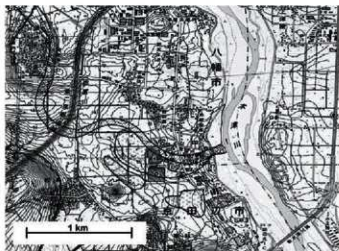
魚田遺跡の発掘トレンチ壁の地層を観察することができた。観察結果とこの付近の地形や表層地質の解析から、魚田遺跡付近の地形の成因に関して新しい知見を得ることができたので報告する。

2. 魚田遺跡の地点と周辺の地形

魚田遺跡付近の地形は、畑作地として利用されている微高地と、その周辺の湿田として利用されてきた低地、低地に刻まれた流路跡、さらに散在する集落(岩田、内里など)の盛り土が特徴である。

魚田遺跡は標高15.5mほどの微高地上にあり、周囲の低地より1mほど高く(第7図)、横断面はかまほこ型をしている。乾燥した畑作地からなる微高地は、1948年(昭和23年)に撮影された空中写真(第8図)で容易に識別できる。この傘形(ローブ状)をした高まり地形は、調査地点の約500m東方を北流する木津川の洪水破堤(堤防決壊)による堆積地形と考えられている(大矢・久保1993、植村ほか2007)。

この堆積地形の形成時期について、大矢・久保(1993)は1860年(万延元年)の“大住切レ”(巨椋池土地改良区1962)に、植村ほか(2007)は江戸時代後期かそれ以降、田辺町教育委員会(1997)は1896年(明治29年)の洪水でつくられたとし、この微高地をひとつの砂礫堆(大峰砂堆; 植村2007)として識別している。また、この微高地から蛇行しながら北西流する流路跡(第7図、第8図)と、南側の微高地との間の流路状の低地は、旧河道とされている(大矢・久保1993)。植村(2008)は南側の流路跡について、1802(享和2)年と1815(文化12年)の破堤に伴う洪水流がこの地形的な



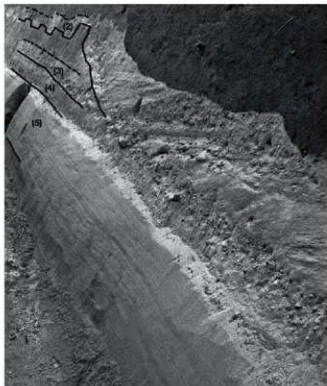
第7図 京都府京田辺市魚田遺跡の位置
国土地理院1/25,000「淀」「宇治」に、20cm間隔の等高線と、大矢・久保(1993)の地形分類図から“微高地”と“流路跡”の一部を加筆。



第8図 魚田遺跡付近の様子
○印が観察地点。1948年撮影の空中写真。第1図と同範囲同スケール。



第9図 上部の黒灰色粘質土（第3図の3層）の下部にみられる耕作痕（スケールはねじり鎌）



第10図 トレンチ北壁にみられる破堤堆積物【2】～【5】。砂礫層【2】層は谷状に分布し、写真の右から左に傾斜した（東から西に流れてきた）フォーセット面をもったトラフ型斜交層理を示す。これは調査地点では最も破堤場所に近い堆積物といえる。反対に下部の細粒砂層【5】層は破堤堆積物の縁辺相を示す。下部の細粒砂層【5】層の厚さが約45cm。

30cmで、砂質やシルト質の粘土が主で、根痕や生痕（巣穴や潜り痕）がみられた。泥は氾濫水の浮遊物質である濁りから沈積したもので、いわゆる“氾濫原泥層”である。

砂層と砂礫層は、木津川が運搬する堆積物の特徴である花崗岩類起源の鉱物粒子から構成され、細粒な砂は黄色、粗粒な砂は白色、砂礫層は灰色を呈する（第10図）。砂層と砂礫層は、一部基底での侵食で欠けるが泥層や耕作土層・土壤層で区切られる。すなわち、それぞれ違った時期に堆積した層であることがわかる。このトレンチ断面（第3図）では、厚さ5～60cmの砂層と砂礫層が6～8枚（第3図の【1】～【6】層）認められた。一枚の砂層や砂礫層の内部構造は、比較的単純で、何枚もの層が厚く重なるということはなく、また、重なった層の中で粒径が上方に細粒

凹地を流れたと考えている。

要するに、魚田遺跡のある微高地は江戸末期以降の比較的新しい時期の破堤堆積物からなるもので、周辺の流路跡は江戸後期以降の旧河道あるいは氾濫流の流路と考えられている。

3. 破堤堆積物

第1トレンチの断面で観察できた地層は、全層厚が約3.2mで、土壤層、耕作土層、泥層、砂層、砂礫層であった（第3図）。観察結果から、これらは河川の氾濫原堆積物が起源で、泥層は洪水氾濫水の浮遊物質起源で、砂層と砂礫層は破堤堆積物であり、土壌化した層や人間が改変した層を含むことがわかった。

耕作土には、耕作具で幅10～15cmで40～60度の角度で耕した結果できたと考えられる、長さ10～20cmの互層状の特徴的な構造が認められた（第9図）。また、地表面近くには厚さ20～40cmの有機質と思われる黒色の砂質土（第3図の第3層）がみられ、深さ約1mの窪地（凹地）を埋積していた。この黒色層には耕作に使われたと考えられるビニール製の網や紐や農業袋などが含まれ、最近40～50年以内の堆積物と考えられる。

泥層（第3図の第13層）は厚さ5～

化あるいは厚さが上方に薄層化するということもない。これは河川の流路堆積物(増田1988、1998、1999、2004)ではないことを示している。また、砂層の一部(例えば【3】層や【4】層)には、下位の泥層から上方に漸移し粗粒化するものがみられ、洪水氾濫堆積物の特徴(増田・伊勢屋1985、鈴木2000)を示す。

砂層や砂礫層には水流下で掃流運搬された結果できた堆積構造が発達する。一枚の層の内部の堆積構造の変化から、層が堆積するときに時間とともに、あるいは側方に水理条件が連続して変化していた様子が読み取れる。例えば、細礫まじり粗粒砂層(第3図【3】層)では、下部(厚さ18cm)の平行業理から、上部(厚さ30cm)の平板型斜交業理へと漸移している(第11図)。平行業理は水流エネルギーのより高い条件下で砂床上にできる平滑床の痕跡であり、斜交業理はより低いエネルギー条件下における砂堆(デューン)の移動によってできる構造である(増田1988、1999)。しかも斜交業理の角度はこの粒度での安息角より小さく(15~30度)、砂の供給量が多かったこと(増田2004、2005)を示している。すなわち、この砂層は供給量が多くしかも減衰する流れから形成されたものであることがわかる。そして上部が耕作土化していることから、洪水氾濫堆積物であるといえる。また別の例として、細粒砂層(第3図、第10図【5】層)では、下部は波状のフォーセット業理が下位の砂質泥の褐色土壌にダウンラップして前進型をとって堆積している(第12図)。これは供給量の多い場でできるクライミング構造であり、上部は平行業理に漸移している(第12図)。この砂層は、泥質であることから、広がる氾濫水から堆積量の大きいカレントリップルを伴ったフォーセット業理として急速に堆積し、さらに流速の増加あるいは堆積の進行による水深の減少などから高い水理条件の平滑床に変わったと思われる。しかもこの砂層は泥質でありながら砂質部は分級(淘汰)が良いことから、かなり安定した流れから、すなわちより下流側での堆積を示している。



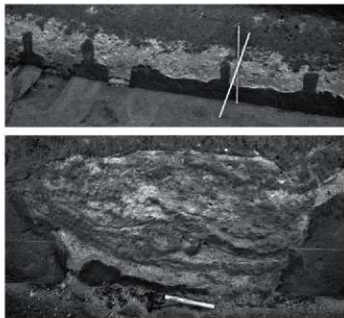
第11図 礫まじり粗粒砂層にみられる平行業理(下部)と斜交業理(上部)

下部から上部へと水流のエネルギーが低下したことがわかる。また、斜交業理の傾斜方向から画面の右から左への流れて堆積したことがわかる。(スケールはねじり鎌)



第12図 細粒砂層(第3図【5】層)にみられるクライミングフォーセット業理(下部)と平行業理(上部)

下部は写真の右から左に向かって砂の堆積が進行していったことが、フォーセット業理の傾斜方向からわかる。堆積構造の違いから、下部から上部へと水流のエネルギーが増加したことがわかる。(スケールは長さ10cm)



第13図 泥層に掘られた人工の溝に洪水が流れ込んで堆積した破堤堆積物の含礫砂層(白色部)。泥層の破壊片が混入している。(上:スケールは長さ1m、下:スケールのねじり鎌は長さ32cm)

今回の発掘地点の南西方向約250m付近でも同様の“耕作溝”の上を白灰色～白褐色砂の洪水堆積物が覆っており、分布標高や層序から推定すると、この砂礫層【2】層に連続すると思われる。

以上のことから砂層や砂礫層は洪水氾濫堆積物で、破堤や越流に伴って運ばれたものであるといえる。しかも堆積量が多いことからほとんどは破堤堆積物であるといえよう。すなわち、この付近の木津川の流路堆積物にみられる中礫～大礫が含まれること、耕作土や土壌を覆って堆積していること、供給源に近い場での堆積と思われる粗粒な層では側方で厚さの変化が大きく、縁辺部に堆積したと考えられる細粒層では一定の厚さで水平に堆積していること、強さが時間とともに変化する流れから堆積していること、周辺では氾濫原の泥層に移り変わっていること、堆積が何度も繰り返していることなど、破堤堆積物であることを強く示している。

ここで確認できた破堤堆積物の堆積年代は現在のところ決めることができない。破堤堆積物の堆積年代を木津川の洪水記録から推定してみよう。最も新しい【1】層は、ビニール製品が含まれる黒色層の上位にあることから(第3図)、昭和34年9月(伊勢湾台風)の破堤洪水(植村ほか2007)による可能性が大きい。この地点で最も粗粒な【2】層はその黒色層の下位にあることから、1896年(明治29年)の堤防決壊に伴う可能性が高い。この推定は、すでに述べたように、【2】層に連続すると思われる西に隣接する地点での“洪水砂層”に対する田辺町教育委員会(1997)による。これより下位で最も厚くしかも細粒(遠方由来)である【5】層は、この調査地よりやや上流地点での大きな破堤の出来事、1860年のいわゆる“大住ギレ”に由来すると考えている。

4. 古流向

洪水破堤堆積物と考えられる砂層や砂礫層には、すでに述べたように、堆積構造がみられる。それらは流れの中で底面に形成された小地形(ベッドフォーム)の痕跡である。例えば、斜交葉理

最も粗粒な砂礫層(第3図【2】層)は、基底が侵食面であることが多く、側方で厚さが大きく変化し、西北西～東南東方向に伸びた深さ50mの谷状地形がみられた(第3図、第10図)。砂礫層には峰がうねった砂堆(デューン)の移動によってできるトラフ型斜交層理(増田、2004)がみられる(第10図)。トレンチ西方では砂礫層は厚さと粒度を減じる。下位の土壌層には人工的な凹凸がみられる(第10図)。調査地点内の西側の別のトレンチでは、特徴的な人工の掘削穴をこの砂礫層が埋め尽くしている(第13図)。

田辺町教育委員会(1997)によれば、

や斜交層理はカレントリップルやデューンのフォーセット面の痕跡で、最大傾斜方向がその場所での流れの下流方向を示す(増田・岡崎1983)。トレンチで観察できる堆積構造から堆積時の流れの方向(古流向)を求めると、西北西へあるいは北西への流れを示すものが多い(第14図)。すでに述べた

【2】層がつくる小さな流路構造(第3図、第14図)

の伸びの方向も西北西-東南東であった。古流向は、破堤堆積物の砂層や砂礫層が木津川からもたらされたものであることを示している。

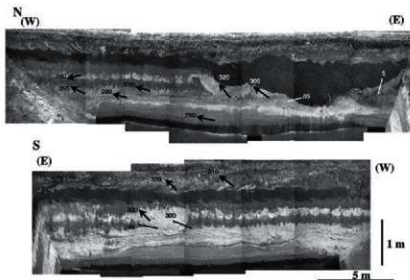
5. 微高地と低地上の流路跡の形成

魚田遺跡のある畑作地からなる微高地は、6～8枚以上の砂質や砂礫質の破堤堆積物の層が重なっており、1枚の厚い層からなる、すなわち1回の破堤事件でつくられたものからなるのではないことがわかった。これはすぐ西方での調査結果(田辺町教育委員会1997)からも、洪水砂層が複数枚存在するようにみえることと調和的である。

微高地付近にある旧河道とされた流路跡(第8図)は、表層部の地下地質(関西圏地盤情報協議会、2008)からみると、表層の泥層や砂層が侵食されてきており、表面だけにみられる侵食地形であることがわかる。すなわち、流路下に流路堆積物の厚い砂質層や、流路底のラグ堆積物の礫層がみられないことから、「旧河道」ではなく、破堤させた洪水流が泥質の氾濫原上につくった侵食性の流路跡であるといえる。空中写真判読や地形分類図(大矢・久保1993)から判断すると、これらの流路跡は破堤堆積物の集合体である微高地付近から発生しているようにみえる。

最も明瞭な流路跡である魚田遺跡のある微高地から北西に向かうものは、波長約800～1000mで蛇行をしている(第7図)。蛇行波長は形成した洪水流量や平均流量と関係するから(牧野ほか1981)、この波長からすると現在の木津川本流の洪水流量よりは小さいことがわかる。

魚田遺跡のある微高地はすぐ南の微高地(第8図、植村2008の門田砂堆)や周辺の小さな微高地と一連の堆積地形を形成している可能性が地下表層地質(関西圏地盤情報協議会2008)から推定できる。すなわち連続する粗粒な堆積物に思える。破堤によって微高地に堆積がおり、その洪水氾濫流が氾濫原上に流路跡をつくったのである。つまり、微高地と流路跡は破堤に伴ってつくられた一連の地形で、流路跡には破堤部の復旧がなされるまで洪水後も河川流が流れたと思われる。



第14図 トレンチ壁(北壁と南壁)で測定した古流向
流向は紙面上方を北として流下方向を時計回りの角度で表示。破堤堆積物が西あるいは北西へ運ばれて堆積したことがわかる。写真は縦横の縮尺が異なることに注意。

木津川が大きく屈曲する大住付近では過去に何回も破堤した記録があり(水戸1990、大矢・久保1993、植村ほか2007、鈴木2008)、これらの地形が幾回かの破堤に伴って形成されてきたという考えを支持している。

6. まとめ

京都府京田辺市の魚田遺跡のトレンチで観察できた地層の形態、堆積様式、古流向と、周辺の地形、地下地質、および洪水記録などから、魚田遺跡がある畑作地として利用されている微高地は、木津川の洪水破堤(堤防決壊)による堆積物が何枚も重なってできたもので、それに伴う流路跡は、洪水流が低地面の上を流れてきた侵食地形であることがわかった。

(謝辞)京田辺市教育委員会の鷹野一太郎氏には文献をご教示頂いた。記して感謝します。

引用文献

- 関西圏地盤情報協議会 (2008)「関西圏地盤情報データベース」CD-ROM-2008 版
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター (2000)「新田遺跡第5次発掘調査概要」「新田遺跡第6次発掘調査概要」京都府遺跡調査概報 94、73 - 106
 牧野泰彦・増田富士雄・桂 雄三 (1981)「河川堆積物から推定した“古流路”の形状特性値と水理量 - 茨城県の第四系を例として」茨城大学教育学部紀要 (自然科学) 30、71 - 86
 増田富士雄 (1988)「ダイナミック地層学 - 古東京湾の堆積相解析から - (その1 基礎編)」応用地質 (日本応用地質学会) 29 (4)、312 - 321
 増田富士雄 (1998)「ダイナミック地層学 - 堆積と累重の過程を明らかにする新しい地層学」深田研イブライリー (深田地質研究所) 17、71p
 増田富士雄 (1999)「透水層・帯水層のトレース:ダイナミック地層学からのアプローチ」地下水技術 (地下水技術協会) 41 (10)、1 - 15
 増田富士雄 (2004)「堆積システムと堆積物」堆積ショートコース・テキスト、日本堆積学会 (京都)、512p
 増田富士雄 (2005)「超高分解能層序学:地層から読み取る「年・月・日・時」地学雑誌 (東京地学協会) 114 (3)、419 - 433
 増田富士雄・伊勢屋ふじこ (1985)「“逆グレーディング構造”:自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の相堆積構造」堆積学研究会報 (堆積学研究会・日本堆積学会) 22/23、108 - 116
 増田富士雄・岡崎浩子 (1983)「筑波台地およびその周辺台地の第四系中にみられる方向を示す構造」筑波の環境研究 7C、99 - 110
 水戸政満 (1990)「近世木津川水害と年貢収納 - 川底の上昇による水害の深刻化」立命館文学 518
 巨椋池土地改良区 (1962)「巨椋池干拓誌」巨椋池土地改良区、828p
 大矢雅彦・久保純子 (1993)「淀川水害地形分類図・説明書」淀川工事事務所 130p
 鈴木一久 (2000)「洪水氾濫の堆積学」地研専報 (地学団体研究会) 48 69p
 鈴木一久 (2008)「近世における山城地域の水害」近畿大学教職教育部紀要 20 (1)、37 - 58
 田辺町教育委員会 (1997)「京都府田辺町魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報 - 大住地区は場整備事業地内の調査 その1」田辺町埋蔵文化財調査報告書 22、1 - 11
 植村善博 (2007)「京都盆地における堤内池沼の地形的・防災的意義」歴史都市防災論文集 1、67 - 74
 植村善博 (2008)「京都盆地南部、木津川・宇治川低地の水害地形」佛教学文学部論集 92、29 - 43
 植村善博・小林義仁・木村大輔・新藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史 (2007)「木津川・宇治川低地の地形と過去 400 年間の水害史」京都歴史災害研究 1、1 - 24

圖 版



(1) 蔵垣内遺跡全景(南上空から)



(2) A地区全景(上空から、左が北)



(1)D-1・E-1地区全景(上空から、右が北)



(2)G地区全景(上空から、左が北)

(1) A地区 S K 358 近景(南から)



(2) A地区 S K 358 近景
(上から、左上が北)



(3) A地区 S H 327 近景(南西から)





(1) A地区S H327竈近景
(南西から)



(2) A地区S H315近景(南東から)



(3) A地区S H315竈近景
(南西から)

(1) A 地区 S H328 近景 (南東から)



(2) A 地区 S H315 内遺物出土状況 (南東から)



(3) A 地区 S H311 近景 (南から)





(1) D-1 地区 S D45 近景
(西から)



(2) D-1 地区 S D45 内
遺物出土状況(南西から)

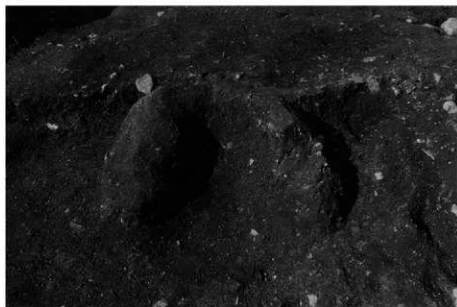


(3) D-1 地区 S K39 近景
(南から)

(1) D-1 地区 S H105・S K104
近景(北東から)



(2) D-1 地区 S H105 近景
(南東から)



(3) D-1 地区 S B14 近景
(南から)





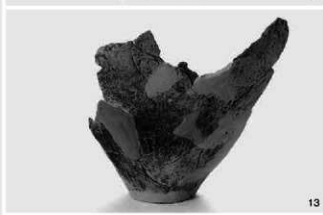
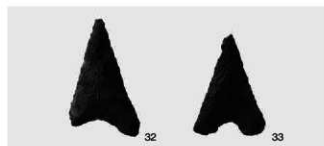
(1) D-1 地区 S K50 近景
(北西から)

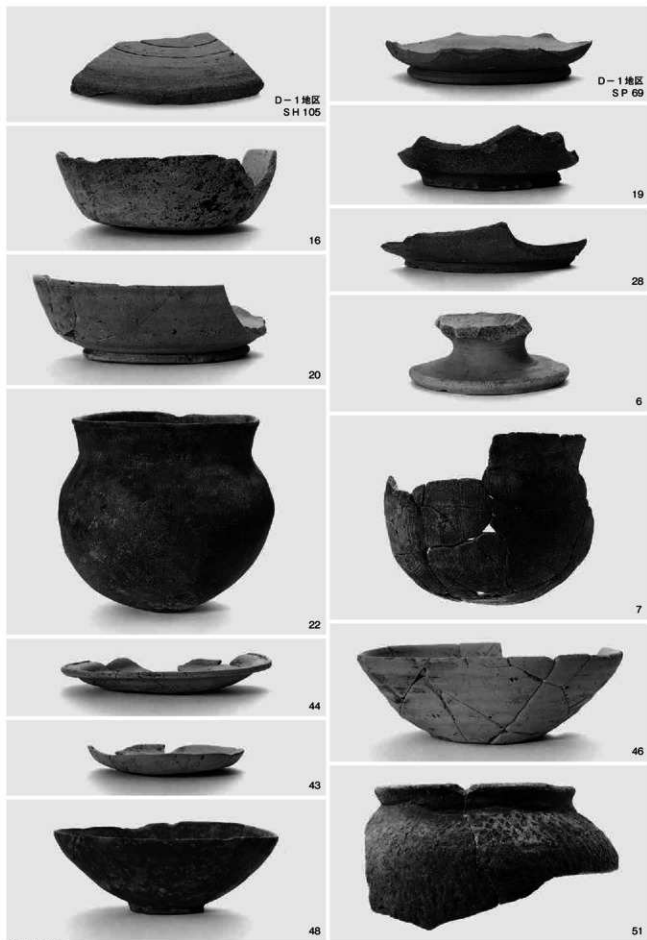


(2) G 地区 S K41 近景(北から)



(3) G 地区 S K39 近景(南から)







(1)調査前状況(北から)



(3)調査前状況(南から)



(2)調査前状況(南から)



(4)1区自然流路跡SR95301全段(南から)



(3) 2区の状況(北から)



(4) 2区近景(南から)



(1) 1区南濠土層断面(北東から)



(2) 1区南濠土層断面(部分)(北から)



(3) 3区全景(南から)



(4) 3区溝 S D95302断面(西から)



(1) 2区土層断面(北西から)



(2) 2区土層断面(部分)(西から)



(1) 3区溝S D95303断面(西から)



(2) 出土遺物(番号は遺物実測図に対応)



(1) 1トレンチ南西部全景(北西から)



(2) 1トレンチ北東部全景(西から)



(1) 1 トレンチ 竪穴式住居跡
S H02 全景(南東から)



(2) 1 トレンチ 竪穴式住居跡
S H05 全景(南西から)



(3) 1 トレンチ 土坑 S K13 全景
(西南西から)



(1) 1～3トレンチ全景(上が北)



(2) 2トレンチ全景(南西から)



(1) 2トレンチ火葬墓 S K03 全景(南西から)



(2) 2トレンチ火葬墓 S K03 全景(上が南)

(1) 2 トレンチ火葬墓 S K03土層
(南西から)



(2) 2 トレンチ火葬墓 S K03
完掘状況全景(南東から)

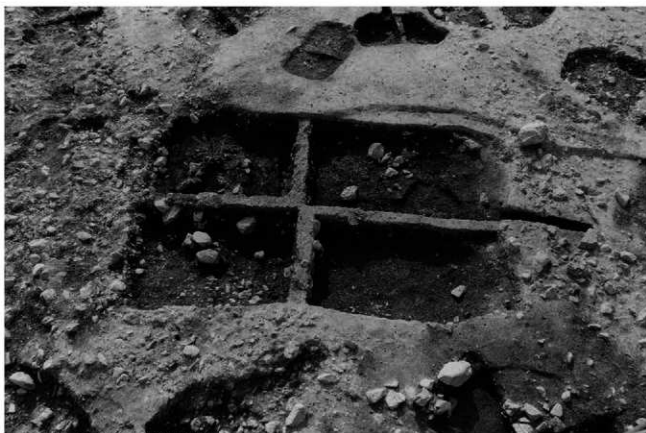


(3) 2 トレンチピット S P18内
遺物出土状況(東から)



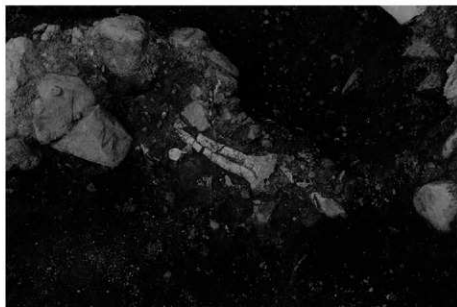


(1) 2トレンチ溝S D05全景(北から)



(2) 2トレンチ火葬墓S K26全景(南東から)

(1) 2トレンチ火葬墓S K26内
人骨検出状況(南西から)



(2) 2トレンチ火葬墓S K26内
人骨検出状況(北から)



(3) 2トレンチ火葬墓S K26
完掘状況(南西から)





(1) 2トレンチ竪穴式住居跡S H01全景(北西から)



(2) 2トレンチ竪穴式住居跡S H25全景(北から)

(1) 2トレンチ土坑S K20
検出状況(北から)



(2) 2トレンチ土坑S K20
半割状況(東から)



(3) 2トレンチ土坑S K20
完掘状況(西から)





(1) 1 トレンチ東端部
サブトレンチ(南から)



(2) 1 トレンチ東端部
サブトレンチ内検出崖面
(南西から)



(3) 2 トレンチ崖面 S X29 全景
(東北東から)

伊賀寺地区

(1) 2トレンチ土壌墓 S K07・06・
21・09(南から)



(2) 2トレンチ土壌墓 S K21・09
(西から)



(3) 2トレンチ土壌墓 S K02
(東から)



伊賀寺地区



(1) 2トレンチ土壇墓SK27
(東から)



(2) 2トレンチ土壇墓SK19
(北から)



(3) 2トレンチ土壇墓SK11
(西から)



(1) 3トレンチ全景(南から)



(2) 3トレンチ全景(北から)

伊賀寺地区



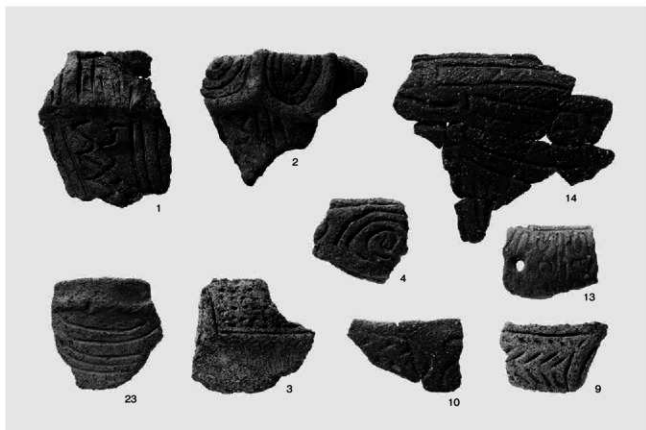
(1) 3トレンチ堅穴式住居跡
SH20全景(南東から)



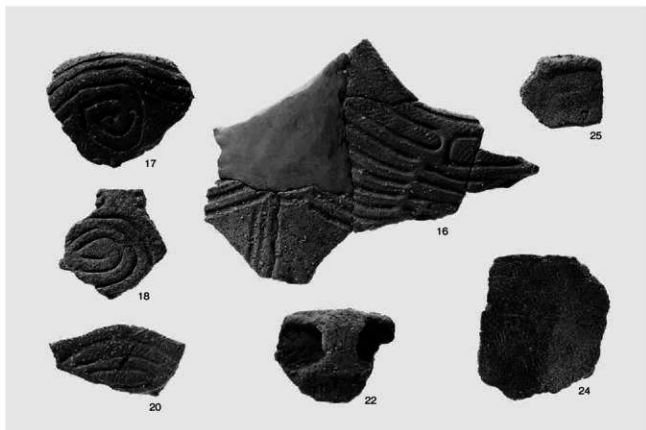
(2) 3トレンチ堅穴式住居跡
SH20床面遺物出土状況
(北西から)



(3) 3トレンチ炉跡SK19
完掘状況(北東から)



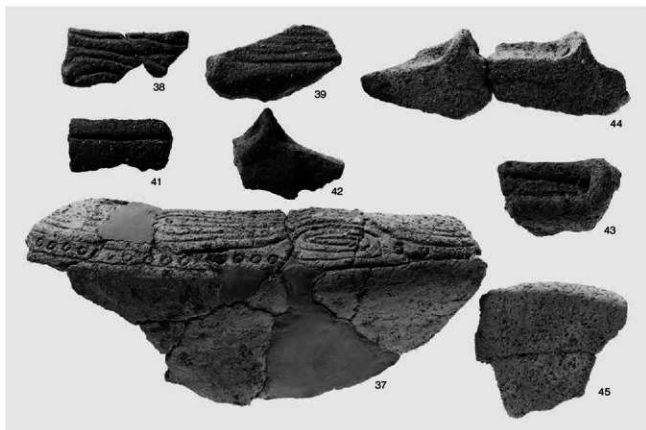
(1)出土遺物 1



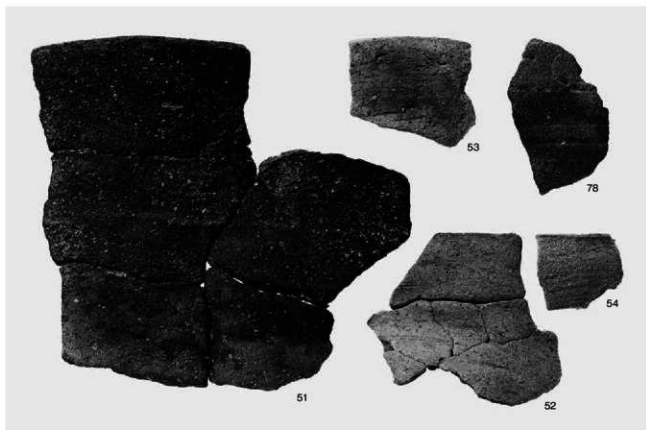
(2)出土遺物 2



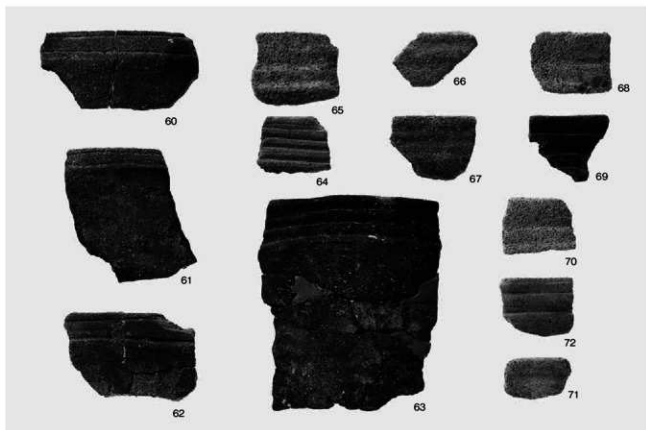
(1)出土遺物 3



(2)出土遺物 4



(1)出土遺物 5



(2)出土遺物 6



21



118



121



122



79



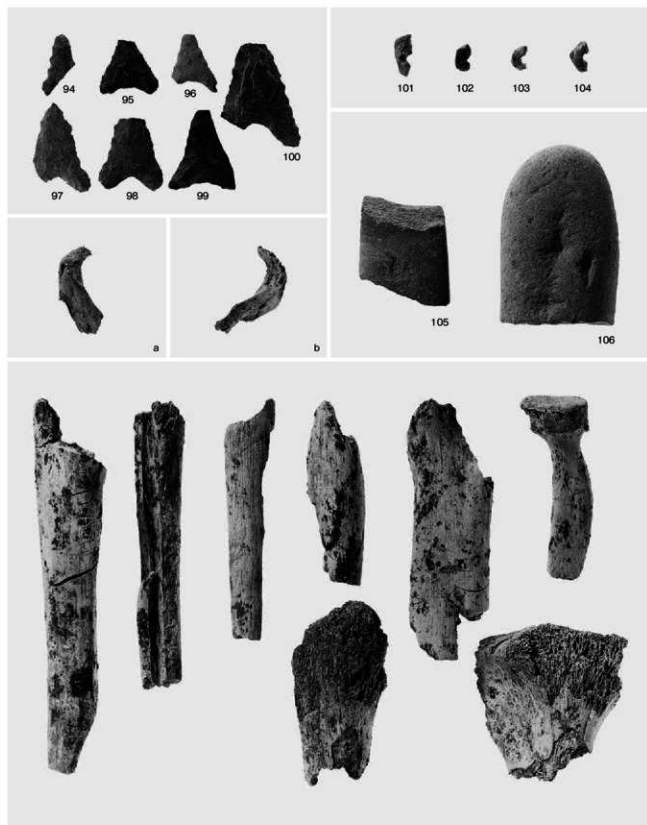
123



90



90



出土遺物 8



(1)調査トレンチ全景(南から)



(2)東壁土層(西から)

調子地区

(1) 1 トレンチ全景(北から)



(2) 2 トレンチ全景(西から)



(3) 2 トレンチ東壁(西から)



円明寺地区



(1)長岡京跡右京第939次・松田遺跡2トレンチ全景(南東から)



(2)長岡京跡右京第940次・畷遺跡1トレンチ全景(北東から)



(3)長岡京跡右京第940次・畷遺跡3トレンチ全景(南東から)

円明寺地区

(1)長岡京跡右京第940次・稻遺跡
3トレンチ東壁(西から)



(2)長岡京跡右京第940次・稻遺跡
4トレンチ全景(南から)



(3)長岡京跡右京第940次・稻遺跡
4トレンチ西壁(東から)



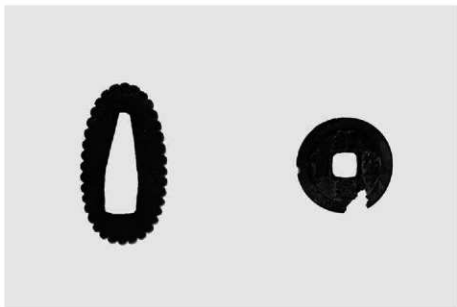
円明寺地区



(1)長岡京跡右京第940次・竈遺跡
4トレンチ南壁(北から)



(2)長岡京跡右京第940次・竈遺跡
5トレンチ全景(西から)



(3)長岡京跡右京第940次・竈遺跡
出土遺物



(1)調査地全景1～3トレンチ(上が北)



(2)調査地全景1～8トレンチ(上が北東)



(1) 調査地全景 3・4 トレンチ (上が南東)



(2) 調査地全景 1～3 トレンチ (上が北西)

(1) 1・2トレンチ調査前全景
(南西から)



(2) 3・4トレンチ調査前全景
(北東から)



(3) 1トレンチ全景(南から)





(1) 2・3トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ土坑 S K149
検出状況(北東から)



(3) 2トレンチ土坑 S K149
遺物出土状況(南東から)

(1) 2 トレンチ S K 149 完掘状況
(北東から)



(2) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B 40 (北から)



(3) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B 40 (西から)





(1) 2 トレンチ溝 S D02・30 全景
(西から)



(2) 2 トレンチ土坑 S K150
(北から)



(3) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B179(北西から)

(1) 2 トレンチ掘立柱建物跡
S B 180(南西から)



(2) 3 トレンチ掘立柱建物跡
S B 120・121(南西から)



(3) 3 トレンチ掘立柱建物跡
S B 120(西から)





(1) 3トレンチ掘立柱建物跡
S B121(南西から)



(2) 3トレンチ土坑SK140
(南から)



(3) 3トレンチ竪穴式住居跡
SH190遺物出土状況(西から)

(1) 3トレンチ竪穴式住居跡
S H190完掘後(南西から)



(2) 4トレンチ全景(東から)



(3) 4トレンチ掘立柱建物跡
S B130(北から)





(1) 4トレンチ竪穴式住居跡
SH175(南東から)



(2) 4トレンチ竪穴式住居跡
SH175(北西から)



(3) 4トレンチ竪穴式住居跡
SH175遺物出土状況(東から)

(1) 5トレンチ調査前全景
(南西から)



(2) 5トレンチ西半分全景
(東から)



(3) 5トレンチ東半分全景
(南西から)





(1) 5トレンチ掘立柱建物跡
S B330(北西から)



(2) 5トレンチ土坑S K222
(南から)



(3) 5トレンチ土坑S K222
完掘状況(南から)

(1) 5トレンチ土坑S K298
(南から)



(2) 6トレンチ調査前全景
(南から)



(3) 6トレンチ全景 (北から)





(1) 6トレンチ全景(北西から)



(2) 7トレンチ調査前全景
(南から)



(3) 7トレンチ全景(南から)

(1) 7トレンチ土器溜まりSK
221・不明遺構SK263(北から)



(2) 7トレンチ不明遺構SK263
(東から)

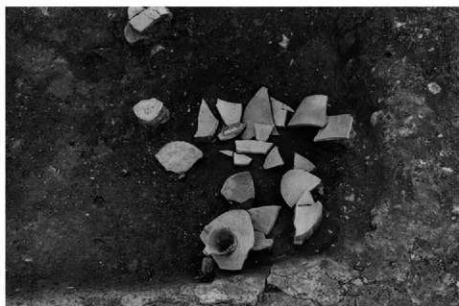


(3) 7トレンチ土器溜まりSK221
(東から)





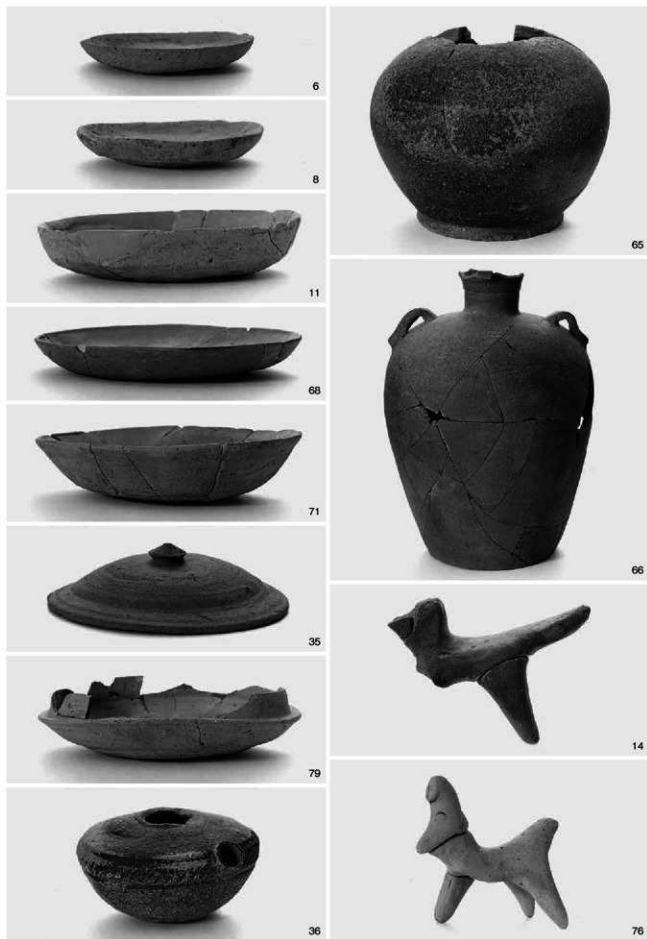
(1) 7トレンチ土器溜まりSK221
遺物出土状況(北から)

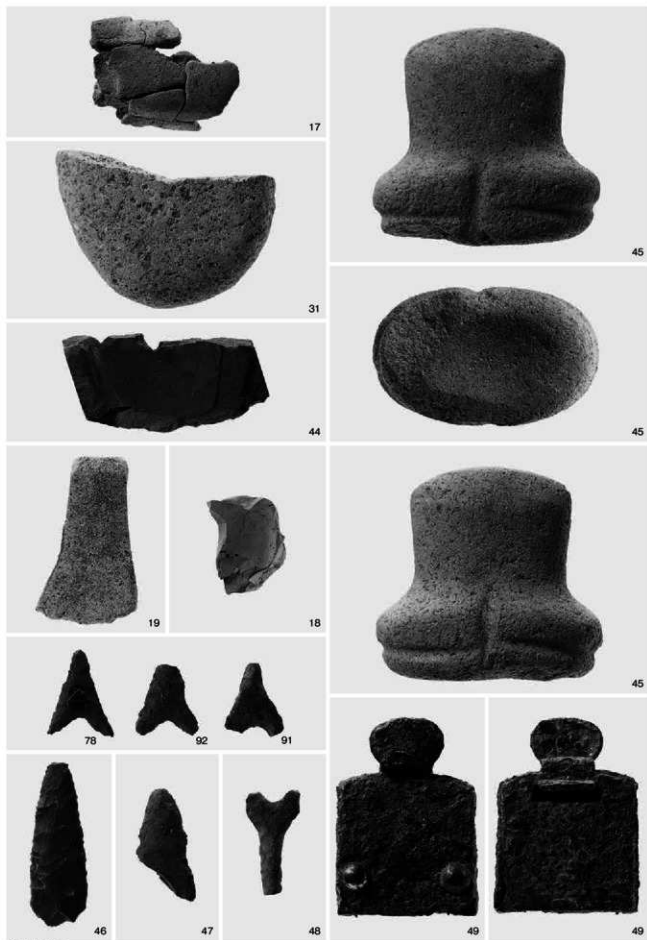


(2) 7トレンチ土器溜まりSK221
二耳壺出土状況(西から)



(3) 7トレンチ土器溜まりSK221
完掘状況(東から)





(1) 調査地遠景(西から)



(2) 調査前全景(南から)



(3) 第1トレンチ重機掘削
作業風景(東から)





(1) 第1トレンチ全景(西から)



(2) 第1トレンチ人力掘削
作業風景(北西から)



(3) 第1トレンチ東壁断面
(西から)

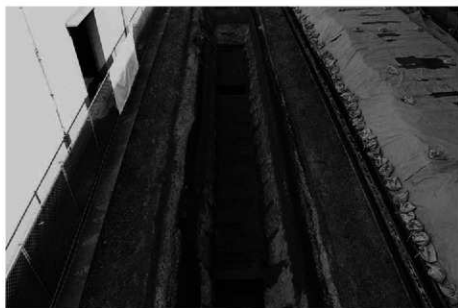
(1) 第1トレンチ北壁断面①



(2) 第1トレンチ北壁断面②



(3) 第2トレンチ全景(西から)





(1) 第2トレンチ溝状遺構掘削
作業風景(南から)



(2) 第2トレンチ溝状遺構
完掘状況(南から)



(3) 第2トレンチ溝状遺構
完掘状況(東から)

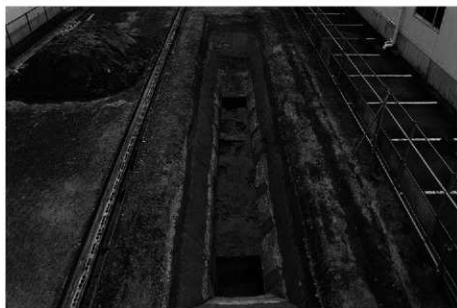
(1) 第2トレンチ南壁断面
(南から)



(2) 第2トレンチ南壁と溝状遺構
(北から)



(3) 第3トレンチ全景(西から)

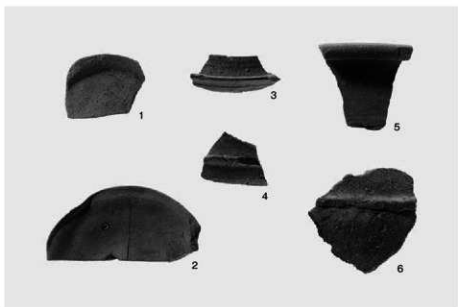




(1) 第3トレンチ南壁と溝状遺構
(北東から)



(2) 第3トレンチ南壁と溝状遺構
(北から)



(3) 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第133冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Tel.075(933)3877
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
くらかいちいせきだい じゅういちじ 蔵垣内遺跡第11次	きょうとふかめお かしちとせちよう こくふしたんだ・ ひろがいち・しよ うだ・うちがさう ち	26206 37	35° 2' 19"	135° 34' 57"	20071015 ～ 20080310	2,480	道路建設
ながおかきょうあとう きょうだいきゅうひゃ くこじゅうさんじ 長岡京跡右京第953次	きょうとふなが おかきょうしにし のきょうちない 京都府長岡京市市 西の京地内	26209 96 97	34° 56' 41"	135° 41' 30"	20080924 ～ 20081203	720	道路建設
ながおかきょうあとう きょうだいきゅうひゃ くさんじゅうはちじ、 きゅうひゃくよんじゅ うじ(はざまいせき)、 きゅうひゃくよんじゅ うさんじ(いがいせ き)、きゅうひゃくさ んじゅうきゅうじ(ま つだいせき) 長岡京跡右京第938次、 940次(筋遺跡)、943次 (伊賀寺遺跡)、939次 (松田遺跡)	きょうとふながお かきょうししもか いいんじいがじ、 ちようしにちよう め、ちようしさん ちようめ、おとく にくんおおやまざ きちようあざえん みょうじこあざま つだ	26209 96 97 104 107 23	34° 54' 54"	135° 41' 13"	20080507 ～ 20080730	1,805	道路建設
ながおかきょうあとう きょうだいきゅうひゃ くじゅうじ・きゅう ひゃくよんじゅういち じ・ともおかいせき・ いがいせき 長岡京跡右京第910次・ 941次・友岡遺跡・伊 賀寺遺跡	きょうとふながお かきょうしともお かにしはた、しも かいいんじいが じ・しもうちだ 京都府長岡京市友 岡西畑、下海印寺 伊賀寺・下内田	26209 2002 96 97	34° 54' 58"	135° 41' 16"	20070726 ～ 20080130 20080424 ～ 20081031	1,200 2,200	道路建設

うおたいせきだ いななじ 魚田遺跡第7次	きょうとふきよ うたなべしおお すみおおみね 京都府京田辺市 大住大塚	26212	34° 50' 59"	135° 44' 34"	20081006 ～ 20081112	230	道路建設
----------------------------	---	-------	-------------	--------------	---------------------------	-----	------

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蔵垣内遺跡第11次	集落跡	縄文 弥生 飛鳥 平安	土坑・方形周溝墓 竪穴式住居跡 掘立柱建物跡・土坑	縄文土器・石鏃 弥生土器 土師器・須恵器 土師器・瓦器・白磁	縄文時代早期の土器が出土
長岡京跡右京第953次	都城		なし	縄文土器・石器・須恵器・灰輪陶器・瓦	
長岡京跡右京第938次、940次(畷遺跡)、943次(伊賀寺遺跡)、939次(松田遺跡)	集落跡	縄文 弥生 中世	竪穴式住居跡・火葬墓・土墳墓 流路跡	縄文土器・石鏃 弥生土器 切羽・銭貨	縄文時代中期の石囲い伊、縄文時代後期の火葬墓
長岡京跡右京第910次、941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	集落跡	縄文 古墳 奈良 平安 鎌倉	竪穴式住居跡 竪穴式住居跡・ビット 掘立柱建物跡・溝・土坑・ビット 掘立柱建物跡・土坑・ビット 土坑・ビット	土器・石冠・有茎尖頭器 須恵器・土師器 須恵器・土師器・土製品 須恵器・黒色土器 土師器・瓦器・製塩土器	縄文時代の集落が展開 石冠・有茎尖頭器が出土
魚田遺跡第7次	集落跡	近現代	耕作溝	須恵器・土師器	木津川の破壊による堆積層を確認

所収遺跡名	要 約
蔵垣内遺跡第11次	縄文時代早期の押型土器をはじめ、弥生時代中期の方形周溝墓や土器棺墓、飛鳥時代の竪穴式住居跡を複合的に検出した。亀岡盆地を代表的な複合遺跡であることが判明した。
長岡京跡右京第953次	南西から北東方向への氾濫による自然流路などを検出したが、明確な遺構は検出できなかった。包含層中にローリングを受けた縄文時代の叩石や弥生時代の磨製石剣、白鳳期の瓦片などが出土した。
長岡京跡右京第938次、940次(畷遺跡)、943次(伊賀寺遺跡)、939次(松田遺跡)	右京938次調査では弥生時代から平安時代の遺物が洪水による再堆積から出土した。畷遺跡・松田遺跡では小泉川旧流路の古代から中世にかけての堆積状況が明らかとなった。伊賀寺遺跡では縄文時代中期末の竪穴式住居跡と縄文時代後期の竪穴式住居跡・火葬墓・土墳墓、弥生時代後期の竪穴式住居跡などを検出した。
長岡京跡右京第910次・941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡	条坊復元では右京七条三坊十一・十三・十四町にあたる。縄文時代中後期の土器や石器、晩期の石冠、飛鳥時代の竪穴式住居跡、長岡京期から平安時代の掘立柱建物跡を検出した。小泉川に隣接する代表的な複合遺跡である。
魚田遺跡第7次	魚田遺跡の北東端にあたる地点で、遺構の確認を目的とした試掘調査を実施した。近現代と思われる溝群を除いて顕著な遺構は検出できなかったが、木津川の破壊による砂の堆積状況を知るうえで良好なデータを得た。

京都府遺跡調査報告集 第133冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141